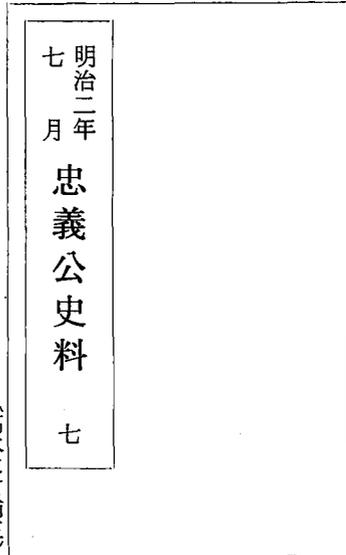


〔稿本表紙〕



〔稿本にて補正〕

三五七 濱御殿下馬下乗ノ規定ヲ回達シ、大手門ノ無印鑑通行ノ差留ヲ達ス

一日、東京ニテハ、今般英国王子エチンバラ(Alfred Duke of Edinburgh)公殿下渡来ニ付、濱御殿ニ於ケル下馬下乗ノ規定ヲ回達セラレ、翌日又同大手門ノ無印鑑通行ヲ差留メラル、其ノ達書左

ノ如シ、
一濱殿下馬下乗之儀、親王・輔相ハ御構内大番所前、三等官以上并華族ハ大手門橋際、四等官以下ハ下馬札之

処ニ被相定候間、此旨相達候事、

七月〔六月二十九日〕 行政官

右御呼出ニテ、官掌井上勝彌を以て御渡相成候旨、月番伊州様より廻達有之候事、

已七月朔日

^{三五七ノ一}一英国王子在留中、諸官員其外末々ニ至ル迄、濱殿大手門無印鑑之者通行差留候間、御用有之面々ハ、外国官より通行印鑑可相渡候条、兼て受取可罷出候事、

七月〔六月晦日〕 行政官

右二通(一通ハ上地ノ事)御呼出之上、官掌柴野辰太郎を以御渡相成旨、月番より申来候事、

已七月二日

三五八 外国官御用掛試補溝口吉左衛門職務被免ニヨリ、出張先ヘノ申達ヲ藩庁ニ交渉ス

コノ日、又東京ニテハ、外国官御用掛試補溝口吉左衛門職務ヲ免セラレタルニヨリ、大坂・長崎・鹿兒嶋等出張先へ追尾シテ申達スベキヲ、藩庁ニ交渉セリ、其ノ書状

左ノ如シ、
三五八ノ一

溝口吉左衛門

巳七月朔日

知政所

田中清之進

右職務差免候事、

六月

外国官

三五八ノ三

外国官御用掛試補

別紙老通相達候、其段可被申渡者也、

外国官

溝口吉左衛門

六月十五日

判事

御名 殿

公用人中

右は、職務被差免候旨、別紙之通御達相成候、然処当分其許又は長崎之間ニ罷居候由ニ付、其許へ罷在候ハ、御書付被相渡、出崎後ニ候ハ、彼方へ被申越候儀共、旁可然御取計可給候、此旨申越候、以上、

右之通到来ニ付、御国元并当人大坂辺へ罷居候由ニ

巳六月廿日

田中清之進

付、彼方へも申越候事、

大坂

永山源兵衛殿

三五八ノ二

外国官御用掛試補

溝口吉左衛門

巳六月廿五日

永山源兵衛

田中清之進

右職務被免候旨、別紙之通御達相成申候、然処当分大坂・長崎之間ニ罷在候由ニ付、御書付渡方之儀、大坂詰公用人へ申越、同所へ不罷居候ハ、長崎へ可差越旨も、申越置候得共、自然其御許へ罷居候ハ、御達相成候儀共、宜敷御取計有御座度、此段申上越候、以上、

三五九 海江田信義彈正大忠ニ任セラル

コノ日、海江田信義彈正大忠ニ任セラル（補任録）

(注意) 国の礎ニハ二十一日トアリ [本文記載なし]

三六〇 諸藩ノ外国船雇入レ及ヒ開港場ヨリ東京

廻リノ者ノ許可届出ニツイテ達ス

三日、東京ニテハ、諸藩ニテ外国船ヲ雇入レ、品川ヨリ乗込ム者ハ、東京運上所ノ許可ヲ受ケ、又開港場ヨリ東京廻リノ者ハ、品川ニテ運上所へ届出テ、上陸スベキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

一諸藩おるて雇入候外国船、品川沖へ乗入投錨、直ニ上陸いたし、又候品川沖於て外国船へ乗組出帆いたし、運上所へ不相届向も有之、御取締ニ拘り候間、以後外国船雇入、品川沖より乗組候向は、東京運上所之免許を受、又開港場ニテ雇入、東京へ相廻り候分は、品川沖投錨、即剋運上所へ相届、上陸可致旨被仰出候事、

七月(二日) 行政官

右御呼出之上、官掌伊藤民之助を以御渡相成候旨、
月番筑州藩外式藩より申来候事、

已七月三日

三六一 福昌寺戦亡帳記載ノ戦亡者モ靖献霊社ニ

合祭シ配祀ノ礼ヲ以テ執行スヘキヲ達ス

五日、藩庁ニテハ、従来福昌寺戦亡帳ニ記載セル戦亡者ノ為メニ、毎年七月二日追遠会ノ仏事ヲ施行シ来リシモ、孟蘭盆会廃止ニ付、明日靖献霊社ヲ合祭シ、尔後配祀ノ礼ヲ以テ執行スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一是迄福昌寺戦亡帳江被載置候人数、毎年七月二日仏家之作法を以、追遠会被成下来候得共、今般孟蘭盆会被廢候付、当年より靖献霊社江御会祭相成、明六日御神事より配祀之礼を以御執行被成下候条、向々江可申渡候、

明治二已七月五日 知政所

三六二 藩庁下町海岸ニ番所ヲ建設シテ諸色方ヲ

置ク

コノ日、又藩庁ニテハ、下町海岸ニ番所ヲ建設シ、諸色方ヲ置キ、会計奉行及ヒ監察、并ニ会計局調役ヲシテ、交代出務セシムベキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一此節下町津畑江番所御造建相成候付、右二階江諸色方被召建候条、會計奉行并監察・會計局調役繰廻を以、出席被仰付候旨被 仰達候条、可承向江可申渡候、

明治二己七月五日

知政所

三六三 藩庁會計局調役・同助ノ官等ヲ規定ス

コノ日、又藩庁ニテハ、會計局調役・同助ノ官等ヲ規定セリ、其ノ達書左ノ如シ、

一會計局調役

右六等官

但勘定役之頭

一右同調役助

右八等官

右之通官等被召建候旨被 仰達候条、會計總裁江申渡、可承向へも可申渡候、

明治二己七月五日

知政所

三六四 寺島宗則悪幣通用問題交渉ノ覚書ヲ受ケ

各国公使トノ協議会ヲ開クコトヲ報ス

六日、外国官副知事寺島宗則、外国公使名代英国公使ト面晤シ、悪幣通用問題交渉ノ覚書ヲ受ケ、来ル十日高輪應接所ニ於テ、關係諸官ト各国公使トノ協議会ヲ開クベキヲ、外国官知判事ニ報セリ、其ノ書翰及覚書左ノ如シ、
只今英国公使、他之各国公使為ニ名代ニ裁判所へ差越、
三六四ノ

明日ニモ東京へ出府、輔相始め應接之積ニ候処、節句ニ付御差支モ可有之、且應接之趣大意申入置度、別紙覚書相渡申候、右ハ差急キ翻訳之間モ無之、其俟差進申候、来ル十日朝、五箇国公使一同、第十一字ヨリ高輪應接所へ差越可申積ニ付、輔相公・岩倉公・澤公其外伊達公ハ勿論、會計官へ關係之儀ニ付、其知官事始其外、右ニ關係スル高位之諸官御應接有之度、且公使之内ニモ病氣ニテ、步行難成体之人も有之候へ共、大切之儀故、押テ出府致シ候ニ付、此應接ニ要用之各位、少々ノ御不快ハ、押テモ御出張相成度旨申聞候、尤明夕刻迄ニハ是非トモ否御答有之度ト申事ニ候、且金札之儀ニ付テノ御答書ハ、應接前ニ篤ト勘弁致シ置度、
翻訳致サセ候ニモ、一日モ相掛候ニ付、此又明日中ニハ御差越相成度旨申聞候、将又貴政府ヨリ英国へ被差出候御書翰ハ、必東京英公使館へ御送り可被下ト申事

ナリ、

七月六日夕第八字

尚以来ル十日ハ、応接濟直ニ帰港之積ニ有之候間、
十一字ヨリ相始リ候ハ、三四字ニモ可相成モ難計
候ニ付、其御心得ニテ、朝飯等疾ニ御仕舞置可被成
候、且亦拙者ニモ其席へ罷越呉候様申聞候ニ付、明
後八日出府、猶又委細御談可申候也、

外国官

知官事

判官事

御中

寺島四位(宗則)

三六四ノ二
覚書

日本通用金性合等混乱ニ付、外国貿易ニ大害ヲ起シ候
ニ付、左之廉々を速ニ所置アラン為メ、各国公使等、
輔相三條右大臣(實親)・議定岩倉右兵衛督、及外国官知事澤
右衛門権介閣下ト面晤センコトヲ要ス、
(宣惠)

第一

是迄 天皇政府、或ハ徳川、又ハ他ノ大名ニテ鑄造セ
シ一分銀並二分金ハ、国内通用金ト為シ、且 天皇政

府ニテ相当ト思フ他ノ貨幣ヲ吹立、追々引換ル迄ハ、
右通用金無差支日本部内通用スヘキ旨ヲ、 天皇政府
ニテ証明スヘキ事、

第二

外国人又ハ日本人ヨリ、日本貨幣ニテ政府へ納ムヘキ
地稅・租稅、或ハ運上ヲ 天皇政府ニ於テ、右ノ貨幣
ニテ請取ルヘキ旨ヲ、 天皇政府証明スヘキ事、
日本貨幣仕立方ニ付、天皇政府ニテ施セシ処置振ヲ、
右面会ノ節、閣下等ヨリ各国公使委細承知致シ度事、
右一件ノ弁解ヲ、各国公使へ外国知官事及會計副知事
ニテ約セシ事、既ニ三ヶ月余越タレ共、未タ其約ヲ果
サ、リシ故ナリ、

千八百六十九年八月十三日横濱ニ於テ

三六五 中井弘晒布二疋并金千両ヲ下賜セララル

コノ日、中井弘藏勤仕中、格別励精ノ廉ヲ以テ、晒布二
疋并ニ金千両ヲ下賜セララル、ソノ辞令左ノ如シ、

中井弘藏(弘)

勤仕中格別励精之段、神妙之事ニ候、依之晒布二疋・

金千両下賜候事、

三六六 官制位階ノ改定ニヨリ、大久保利通ハ木

戸等ト共ニ待詔院学士ニ補セラル

八日、官制位階ノ改定アリテ、大久保利通ハ木戸・後藤・板垣ト共ニソノ勤勞ヲ賞シ、劇職ヲ解クヲ諭サレ、御太刀一腰ヲ賜ヒ、待詔院^{尋テ}学士^{出仕ト改ム}ニ補セラル、ソノ次第左ノ如シ、

大久保利通日記

八日

今朝訪吉井、兵隊ノ事云々承ル、二字参 朝、尤礼服御用召也、

御書付一通

御太刀一腰

椿菊桐御紋赤銅七子地

小御所出御、於

御前拜領被 仰付、恐多年来励精大儀思食候、尚前途

努力セヨトノ

勅語下サレ、輔相卿ヨリ、是迄不一方国事尽力大儀ニ

被思食、今度散官ニ被仰付候ヘトモ、尚前途御大事ニ付、尚更努力イタシ候様云々御沙汰ニテ、御書附被渡、御太刀ハ弁事ヨリ御渡ニテ候、誠ニ恐縮ノ至ニ堪ヘス、感泣無他、

待詔学士 宣下ノ御書附一通、麝香ノ間上席、從輔相公御渡ニテ、尚御口達ノ趣、是迄格別尽力、今日ノ盛時ニイタリ候ハ、畢竟其方等ノ力ニ依リ候、尚今日軫セラル、トイヘトモ、夫々人ノ揃候迄ハ、別テ多端ノ折柄ニ付、毎日出勤大政輔佐仕候様云々、

木戸同様ニ被仰付候、

板垣待詔学士同断、

後藤被免限リニ候、

今日御政体被相改、

右大臣

大納言

同

参議

病

三字退散、

一今夜五代入来、

三條右大臣

岩倉大納言

徳大寺大納言

副島四位

前原彦太郎

三六七 寺島宗則外務大輔ニ任セララル

コノ日、外国官副知事寺島宗則外務大輔ニ任ゼラル(補任録)

(又六國ノ確) (本文記載なし)

三六八 錢相場金壹両ニ付十貫文ニ定メラル

十日、天下一般錢相場、金壹両ニ付十貫文ニ定ムヘキヲ達セララル、

御布告書〔七月十日〕

天下一般錢相場、金一両ニ付十貫文ニ御定ニ相成候間、此旨相達候事、

三六九 小牧昌業太政官少史ニ任セララル

コノ日、官制改定ノ結果、行政官ヲ太政官ト改メラレ、小牧昌業同少史ニ任セララル(補任録) (本文記載なし)

三七〇 島津久光・毛利敬親ヲ東京ニ召サル

十一日、朝廷御用ノ為メ、久光公ヲ毛利公ト共ニ東京ニ

召サセラル、其ノ御沙汰書左ノ如シ、

七月十一日 巳辛

御沙汰書

各通 島津從二位
毛利從二位

御用有之候間、東京へ罷出候様被 仰付候事、

三七一 高輪応接所ニ於テ、三條實美等関係高官

ト五カ国公使、悪金通用ニ関シ協議ス

十二日、高輪応接所ニ於テ、本邦関係高官ト各国公使トノ悪金通用ニ関スル協議会ヲ開ク、其ノ応答ノ大意左ノ如シ、

十二日、三條實美・具視・澤宣嘉・大隈重信・寺島宗則・伊藤博文等、高輪応接所ニ於テ、英・佛・米・伊・李五国公使ト面晤ス、其応答ノ大意ハ左ノ如シ、

彼先達テ中箇条書ヲ以テ、贖金一条御尋申上置候ニ付、御決答承リ度候、

我贖金通用ハ、外国人民ニハ勿論、内地人民ニ対シ、実ニ不都合之次第ニ候、旧幕衰微ノ弊ニテ、今更

申訳モ無之、先頃贖金取扱之儀ハ、決テ不相成様
布告致置候、

彼贖金通用御差止相成候義ハ、今日始テ承知仕候、
我贖金通用ハ元來國禁之処、近年処々流布致候ニ付、
以後右様於有之ハ、嚴重ニ其罪可相糺旨及布告置
候、

彼悪金ト唱フルハ、如何ナル金ニ候哉、

我大名ニテ拵ヘ候貨幣ハ、總テ悪金ニ有之候、

彼大名其外悪金鑄造セシ証拠差出候節ハ、其引替ハ
政府御引受相成候哉、又ハ大名等ヨリ引替相成候
哉、

我右ハ勿論、政府ニテ引替差出スハ当然ト存候ヘ共、
御承知之通、今日之形勢御推量被下、漸昨今箱館
平定ニ及ヒ、今日ニ至テ政令一途ニ出ル処ニシテ、
追々ト諸大名ヘモ御暇被下、帰藩可相成ニ付、右
一件ハ重大之事件ニ付、今一応諸大名集会、尚篤
ト評議之上ナラテハ決答難致候、

彼去五月、悪金銀通用不致様御布告相成候節ハ、内
地人民ニ計リ御布告有之候テ、外国人民ニハ一言
モ其段御知セ無之、各国公使余程不平ニ存候、

我悪金銀鑄造、且又通用之義ニ付テハ、改テ布告致

候訳ニテハ無之、素ヨリ悪金通用致候理無之、兩
替屋杯ニテ、悪金引替之相場相立、引替差出候哉
ニ相聞候ニ付、右様之事有之、其ニテハ決テ不相
濟義ニ付、唯悪金兩替方禁止致シ候計ニ有之候、
彼外国人民ハ、数万両于今悪金受取居候者有之候故、
外国人ヘハ御布告無之、実ニ外国人ハ可憐者ニ御
座候、

我右御知セ不致訳ハ、二分金杯ハ外国人之手ニ渡シ
候事無之ト、致承知居候ニ付、其段御知セ不申候、
彼兵庫・長崎ニテ、内外貿易ハ大概二分金計ニテ有
之、外国人之手ニ不渡トハ虚説ニ候、

我新貨幣鑄造之上、悪金ハ引替可申候、
彼然ハ是迄外国人受取居候悪二分金丈ハ、政府ヨリ
御引替被成候哉、
我政府ニテ鑄造セシ内ノ粗悪二分金丈ハ、政府ヨリ
引替可申候、

彼大名鑄造セシ悪二分金ハ、如何ニ候哉、
我右ハ政府存シ不申候、
彼然ニ大名ニテ鑄造セシ悪二分金ヲ以テ、日本人ハ

蒸氣船其外、武器夥敷品物ヲ買入レ、外人ハ安
ンシテ是ヲ受取居候ニ付、貴政府ヨリ引替サル理
ハ無之候、大名ニテ鑄造セシ二分金ヲ請取居ハ、
數万兩有之、右ハ大体悪金ニ候処、何故前以其段
外人へ御布告不相成哉、

我貿易上ニ於テ、善悪金銀ノ見分ケハ、商人ヨリ可
致筋ニ可有之候、

彼千八百六十二年、日本國ト英國ト和親條約取結候
節ハ、一分銀ハ九分ノ銀一分ノ雜セ物ニ取極メ有
之候処、是モ御守リ無之候、

我一分銀ハ、旧幕府ニテ鑄造セシ量分ニ少モ相違無
之様、鑄造致居候、

彼此以後、自然大名ニテ鑄造セシ証拠アレハ、悪一
分銀ハ政府ニテ御引替被成候哉、

我何レノ大名ニテ鑄造セシ確然タル証拠有之時ハ、

政府ニテ引替可申候、

彼悪一分銀ハ、政府ニテ引替被成候テ、悪二分金ハ

御引替無之理ハ有之間敷、

我右一分銀ト二分金トハ、量目モ余程相違致シ、二

分金ハ引替不申候、

彼一分・二分・二朱・一朱ノ貨幣ハ、政府ノ貨幣ニ
候哉、

我鑄造之外ハ、政府ノ貨幣ニ相違無之候、

彼是迄通用セシ金銀ハ、旧幕府之時モ新政府ニ至候
テモ、外人ハ安心シテ請取居候、迷惑之次第ニ
候、

悪金銀通用御禁止ニ相成候ヘハ、貿易ハ更ニ無之
様移リ行可申、此以後悪金銀ニ相場相立、通用致
ス様御処置ニテハ如何哉、

我悪金銀通用ハ、決シテ禁止ニ不致テハ不相叶、貿
易上ニ少々相響可申候得共、不遠大坂ニ於テ新貨
幣鑄造之上ハ、是迄之貨幣・紙幣共引替候ヘハ、

以後是迄之悪貨幣通用之憂有之間敷候、

彼日本政府ノ二分金ト申ハ、如何様ノ物ニ候哉、

我右ハ確ニ覚不申、尚取調御答ニ可及候、

彼横濱両替屋之義ハ、紙幣計リ御引替被成候哉、悪

貨幣ハ御引替無之哉、

我勿論左様、尤悪貨幣ハ成丈横濱筋ヘ不參様、取締

可致、引替ハ出来不申候、

彼五ヶ月半以前ヨリ二分金金札ノ一条、大坂ニテハ

伊達公、東京ニテハ東久世公へ御尋申上居候処、
終ニ今日迄御決答無之、如何ノ次第ニ候哉、

我尚再会ニテ決答可致候、

三七二 藩庁島津忠義鹿兒島藩知事ヲ命セラレタ
ルニヨリ、少將ト唱フヘキヲ達ス

十五日、藩庁ニテハ、忠義公鹿兒島藩知事ヲ命セラレタ
ルニヨリ、從來太守様ト唱ヘ来リシヲ、少將様ト唱フヘ
キヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

先月十七日、於 東京弁事御役所より重臣差出候様御
達ニ付、重臣代田中清之進罷出候処、於伝達所輔相公
御列席、弁事五辻弾正大弼様より版籍御返献御採用、
太守様江鹿兒島藩知事被

仰付候段、別紙御書付式通之通御到来被遊御請候、依
之

太守様御儀、已来 少將様と可奉称候、此旨一統奉承
知候様可申渡候、

明治二己七月十五日

知政所

三七三 三府ノ外悉ク府ヲ県ト改メ、野村・松方故
ノ如ク、税所ヲ兵庫県権知事ト為ス

十七日、三府東京・京都・大阪ノ外悉ク府ヲ県ト改メ、長崎県知事

野村盛秀・日田県知事松方正義故ノ如ク、税所篤満(河内
県知事)ヲ兵庫県権知事ト為シ、同知事陸奥宗光ヲ罷ム(明治
史要)
(本文記載なし)

三七四 田中清之進ヨリ雇医師原田鎌輔解雇ノ取
計ヲ新納立夫ニ交渉ス

十八日、東京ニテハ、雇医師原田鎌輔北越及函館ニ従軍
シ、今般東京へ帰着ニ付、慰勞金トシテ八拾兩ヲ渡シ、
出発セシメタルニヨリ、解雇ノ取計アルベキ旨ヲ、京都
ナル新納嘉藤次ニ交渉セリ、其ノ書并ニ返書左ノ如シ、

医師

原田鎌輔

右御雇入を以、北越諸所へ出兵、御当府迄凱至之上、
又々函館表江出兵、賊徒降伏後手負人同道ニて、帰着
相成候、然処最早御用も相済候付、御暇被下候方可然

候得共、初発於其許御雇入相成候儀故、御暇之儀も、同様御取計相成候方可然及吟味、尤当所へは委細之儀も不相分候付、当人へも其段申諭、今日差立遣候条、着之上御暇相成候様御取計給度、左候て前文通再度も出兵、別て骨折相動候付ては、先々之振合を以、相應之御挨拶被成下候儀共、旁可然御取計可給候、且又滞陣中地賄料倍重共、式ヶ月分式拾両、酒肴料五両、其許迄之道中賦式拾九両式步式朱、外ニ骨折料として式拾五両相混し、ノ金八拾両相渡置候、此段申越候、以上、

巳七月十八日

田中清之進

京都

新納嘉藤二殿

(朱書)
本文ニ付、巳八月二日、是迄骨折料として金五拾両被下候て、御暇被遣候、左候て因州屋敷へ御挨拶等之儀も取計置候、此旨及御報候、以上、

巳八月三日

新納嘉藤二

田中清之進殿

三七五 藩庁軍務局城下士以上ノ小銃調査ヲナス

コノ日、藩庁軍務局ニテハ、城下諸士以上ノ小銃調査ヲナシ、本月廿五日限り申出デシム、其ノ達書左ノ如シ、御城下諸士以上、小銃自筒・預り筒、急成御用見合相成候間、所持候面々、挺数ハ勿論、銃名無間違相記差出候様、可被申渡候、左候テ各ヨリ取揃、来廿五日限り当局へ可被差出候、此旨申達候、以上、

七月十八日

軍務局

銃名

- 一 長施条銃
- 一 短施条銃
- 一 イツトル
- 一 シヤスホウ
- 一 横ゼン
- 一 針打
- 一 シヤーフル
- 一 七連銃

三七六 黒田清隆外務権大丞ニ任セララル

コノ日、黒田清隆外務権大丞ニ任セララル(國の)

〔本文記載なし〕

御沙汰書

鹿兒島藩知事

三七七 藩庁葬儀師ヲ置キ、福昌寺及源舜庵ニ出張サセテ上下ノ尋問ニ応ス

軍艦献上願出候趣、神妙之至、御満足被 思食候、然ル処海軍之御規則御取調中ニ付、追て何分之 御沙汰可有之候事、

十九日、藩庁ニテハ、葬儀師ヲ置キ、福昌寺及源舜庵ニ出張セシメテ、上下ノ尋問ニ応セシム、ソノ達書左ノ如シ、

三七九 藩庁版籍奉還ヲ許可シ忠義本藩知事ニ任

セラレルニ付キ祝儀ヲ申出ツヘキヲ達ス

一此節葬儀師被仰付、福昌寺四番寮并源舜庵江出席所被召建候条、上下共不案之向は、葬儀師江尋問可有之候、此旨一同江申渡、神社奉行江も可申渡候、

明治二己七月十九日

知政所

コノ日、藩庁ニテハ、今般版籍奉還ヲ許可シ、且ツ忠義公ヲ本藩知事ニ任シテ、旧藩領管轄ヲ命セラレタルニ付、明後日祝儀ヲ申出ツベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、
一今般版籍御返献之儀、御採用被 仰出、

三七八 軍艦献上願ニ付キ後命ヲ俟ツヘキ沙汰書

二十日、先月五日付軍艦献上ノ願書、七月五日東京ニテ太政官ニ差出シタルニ、此ノ日海軍規則取調中ニ付、後命ニ俟ツヘキノ指令アリタリ(十月ニ至リ之ヲ許サル)、ソノ辞令左ノ如シ、

少将様鹿兒島藩知事被為蒙 仰、薩隅日并琉球島々御管轄之儀、是迄之通被 仰出候付、御一門方并二等官以上、明後廿二日四ツ時登 城、知家事江相付、少将様 宰相様江恐悦可被申上候、

右外略ス

右可致通達候、

二十日 丑

明治二己七月廿日

知政所

三八〇 島津忠義・久光再度賞典祿及ヒ位記ノ拜

辞ヲ具申ス

二十二日、忠義公・久光公再度在東京公用人ヲシテ、賞典祿及ヒ位記ノ拜辞ヲ具申セシメラレタレトモ、久光公東京参着ノ上沙汰アルベシトテ、聽許ナカリキ、其ノ上表及指令左ノ如シ、

鹿兒島藩上表

此度從三位・從四位共奉蒙 御賞典、官位并御高拝領、藩士ヘモ御高御金頂戴等被 仰出候ニ付、奉願趣御座候処、不被及 御沙汰段被 仰渡候、右ニ付テハ先代薩摩守之遺志ヲ継キ、是迄藩屏之任ヲ尽シ候儀ニテ、四方平定罷成候ハ全言上仕リ候通、 聖運之令然処ニ候ヘ共、寸功迎モ無之事勿論ニテ、廟堂御決議之上被 仰出候ヲ、強テ奉願候ハ恐多儀ニ候ヘ共、方今幕府之弊政被為受継、海外ヘ被為対莫大之御國債有之、加之一昨年来兵馬之費用不一方、會計之目的モ被為立兼、無勿休モ 宸憂之余、御身辺之御用途制限被為在候折柄、意外之重賞幾応蒙嚴命候テモ、臣子之至情ニ於テ安堵難仕、勿論治国安民之本ハ、會計之立不立ニ由リ

候儀ハ、申迄モ無之奉存候間、乍纒モ御用途万分ノ一

ニ被相備、速ニ會計之大基礎被為立、下民 皇沢ニ露

ヒ、維新之御美政相奉、被為安 勅慮候様奉願之外他

念無御座、其地ニ至父子共年来之素志相達シ、初メテ

安堵可仕奉存候間、背命之罪、如何ニモ不奉堪恐縮候

得共、不得止之仕合ニ付、遮テ可奉願旨、細々申含越

候ニ付、何卒前条之至情 御洞察被成下、御高・官位返

上 御許免被 仰付度、藩士之分モ同様之志願御座候、

依之 宣旨・位記其他都テ相添ヘ、此段再応奉願候、

以上、

七月廿二日

鹿兒島藩公用人

田中清之進

弁官御役所

御附紙

至情難黙止、再願之趣素ヨリ可被 聞食筋ニハ無之

候得共、從二位参着之上、何分之御沙汰可有之候事、

三八一 賈金取締ヲ嚴重ニシ、賈金ノ総員數ヲ取

調ヘ申告スヘキヲ藩庁ニ達セラル

コノ日、賈金取締ヲ嚴重ニシ、且ツ賈金ノ総員數ヲ取調
ヘ、十月中ニ申告スベキヲ藩庁ニ達セラル、其ノ達書左
ノ如シ、

七月廿二日卯辛

御達書〔七月二十二日〕

賈金之儀ハ、屢御禁令モ有之候処、追々世間ニ満布シ、
上下之難渋今日ニ差迫り候間、於府藩県モ賈金取引不
致様、嚴重取締致シ、且下方所持之賈金夫々取札シ、
総員數來十月中可申出候事、

三八二 朝廷紙幣兩替ヲ命セラレ、本藩軍事費過

分ニ付キ納付ニ苦シム

二十三日、朝廷紙幣ヲ發行シ、高老万石ニ付正金貳千五
百兩引替ニテ交付シ、三ヶ年内ニ新鑄造ノ貨幣ト交換ス
ベシトテ、本藩ハ正金凡拾八万兩ヲ納付スベケレドモ、
軍事費過分ナリシ為、朝命遵奉困難ニ付、正金銀所有ノ
者ハ多寡ニ拘ハラズ、此ノ用途ニ資スベキヲ達ス、ソノ
達書左ノ如シ、

一先月六日、東京弁事御役所より重臣御呼出付、内田仲

之助罷出候処、参与東久世中将様より兼て御布告相成
居候金札、普ク海内ニ被行、物価平均正金同様流通可
致様ト之 御趣意にて、今般府藩県共、高老万石ニ付、
正金貳千五百兩宛、金札を以引換被仰付候段、別紙三
表之通被仰渡、猶又議定岩倉公、右仲之助被召呼、当
御藩之儀、従前御忠勤之功拔群、殊ニは去春以来、諸
方江大兵被差出、莫大之軍費有之候末之事候得は、諸
藩同様正金上納被仰付候儀、於 朝廷も甚御斟酌ニ被
思食上候得共、方今外国交際、且内国之儀も不融通相
成、今通にては、終ニ貨幣之為御一新之涯、會計之道
も立行兼、実以不被為得止処より、無余儀被仰達事ニ
候、尤当年末より新貨幣御鑄造、追々金札御引換之道
被召建、三ヶ年之内ニは、諸幣は都て御引揚、其上従
來之金は通用被差留、御評儀之趣迄も細詳御懇諭有之、
就ては当御管轄中之御高頭ニ応し、凡拾八万兩之正金、
当九月十一日迄ニは不被成御上納候ては、不相濟事候
処、是迄御国役百般其他過分之御入費打続、殊ニ当分
金幣之耗之折柄にて、即今御調達之道不被為在、乍然
何れ右期限之通御上納不相成候ては、兼て

朝命御遵奉之義も不被為立候間、一統御布令之趣等厚

奉戴し、正金銀持合之者は、員數之不依多寡致引替、御用途相弁候様被仰付候、此旨早々向々江不洩様可致布告候、

但正金銀持合之者は、会計局江員數届書出候得ハ、

即金札を以引替被仰付候、万一此節不差出、新貨

幣御布行之節ニ至リ貯置候者は、無用捨可取揚候、

尤正金之儀は当分俗ニ古金と相唱候品ニ候、

明治二己七月廿三日

知政所

【参照一】

一御一新之際、莫大之軍費、ハ勿論、上下疲弊ヲ極メ、生産富殖之道ニ差障候ヨリ、格別御仁恤之御主意ヲ以テ、上下融通之為金札御布行相成、府藩県共石高二応シ貸渡被 仰付、偏ニ生産富殖之道ヲ開キ候様トノ 御趣旨ニ被為 在候処、拝借金札ヲ三都府ニ於テ、正金ト引換候而已ナラス、甚ニ至テハ厚キ 御趣意ニ戻リ、金札通用ヲ拒候処ヨリ、其通用スル処、僅ニ三都府ニ不過、又諸国ヨリ都府江物産ヲ輸入スト雖、其国許ニ於テ通用差障候故、金札ヲ嫌ヒ、正金ト引換持去、自ラ三都府之金四方ニ散シ、金札而已ト相成、逐日物価沸騰ニ及ヒ、都府之人民困窮今日之甚ニ至

候、右ハ兼テ御嚴令モ有之候処、地方官之諭令不行届ヨリシテ、右様之次第ニ立至候ニ付テハ、急々是ヲ救之道、一時都会ニ集ル処之金札ヲ、府藩県石高二配当シ、正金ニ換へ、是ヲ以テ、都会之人民ニ引替ニ渡候外無之、然ル時ハ金札普ク海内ニ被行、物価平均、正金札同様流通可致様可相成、依之別紙之通り、被仰出候間、府藩県共厚ク 御趣意ヲ奉戴シ、御布令ニ基キ、国民ヲ説諭シテ期限通り無遅延差出可申事、

但御主意柄篤ト了解シ難キモノハ、東京会計官江可伺出事、

六月〔六日〕

行政官

【参照二】

正金上納ニ付、金札渡方左之通、
東京会計官納之向ハ、金札六月十五日迄ニ半高、残り半高七月五日限被相渡候事、
京都・大坂両会計官納之向ハ、金札六月廿日迄ニ半高、残り半高七月十日限被相渡候事、

六月〔六日〕

行政官

【参照三】

今般別紙之通被

仰出候ニ付テハ、府藩県トモ高卷万石ニ付、金札式千五百兩ツ、石高ニ応シ割渡相成候間、右員数正金三都會計官出納司へ御布令、当日ヨリ左之期限通可相納事、

三十里以内ハ 三十日

五十里以内ハ 三十八日

七十五里以内ハ 四十六日

百里以内ハ 五十四日

百廿五里以内ハ 六十二日

百五十里以内ハ 七十日

〔百七十五里以内ハ七十八日〕

二百里以内ハ 八十六日

二百里以外ハ 九十四日

六月〔六日〕

行政官

三三三 大久保利通參議ニ任セララル

コノ日、大久保利通參議ニ任セララル、

大久保利通日記明治二年七月

廿三日

今朝副島同道岩公へ参上、段々申上候、十字参朝、
一 今日參議宣下、坊城大弁ヨリ被相渡候、
一 廣澤同様被宣下、
一 松方・吉井・村田入来、

三八四 外務大輔寺島宗則外務卿澤宣嘉ト共ニ、

澳大利国条約交換ノ事ヲ掌ラシム

コノ日、外務大輔寺島宗則外務卿澤宣嘉ト共ニ、澳大利国条約交換ノ事ヲ掌ラシメラル、其ノ御沙汰書左ノ如シ、
二十三日^{壬辰}

御沙汰書

各通 澤 外務卿
寺島外務大輔

澳大利亞和親貿易条約取結之儀願出候処、御許容相成、
右条約之全權御委任被為在候旨、
御沙汰候事、

三八五 国許知政所ヨリ東京在勤ノ公用方人数ヲ

定メラレ、人員ヲ派遣セラレ

堀 剛十郎

二十四日、東京ニテハ、今般国許知政所ヨリ東京在勤ノ

公用方理事ヲ三人、同見習ヲ三人ト定メラレ、理事トシ

テ有馬藤太、同見習トシテ山本十次郎、去ル十日着任シ、

翌日堀剛十郎ニモ、同見習ニテ東京在勤ヲ、同村山源七

ニハ、京都詰ヲ命セラレ、コノ日出発シタル旨ヲ在京都

新納嘉藤ニ報セリ、其ノ書左ノ如シ、

一 公用方理事 三人

一同見習 三人

右之通、東京在勤定数被相究候旨、知政所より被仰

越候、

一 公用方理事見習

山本十次郎

右之通於御国元被仰付、東京詰として去ル十日、三

邦丸より着いたし候、

理事

有馬藤太

右御用有之、三邦丸より前条同断、着いたし相詰候、

一 公用方理事見習

右之通被仰付、東京へ可相詰旨被仰越候付、去ル十
一日申渡候、

理事見習

村山源七

右京都在勤被仰付候条、差立候様可取計旨、被仰越
候付、其通申渡、今廿四日出立いたし候、

右申越候条、大坂詰公用人へ被申越候儀共、可然御

取計可給候、以上、

巳七月廿四日

田中清之進

新納嘉藤二殿

(朱書)
本文致承知候、村山源七儀、去ル七日爰元致着候、此

旨御報申越候、以上、

七月廿五日

新納嘉藤二

田中清之進殿

三八六 英王子来朝ニ付接判脩例書拜見並本藩兵

長藩兵前後警衛シテ大森迄出張ヲ報告ス

二十五日、英王子来朝ニ付、予メ接判脩例書ヲ各藩公議

人ニ示サレシカ、本日着府ニ付、本藩兵前衛、長兵後衛ヲ命セラレ、大森迄昨夜出張セシ旨ヲ藩庁知政所ニ報セリ、

已七月廿五日村田新八急使

一英王使御接伴脩ノ例一冊、各藩公議人へ拜見被仰付候由ニ付、富田三蔵へ相談写取差上申候、尤今廿五日着府参内之管御座候、前後此御方兵隊、後衛長州兵隊ニ被仰付、昨夜より出立大森迄出張相成申候、此段申上越候、以上、

知政所

田中清之進

【参照一】

二十五日^甲午

御達書写

延遠館英国王子滞在中、親王・諸官員・華族御用罷越候節、館前迄乗馬・乗輿不苦候事、

但惣供ハ大手門ニテ引落シ、門内侍二人・小者一人、

雨天ニハ傘持一人之事、

右之通候間、為心得相達候事、

【参照二】

来二十八日英国王子参 内ニ付、差掛候御用之外ハ、参 朝被止候事、

但御用参 朝之輩ハ、坂下御門出入、中ノ口ヨリ昇降可致候、尤供待之所等、夫々下知之者差出有之候間、屹度相守可申事、

三八七 留守官再興ニ付岩下方平留守次官へ再任

セラレ

二十七日、去ル八日官制ノ改定ニテ、廢官トナリタル留守官再興セラレ、岩下方平留守次官へ再任セラレ、ソノ長官へノ達書左ノ如シ、

二十七日^乙未

御達書

留守長官

一留守事務一切預知ル所トス、故ニ留守諸省其外東京へ同等ノ事件、総テ弁官へ差出、長官取束可差出、但事柄ニ依リ、其省ヨリ東京其卿へ直ニ掛合候儀モ可有之事、

一長官ハ大政ニ關係セズト雖モ、留守諸省ヲ管轄スルヲ

以テ、諸務ヲ預リ聞キ、常例小事、其裁決スルヲ許ス、
自余ハ総テ伺出可取計事、

七月

右大臣

但郷士并同格之者罷居候處は、地頭より此滙伝事江
名前可申越候、
明治二己七月廿八日 知政所

三八八 水本成美大学大博士ニ任セラル

コノ日、水本成美大学大博士ニ任セラル(補任) (本文記載なし)

三八九 郷士并同格之者ハ伝事支配トナス

二十八日、藩庁ニテハ、従来諸郷居住ノ郷士并同格ノ者
ハ、其所ノ地頭支配ナリシヲ伝事支配トシ、伝事方附士
并同格ト唱へ、従来ノ通居住セシメ、其ノ名前ヲ伝事ニ
申告スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

郷士并同格之事

一 伝事方附士并同格

右は、是迄諸郷居住之郷士并同格之儀、其所地頭支配
ニ被仰付置候得共、以来伝事支配ニ被仰付、右之通相
唱、居住は当分之通申付候条、諸地頭江申渡、可承向
江も可申渡候、

三九〇 藩庁会計局諸官職俸禄帳ヲ、毎月十五日
限り差出スヘキヲ達ス

コノ日、藩庁会計局ニテハ、諸官職俸禄帳方見合セノ為、
各局ニテ其ノ人員・官職・持高・現俸禄ヲ記シタル一帳
ヲ、毎月十五日限り取揃へ差出スベキヲ達セリ、其ノ達
書左ノ如シ、

一 諸官職俸禄帳方御用見合相成候間、局々人員・官職・
持高并当分被下置候俸禄共相記、巻帳を以、来月十五
日限当局江可申出事、

但局下之儀ハ、銘々本局ヨリ取揃可差出候、

明治二己七月廿八日

会計局

三九一 諸郷分隊長以上ノ俸禄ニ付達書

コノ月、藩庁ニテハ、諸郷分隊長以上ノ俸禄ハ、城下ト

同シク各官等級ニ応シテ、年四回ニ附近ノ官庫ヨリ支給シ、世禄二十五石以上ハ、城下五十石以上ニ準スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一諸郷小隊長・半隊長・分隊長俸禄之儀、御城下同様各官等級ニ応シ被成下候、左候て、世禄貳拾五石以上、御城下五拾石以上之振合ニ準シ、差引被成下候条、會計総裁江申渡、軍務局総裁其外、可承向へも可申渡候、

但御米渡方之儀、二月・五月・九月・十二月、四季ニ最寄御蔵より米穀掛出納奉行手形を以、可相渡候、

明治二己七月

知政所

三九二 三府へ定飛脚差立ニ付達書

コノ月、又藩庁ニテハ、近来三府へハ定飛脚差立テズ、船便等ニ托セラレタレドモ、尔来船便ナキ時ハ隔月廿九日ニ定飛脚ヲ立テ、諸人書状等ヲ托スルコトヲ得セシムベキ旨ヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一当分東京并京大坂江定式飛脚不被差立、船便等之節被差遣来候得共、尔后蒸氣船便無之節ハ、巷ヶ月越廿九

日ニ定式飛脚被差立、諸向御用封并諸人書状迄、宰領申付候、左候テ御用物并諸人用物ハ、船便等之節可差越候、此旨向々江可申渡候、

但諸向御用封之儀ハ、都テ諸財掛出納奉行江差出、目方致掛占候様申付候、

明治二年己七月

知政所

三九三 藩庁ヨリ士分ノ儀節義ヲ失セサル様達ス

コノ月、又藩庁ニテハ、從來節義ヲ失スル者モ、嶋方居住等寛宥ノ処分ナリシモ、朝廷大公至正ノ道ヲ以テ、士操盛挙ノ深慮ニテ、嚴明ニ裁断アルベキニヨリ、節義ヲ失ハサル様、各局へ仰渡サレ度、糺明局ノ議ヲ贊シ布達ヲナセリ、其ノ達書左ノ如シ、

一士分ノ儀、忠孝之大義を可抽嗜ミハ勿論ニ候処、間ニは無状失節之者も有之、旧来其科ニ仍リ、御仁恕之御趣意を以、罪状を不顯、不宜聞得之趣を以、嶋方居住等寛宥之御処分も有之候得共、今や

朝廷天下之衆論を集め、大公至正之道を以、刑律御變改之時節、大体曖昧姑息之旧典ハ難施、被廢候付、内

明治2年(1869)

大仁を体し、外正法を示して人心を一にし、士操盛挙
之御深慮ニ候故、尔後失行之者は更ニ無御宥恕、時々
及糺明、顯然其罪を声し、嚴明ニ御裁断被仰付答候条、
一同得其意、不失節義様可相嗜旨、各局之部下江被仰
渡度致吟味候、以上、

六月

糺明局

右之通御決定相成候付、向々江可申渡候、

明治二巳七月

知政所

〔稿本表紙〕

明治二年
八月
忠義公史料
八

〔稿本にて補正〕

三九四 外務大輔寺島宗則英国公使ト樺太ニ於ケル雑居ノ件ニ付意見ヲ交換ス

一日、外務大輔寺島宗則、横濱ニ於テ英国公使ト樺太ニ於ケル雑居ノ件ニ付、意見ヲ交換セリ、其ノ對話覚書左ノ如シ、

昨日函館ヨリ音信アリタリ、貴政府ニハ何事モ不申越哉、

一七日許前ニモ候ヤ、クシユンコタンヘ参リ居タル一

人帰府致シ、魯艦一艘同所ヘ来リ、二百五拾人許ノ兵卒ヲ上陸セシメ、陣小屋ヘ住居、更ニ木材ヲ運ヒ来リ、家作ノ用意ヲ為セリ、我ヨリ一向談判断ニ及ヒタレトモ、旧幕ノ雑居ノ約定アレハ妨ケナシト云フテ屈セス、右ニ付一人ノ官員立帰リ、是ヲ政府ニ訴ヘ、昨日モ其事ヲ議シタレトモ、旧幕取扱ノ手續キ詳ナラス候ニ付、右取調出来候ハ、追々御相談ニ可及ト存候、

函館岡士ヨリ同様申越候、日本国政府ヨリ一書到来シ、魯都ヘ一トルベルクニ於テ、高官一人ヲ命ジ、唐太地形物産ヲ探索ス、其モノ西洋曆去ル第五月都ヲ発シ、今頃ハ唐太ニ到着セント思フ、都ヨリ唐太ヘハ数千里ナリ、路程ヲ隔タレトモ、右様等閑ナク手下候処、江戸僅ニ三百里ノ処ニシテ、打捨置カル、訳モ有之マシク候、

魯ハ寒地ヨリ暖地ニ向ヒ、我ハ暖地ヨリ寒地ニ向ヒ候故ニ、彼ニ比スレハ開拓果敢取兼候、魯ニテ日本ヨリ暖地ノ処モ有之、其処ヨリ唐太ヘハ、同様寒地ニ向フニ候、然ルニ此度ハ、魯ニテ從來シヘリヤ辺ニ移シタル罪人ヲ、不残唐太ヘ移シ候旨相決シ、近日魯人夥シク参リ可申候、已ニ六ヶ月前ニモ、伊達・東久世両公

モ蝦夷地ノコトニ付、度々申入レ、英人フラツクスト
ント申測量家ヲ雇ワレ、海路ノ測量被成候様相勸置候、
御承知ニ候ヤ、一向不承候、

夫ハ甚タ不審ナリ、外国掛リノ惣督ヘ可申遣候、則政
府ヘ申候モ同様ニ候、政府ノ官員ハ不殘承知ニナルヘ
キコトナリ、其時ニ返答ニ、何レ篤ト政府申立候ト、
一勅弁致スヘシト被申候、六ヶ月勘定モ有之、今ニ至
リ返答無之、今魯細重唐太ニ到着セルヲ聞テ、俄ニ驚
キ用意被成候テモ、間ニ合申マシク、已ニ小出秀実、外國奉行大和魯
都ニ至リ、雑居ノ約定取極調印致候間、此約定ハ動ス
ヘカラサル者ニテ、恐クハ唐太ノ全島ヲ失フノミナラ
ス、蝦夷地ニ及ヘシ、クシユンコタン辺ニ要害ノ地ヲ
占ムレハ、唐太ノ北地所々ニ人ヲ移スヨリモ功速ナリ、
地図ニテハ同地面ニ政令ニツニ分レテ雑居スルトモ、
其例アリヤ、決シテナシ、如此約定ヲ西洋人甚タ奇ト
思ヘリ、支那数年前支那界ニテ、魯ヨリ滿州ノ地ヲ多
ク取リタリ、右ハ支那ヨリ行届カサル地ナレハ、支那
ニテ領スルヨリモ、魯ニテ開拓スレハ益多シ、一体ニ
地面ハ人ノ住ムヘキモノナリ、而シテ地ノ貴キヲ得ヘ
シ、就テハ他ノ西洋諸国ヨリモ、素ヨリ之ヲ拒ムヘキ

ノ理ナシ、今日ニ至迄一言モ雜ルモノナキヲ以テ、各
国ノヲ魯トセリ、右同様唐太ニ於テモ無用ニ打捨アル
ヲ、魯人拾フテ有用ノ地トナス、誰モ之ヲ拒ム能ワサ
ルヲ万国ノ公法トス、

右ニ付相考ヘ候ニ、英公使ノ意ハ、先ツ外國人ヲ以テ
其地ヲ測量セシメ、我ヨリ等閑ニ示シ、二ツニハ西洋
人中ニ立入タルヲ知ラシメ、追々英ヨリ口ヲ入レ候手
続ニモ致スヘクヤニモ推察致シ候、右測量ノコトナシ
ナラス、佐賀佐賀力鋤山ノ事ニ御雇入相成候ガハトト申ス
英人、故有テ今以テ同所ヘハ差越不申、此者ハ兼テ岩
ナイニ石炭坑ニ參リ居ニ付、無用ニ月給ヲ取り遊ハセ
置候ヨリ、同所又ハ他ノ所ヘ被差送然ルヘシ、且箱館
ヘハ昨年ヨリ清水谷殿被差遣置候処、兎角附属入リ替
リ勝ニテ、政令連続不致、魯ニテモ高官差遣候程ノ事、
道遠近ヲ比スレハ大ニ相違致候哉、我ヨリ容易ナル義
ニテ、一等老練ノ高等官箱館マテ差遣置、充分御取締
被行届候有之度存候、
(標脱カ)

己巳八月

寺嶋外務大輔

【参照一】

大久保利通日記

二日

今朝十字参 朝、副島へ立寄候、

一蝦夷開拓、唐太一条御評議有之、杉浦へ小出談判ノ次

第御聞札相成候、

【参照二】

町便已八月廿四日

一唐太嶋開拓之義、先ツ当年ハ別紙之通御治定相成候由、

谷元兵右衛門より承候付、写式通相添、此段申上越候、

以上、

田中清之進

知政所

追テ、来春十分御手被召付哉ニ承申候、

別紙

ヤンシー

右艦一艘ニ人数積乗セ、

樺太クシユンコタン

宋也

石狩

根室

右之場所ニ揚リ候事、

大坂艦

右艦ニテ、米穀諸品石炭等、函館迄度々相運候事、

樺太

上下役人凡六拾人

良民 百人

職人 百人

宋也

上下役人凡廿一人

良民 百人

職人 百人

根室

上下役人凡 廿人

良民 百人

職人 三拾人

石狩イサカ土着

一會津降伏人男女三百

但兵部省ニテ引受候事、

一函館出張上下役人凡百人

給金ハ大蔵省ヨリ払方相成候事、

一英人ガハ岩内へ連越候事、

降伏人・夫卒五百人計リ引連、石炭掘候事、

一ヶ月給金四百五十拾兩余

一同ブラクストン函館ヨリ樺太へ連越候事、

一ヤンシー艦

右御買入相成候処、終始御弁利ニ付、其通被仰付候事、

以上

三九五 藩庁各局ノ書記・調役・筆者等ノ内、劇職

ノ者ニ季禄ヲ給与スルコトヲ可決ス

九日、藩庁ニテハ、各局ノ書記・調役・筆者等ニシテ、

劇職ニ居ルモノニハ、其ノ官等ニ応シ、俸禄以外二年二

季ニ季禄ヲ給与センコトヲ、会計奉行ヨリ知政所ニ合議

可決セリ、其ノ書左ノ如シ、

一金式拾兩宛

軍務局

筆者

一同拾五兩宛

会計局

調役

調役助

知政所

筆者

伝事方

筆者

会計局

筆者

一同拾兩宛

但俸禄不被成下面々は、式拾兩宛、

上下町会所詰

張紙ニテ

糺明奉行見習

可為吟味之通候、

明治二己八月

知政所

右は官等ニ応し、兼て俸禄被下置候得共、右局々職務

繁劇之場所ニ付、耆人ニ付年中二季渡ニ被相究、此節

書記

軍務局調役

兩御丸并玉里

鶴見崎御屋敷

侍医

本行之通、為季祿困錢を以可被成下哉、吟味仕候、

八月九日

會計奉行

三九六 藩庁ニテ上下会所詰糺明奉行見習ハ、監

察局ト合議シテ坊内ヲ取締ルヘキヲ達ス

十二日、藩庁ニテハ、上下会所詰糺明奉行見習ハ、監察局ト合議シテ、坊内ノ取締ヲ嚴肅ニスベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一 上下会所詰糺明奉行見習之儀、市中之非違を普く聞察し、夫々致糺彈候儀は勿論之事候処、坊内は卑賤群住、自然妨害醸出し易候間、取締は専ら監察局委任之事にて候得共、尔後会所詰之面々よりも猶又手を尽し、監察局へ引合候儀は其通にて、依事機ては速ニ見切を以、詳密ニ行届候様取計、糺明局よりも平生万事致指揮、審ニ犯科之情実を得、取締向嚴肅行届候様、二局申談可取計旨被

仰達候条、此旨糺明惣裁并監察惣裁、江申渡、可承向へも可申渡候、

明治二己八月十二日

知政所

三九七 西郷隆盛外三人至急御用ニ付上京セシム

ヘキヲ知政所ニ報ス

十六日、東京ニテハ西郷吉之助外三人ニ、至急御用ニ付上京セシムヘキヲ達セラレタルニヨリ、急便ヲ以テ知政所ニ報セリ、其ノ文左ノ如シ、

一 西郷吉之助外三人、至急御用有之候付、速可罷出旨、別紙之通官掌手塚泰助を以御渡相成候間、大坂迄三日半届キ仕立町飛脚を以差越、夫より至急差上候様、同所江申越候、此段申上越候、以上、

己八月十六日

田中清之進

知政所

右別紙ヲ逸ス、

三九八 島津忠義藩内改革ノ諭書ヲ発シ、勅命ニ

ヨリ家格ヲ廢シ士族トナスコトヲ達ス

十七日、忠義公ハ藩内改革ノ諭書ヲ発シ、勅命ニヨリ從來ノ家格ヲ廢シテ悉ク士族トシ、旧藩主家族ノ分家・別居、及一門以下勲功ニテ家格アリシ者ニハ、世祿或ハ一

世禄ヲ与ヘテ、応分ノ取扱法ヲ定ムヘキヲ達セララル、其ノ論書及達書左ノ如シ、
三九八ノ一

一 普卒之土壤、尺寸も雖不可私有ノ条理、細詳申論置候
処、門地之面々邑地返納致度、追々願出趣有之、時勢
を汲ミ義理ニ達し、公事忠誠之至、深令称候、然処版
籍奉還之儀、広ク 公議を被為 採、言上之通被 聞
召、左候て藩知事江仰出、家禄迄も現石十分一を以可
相定、且一門以下平士ニ至迄総て士族と相唱、家禄御
定之振合ニ基キ、給禄適宜改革可致旨、

朝命を以各藩之体裁被 召替候付ては、一所持等之名
号可有筋更ニ無之事候間、邑地返納之儀願通差免候、
乍然其祖先以来或至親宗族、或名家士豪累世勲功を積
み、国家之柱石、社稷之干城、国と休戚を共ニする之
家筋、祖宗之眷寵を以重班を授け、封土伝来之処、一
朝削収致候儀、実以不忍之情義ニ候得共、則今字内文
明開化之時ニ当り、日々旧習一洗之 御政途帰一、
皇国之全力を以、海軍をも 御更張可被為在との事候
処、随て軍制も一變いたし、其他根元不相居候ては、
事実運兼、竟畢土地人民を以
天朝奉保護、職任一日致緩怠候ては、一日之紀綱不相

立、 皇国之安危ニ係る儀候間、公私輕重之間を弁別
し、

天朝之御趣意貫徹致し、我等を輔、勤王治国之職掌を
竭候義、可為至要事、

三九八ノ一

一 嶋津珍彦殿 嶋津 兵庫(忠敬)

嶋津 讚岐(貴敬) 嶋津 安藝(忠敬)

嶋津 左衛門(久敬) 嶋津 信濃(久敬)

嶋津 圖書殿(久治) 嶋津 元丸(久寛)

種子嶋弾正(久尚)

右依 勅命、從來之家格被廢、士族と名目被相定、別

段之御会釈を以、世禄千五百石下賜候、

一 川上東馬 嶋津太郎左衛門

嶋津隼人 新納四郎左衛門

桂 右衛門 嶋津主殿

樺山主計 嶋津壬生

喜入主計 町田民部

伊集院静馬 嶋津主計

北郷主水 伊集院伊膳

嶋津式部 頼娃彌市郎

小松玄蕃頭 入來院彈正

比志嶋靜馬 肝付兵部

菱刈奎之介 諏訪甚四郎

川田掃部 畠山文之助

鎌田仙千代 伊勢雅楽

右依 勅命、從來之家格被廢、士族と名目被相定、世

祿三百石限被究置、左候て祖先勲功之御取訳を以、高

式百石御蔵米之内より年々被下置候、

一 嶋津織之助 嶋津良馬

嶋津助之丞 嶋津多右衛門

右依 勅命、從來之家格被廢、士族と名目被相定、世

祿三百石限被究置候、

一 川上勘解由 新納刑部

山田新助 鎌田源左衛門

右依 勅命、從來之家格被廢、士族と名目被相定、左

候て祖先勲功之御取訳を以、世祿三百石限被究置、且

一 嶋津一二 嶋津内匠

嶋津桑衛 吉利群吉

大野多宮 嶋津織部

平田靱負 二階堂部

市田幸介 義岡相馬

山岡隼見 嶋津右近

嶋津勇馬 末川主税

島津清大夫 川上龍衛

川上隼見 島津左大夫

嶋津登 郷原金大夫

樺山長大夫 北郷七郎左衛門

北郷権五郎 桂内記

嶋津権左衛門 新納内匠

町田内膳 伊集院九郎

新納主税 伊集院隼衛

高橋十郎 仁禮舍人

二階堂源大夫 名越兵部

小林龍左衛門 北條直記

本田治部 相良治部

平田正十郎 堀彌八郎

小笠原兵部 鎌田十五

鎌田一藤太 市來次十郎

河野雅楽 赤松主水

澁谷 梢 宮之原 幸吉

關山盛之助 亡山田 司イ藤太

岩下 左二 上野 司イ藤太

猪飼 央 三崎平太左衛門

倉山作大夫 谷川次郎イ新七郎左衛門

村橋直衛 北郷助之丞

伊勢新七郎 西 金之助

本田五位 井上備前守

面高眞彦

右依 勅命、從來之家格被廢、士族と名目被相定、世

祿式百石限被究置候、

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

明治二巳八月十七日 知政所

三九八ノ三

一御子様別御住居被遊候節は、御統高之儀千式百石所務、

一御姫様右同断ニ付、高千石所務、

一御子様他家御相統之節、高七百石、

但御一世、

一御姫様他家江被為入候節高五百石、

但於典殿江も本行通、

(島津忠公)

一築水殿并当御子様御同様被仰付置候面々江御統高七百石宛、

但当分兩御丸御子様方之儀別段、

一御子様別御住居被遊、其御子様より他家御養子御相統之節は、御統高之半方六百石一世限被遣候、

一御一門已下無格之面々、并諸士ニ至家格名目都て被廢、

從

朝廷被 仰出候通、士族と名目被相定、本御一門已下

勲功等之家柄は、軍役高別紙之通ニて、其外都て式百

石高二被究置候、

一諸郷衆中之儀も士族と名目被相定、左候て御城下は鹿

兒島士族、諸郷ハ何方士族と可相唱候、

一島津之御称号拜領之面々、御直別れは当分通ニて、其

外ハ都て小名又は本姓可相名乗候、

但改姓之向は、伝事江相付届可申出候、

一私領家来之儀、譜代・新參之家筋差別相糺し、家筋正

敷者は其所士族江被召出、御当地居住家来之儀も、同

様被仰付候、尤諸郷々江も中宿いたし居候者も有之候

付、是以家筋連続之次第、筋目屹と糺方之上、其郷士

族ニ其尽可被召出候、

一岩川・南村其他江罷在候持切在之家来共、御軍役可相勤者共は筋目屹と糺方之上、其郷士族ニ可被召出候、

一私領持家来之内家柄之者、在・浜・町居住職分士不相当之者は、其職取止、十分ニ復シ候ハ、糺之上其郷

士族江被召出、若其職分難取止者は、其所町人又は主人江其俣被召付候儀共、其者申出ニ任せ可被仰付候、

一私領足輕・口之者之儀は、兵器方足輕又は御口之者江被召出、土着ニて御扶持は不被下候、尤主人方江相付度願之者は、家来ニ被仰付候、

但足輕・御口之者江被召出候付ては、譜代連続之次

第糺方之上、被仰付候儀共、前条家来取扱同様、

一私領高過上之分は、別段軍務方江被差分置候、

一私領家来其郷士族江被召出候、以来其家江召仕候儀不相成候付、一家治定迄之間所不差支者は、一往加勢願出候ハ、其通可被仰付候、

一本現一所持之儀、世祿三百石并御蔵入高式百石之所務被下候外、別段堪忍料として、御蔵入高式百石之所務、拾五ヶ年限被成下候、

一本御一門以下居屋敷迄ニて下屋敷不相成候条、士族相對可讓渡候、

一是迄現一所持并伊勢雅楽・鎌田仙十郎儀は別段、其外之儀御定高外過上相成候散高之分は、当九月十五日限老石式百貫文限ニて可売払候、左候て取扱振之儀は、先達て一所持之面々、散高売払相成候振合通被仰付候、

但持切在高之儀は売払方不相成候、

一川上東馬・新納四郎左衛門・桂右衛門・町田民部・伊集院静馬・伊集院伊膳・頼娃彌市郎・比志嶋静馬・菱刈奎之介・諏訪甚四郎・川田掃部・畠山丈之助・川上勘解由・新納刑部・山田新助・鎌田源左衛門儀、世祿三百石より過上之分は可得差図候、

一是迄之現一所持ならひニ伊勢雅楽・鎌田仙十郎・町田民部事、追て軍役高之儀、御定通御下渡相成候付、一所持并持切在又は被附置候高之儀、都て当秋は御蔵入被仰付候、左候て右面々江は、夫々御定高之所務米、追て御蔵米を以被相渡候、

一是迄私領家来高之儀は、先是迄之通被召置候、追て御取調之上、何分可被仰渡候、

以上

三九九 桂久武所務米返上ヲ願出テ許サル

コノ日、桂久武所務米返上ヲ願出ス、十九日任職中之ヲ
許ス、其ノ願書及ヒ指令左ノ如シ、

此節一同格式被相改、家格ニ付、三百石高二被仰付、
其上御蔵入ノ内ヨリ式百石、所務米ヲ以テ被成下候段
被仰渡、畢竟祖先ノ勲勞ノ御取扱ヲ以テ、右ノ通被仰
付候儀ト奉存、於私冥加至極難有仕合奉存候、然処上
様御蔵入高ノ儀モ、御分限御治定ノ折柄、別段加様頂
戴仕候テハ、深奉恐入候ニ付、御蔵米式百石ノ儀ハ、
過分ノ儀ト奉存候付、乍恐返上仕度御座候間、何卒至
情御洞察被成下、奉願候通御免許被成下度、此旨被仰
上可被下儀奉願候、以上、

八月

桂 右衛門

本文願意無余儀相見得候ニ付、当任職中可為願ノ通事、

四〇〇 内務局知家事ヲ家令ト唱フヘキヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、曩時藩治職制ニヨリ、藩知事公ノ
内事総判ノ為メ、内務局知家事ヲ置カシメラレシガ、尔
後家令ト唱フベキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、
一 知家事之儀、此節從

朝廷被 仰出候通、以来家令と可相渡旨、被 仰達候
条、向々江可申渡候、

明治二己八月十七日

知政所

四〇一 藩庁ニテハ藩境標木ニ鹿兒島領ト記シタ

ルヲ鹿兒島藩ト改ムヘキヲ達ス

十八日藩庁ニテハ從來他藩境標木ニハ鹿兒島領ト記シタ
ルヲ、鹿兒島藩ト改ムベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、
一 他藩境標木之儀、是より東西南北鹿兒嶋領杯と相記有
之候得共、此節改て是より何々鹿兒嶋藩と相記候様、
他藩境地頭江申渡、可承向江も可申渡候、

明治二己八月十八日

知政所

四〇二 藩治職制ニテ琉球三島並沖永良部島檢事

ハ、吟味ノ上時々出張セシムヘキヲ達ス

十九日、曩時藩治職制ニテ、諸島ニモ巡察ヲ置キ、次テ
三月廿日ニ至リ、新ニ諸島檢事ヲ置キタレトモ、以来琉
球三島並沖永良部島詰檢事ハ、吟味ノ上時々出張セシム

ベキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一 琉球三嶋並沖永良部島詰檢事之儀、以來は時々御吟味を以被差遣候、尤檢事任職之外より御擧用被差遣候儀も可有之候条、此旨監察局總裁并可承向江も可申渡候、

明治二己八月十九日

知政所

四〇三 集議院ニ関スル達書及ヒ規則

二十日、天下ノ進言・献策・考試等ノ事ハ、從來待詔院下局ニテ採否ヲ決セラレタレトモ、尔來集議院ニ改ムベキヲ達セラル、其ノ達書及ビ規則左ノ如シ、
四〇三ノ一

待詔院
各通 集議院

待詔院下局之儀ハ、天下之材能ヲ待セラル、所ニシテ、言路洞開、上下壅塞之弊ナク、草莽卑賤ニ至ル迄、各抱負ヲ尽サセ、其所長ヲ御採用可被為在御趣意ヲ以テ、被設置候処、今度御詮議ニヨリ集議院中ニ於テ、是迄待詔院下局ニテ取扱候御用等、裁判可致旨被仰付候間、此旨可相心得候事、

(八月十五日)

四〇三ノ二

集議員規則 (八月二十日)

一 集議院中別ニ一局ヲ設ケ、天下之進言献策有用之材ヲ總へ寄宿セシメ、其德行才能ヲ考試スベキ事、
一 諸藩士及農工商トモ、待詔出仕可被 仰付者ハ、一応議院之考試ヲ經テ任用スヘキ事、

但人物ニヨリ特命之擧挙ハ此限ニ非ス、

一 議院ニ關係之議事アル節ハ、長官・次官・判官、正權トモ、太政官ニ參預可致事、

一 議員中ヨリ幹事十二名ヲ公擧シ、正權判官ニ準シ、可相勤事、

但權判官之次席タルヘク候、

一 議員中ヨリ名指シ擧挙有之節ハ、議院ニ於テ長官・次官・正權判官・幹事等、其材能可否ヲ熟議之上可申出候事、

但任用之官等職務トモ、前以內論可有之事、

一 議員中名指ナク、挙任被 仰出候節ハ、長官・次官・

正權判官・幹事等二名ヲ撰定シテ、可伺出事、

一 議員中ヨリ擧挙之節ハ、奏任以上ニ可相任事、

建言之輩、是迄待詔院へ罷出候処、自今集議院へ參上可致事、

四〇四 東京招魂社へ永世祭資料ヲ下賜セラル

二十二日、東京招魂社へ永世祭資料高壹万石ヲ下賜セラル、其ノ御沙汰書左ノ如シ、

御沙汰書

招魂社

高一万石

為祭資、永世被宛行候事、

四〇五 旧幕府ノ朱印附寺社領アラハ、大蔵省へ

報告スヘキ旨ヲ知政所ニ報ス

二十四日、東京ニテハ大蔵省ヨリ、旧幕府ニテノ朱印附寺社領アラハ、取調へ差出スヘキヲ達セラレタルニヨリ、此ノ旨ヲ知政所ニ報ス、其ノ文左ノ如シ、

一大蔵省より御呼出ニ付、堀剛十郎罷出候処、租税司萩原館一郎より、租税取調方之儀、当四月限差出候様御達相成居候へ共、于今不差出候付てハ、御取調方差支候付、至急差出候様、且先度御達相成候節、案書被相渡置候得とも、猶又此節被相替候付、別冊之振合を以

差出候様、左候て旧幕府より朱印附之社寺領有之候ハ

、別冊ニ取調可差出、附属之社寺領無之候ハ、其

俥案文張紙之通、但書其訳相記可差出旨、致承知候段

申出候付、大坂迄三日半届仕立町飛脚差立、同所より

至急差上候様申越候、此段申上越候、以上、

巳八月廿四日

田中清之進

知政所

一右ニ付、別冊大蔵省より被相渡候案文ハ、御用帳ニ

有之候付、留略ス、

四〇六 藩庁ヨリ上納米ノ事ヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、朝廷現石十分一ヲ以テ家禄ニ定メラレタルニヨリ、一石ノ所務米三斗六合ノ十分一、即チ三升六勺ヲ除キ、高頭一石ニ付三升宛ヲ上納セシメ、軍備用トシテ従前ヨリ納入ノ三升重出米ハ之ヲ免シテ、御藏米ヨリ軍備方ニ分ツベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、
一今般 少将様鹿兒島藩知事被為蒙 仰候付、現石十分一ヲ以テ家禄可被相定、且士族給禄之儀は、右御治定之振合ニ基キ、適宜改革可致旨被 仰出、其段は既ニ

奉承知通ニ候、就右一統給祿適宜之処、御改革高一石之所務米三斗六合之十分一、三升六夕之數六夕は相除、軍役高被宛行置候面々は一石ニ付三升宛、高頭之不依多寡当秋より別段上納被仰付候、就ては御軍備為御用途、去ル寅年より来ル酉年迄、定式外三升重出米上納被仰付置候得共、右は総て当秋より被免、右出米石數(石)文は外御蔵米之内より、是迄之通御軍備方江被差分置候旨被仰達候條、向々江可申渡候、

但本一所持之面々、此節領地返獻世祿減少付、本文上納米之義不及沙汰候、伊勢稚楽・鎌田仙十郎・

町田民部儀も同断、

明治二己八月廿四日

知政所

四〇七 諸道不作ニ付節儉救恤ヲ詔ス

二十五日、本年歳登ラザルヲ以テ、詔シテ躬ラ節儉ヲ行ヒテ救恤ニ充テ給ヒ、翌日三條實美公モ亦、百官釀出シテ以テ補給シ奉ラムコトヲ謀議シ、聴許ヲ得テ之ヲ布告セラレ、忠義公等ノ賞典再度拜辞ノ誠意モ亦、神妙ニ思召サレ、当年限り賞秩ノ半額返納ヲ許可シテ、救荒ニ充

ツベク、叙位返上ハ聴許ナキ旨ヲ達セララル、其ノ書類左ノ如シ、

四〇七ノ一 詔書〔八月二十五日〕

朕登祚以降、海内多難、億兆未タ綏寧セス、加之今歳淫雨農ヲ害シ、民將ニ生ヲ遂ル所ナカラントス、朕深ク忱惕ス、依テ躬ラ節儉スル所有テ、以テ救恤ニ充ントス、主者施行セヨ、

四〇七ノ二

御布告書

詔書被 仰出候通、兵馬之後、庶民未タ安堵ニ至ラサル折柄、当年諸道不作、物価日増ニ騰貴、無告之窮民ハ勿論、一同之難渋差迫リ、殊更東京ハ近来衰微之砌、人口ハ従前之通莫大ニテ、遊民最多ク、漸次産業ニ基クヘキ御施法モ未タ行届カセラレサル中、今日ノ姿ニ相成、且又京都ニ於テハ、即今御留守ト相成、自然職業ヲ失ヒ、困窮ニ立至リ候者モ不少、全ク時勢之變遷、無拠次第トハ申ナカラ、必至難渋、彼是以テ深被為悩宸襟、格別之御節儉被遊、既ニ餽饌供給ヲモ 御減少被為在、窮民御扶助被遊候、就テハ於諸官モ、官祿之内ヲ以テ、救恤ニ被充候様願出候段、神妙之儀ニ被

聞食候、右ハ 御不本意ニ被為在候得共、願之趣至誠貫通セサルモ、御残念ニ被 思食、当年之所、夫々減少、返上之儀御許容相成、兩京救荒ニ可宛行旨御沙汰候事、

但救荒ハ一時之變ニ処スル事ニテ、總テ遊手徒食之者無之様仕法立、最可為急務事、

四〇七ノ三

賞典祿辞表指令

鹿兒島藩知事島津忠義

山口藩知事毛利廣封

賞典ハ、深重之 叡旨ヲ以被 仰出候事ニ付、願之趣不被及 御沙汰段、先達テ御達相成候処、猶又再三懇願之旨趣、全至誠之所致、神妙之至被 思食候、就テハ即今諸道不登庶民凍餒之勢ニテ、救荒目下之御急務ニ候処、御用途必至御差迫之折柄、旁以乍 御不本意、当年限り賞秩半高返納被 聞食、救荒ニ可被為充行旨、被 仰出候事、

但叙位返上ハ不被及 御沙汰候事、

【参照】

商議書

此度深厚之叡慮ヲ以テ、救荒ノ儀被仰出、誠以至仁之聖旨、不堪感泣之至奉存候、実美等不肖之身ヲ以重任ヲ奉シ、過分之官祿ヲ賜リ、尸位素餐、実以恐懼無所措奉存候、就テハ実美等官祿五分之一ヲ返納致シ、御救恤之一端ニモ被給、至仁聖意ノ万一ヲモ奉禱補候様有之度不堪至願、諸官各位ニ於テモ御同意之儀ニ候ハ、連署致出願度、仍テ申陳候也、謹言、

八月廿六日

實美

納言

參議

弁官

神祇伯

民部卿

大藏卿

兵部卿

刑部卿

宮内卿

外務卿

集議院長官

大学別当

彈 正 尹

留 守 長 官

開 拓 長 官

御 中

追テ、勅任五分之一、奏任十分之一、判任官ニ及サ
、ル心得候間、其間其省中ハ夫々御示合有之度、尤
各御都合モ可有之候間、御所存次第可然候也、

四〇八 藩庁諸郷ヨリノ願達ハ速ニ処弁スヘキヲ

達ス

コノ日、藩庁ニテハ、諸郷ヨリノ願達ハ速ニ処弁シテ、
往復ニ日子ヲ費サシメ、贈賄ヲナサシムル等ノ悪弊ニ陥
ラザル様注意スヘキヲ達ス、其ノ達文左ノ如シ、

一 諸郷々地頭は勿論、役々より局々江相付、申出之書付
差出候上及手数、且厚く御吟味相成候書付は、急速運
立候儀は当然之事候得共、纒之事柄間々日延相成、夫
故催促等ニ郷役等殊之外長滞在ニおよび、依時宜は有
間敷事ながら、所産物等差贈候様之儀も有之哉ニ相聞
得、當時諸郷御軍備御手当向、分て被仰渡、右通長滞

在旁諸入費相掛候ては、別て不可然事候、全体相互御
用之事候付、於局々も急速弁達いたし候様、厚く心を
用ひ、万一も贈品等有之候ては差返、右等之悪弊無之
様、奉行頭人は勿論、筆者等も屹と心得違無之様可被
取計事、

八月

會計局

右之通向々江可申渡候、

明治二巳八月廿五日

知政所

四〇九 吉井友實彈正少弼ニ任セラル

二十六日、吉井友實彈正少弼ニ任セラル、

吉井三峰日記
友實

同月二十六日

諸省一同參 朝、大広間へ出
御、供御ヲ被減、窮民御救恤之
詔書拜聞、右了テ三條右大臣ヨリ、官禄五分一ヲ返上
救助ニ振向度内談有之、一同御請致シ、大蔵省東京府
へ御達相成、月ニ三千石ツ、御渡シ相成候事、
此日、彈正少弼拜任、

四一〇 北海道開拓ノ儀ニ付、十勝・日高両国ノ内

五郡ノ薩摩藩支配ヲ命セラル

二十八日、朝廷北海道開拓ノ儀ニ就テハ、全国ノ力ヲ用ヒザル可ラズトテ、十勝・日高両国ノ内五郡ヲ本藩ノ支配ニ命セラル、ソノ達書左ノ如シ、

四一〇ノ一
御沙汰書

開拓使

今般本願寺東門主ヨリ北海道新道切立之儀、且有志之僧徒新開村落へ移住、人民教諭為致度段、願之通被差許、万事其府へ可伺出旨申渡候間、此段相達候事、但北海道土地支配被 仰付候藩々へ、為心得其府ヨリ可相達事、

四一〇ノ二

金澤藩

鹿兒島藩

静岡藩

名古屋藩

各通
和歌山藩

熊本藩

右之藩々へ各通御達書写

廣島藩

福岡藩

山口藩

北海道開拓之儀ハ、兼テ被 仰出候通り、即今之急務ニテ、追々御手ヲ被為着候処、何分全国之力ヲ用ヒズンバ、成功無覚束、依之今般別紙地所其藩へ支配開拓被 仰付候間、拮据經營実効相立候様可致事、

四一〇ノ三

鹿兒島藩

十勝国之内當縁郡・廣尾郡・河西郡

日高国之内様似郡・浦河郡

右五郡其藩支配ニ被 仰付候事、

四一一 英国王子参朝周旋ノ慰勞トシテ、大久保

等ニ天酌ヲ以酒肴并ニ包物ヲ賜フ

コノ日、曩時英国王子参朝ノ際、周旋ノ慰勞トシテ、大久保等ニ天酌ヲ以テ酒肴并ニ包物ヲ賜ヒタリ、ソノ記事左ノ如シ、

廿八日

十字参朝、御前議事例之通、今日政府御用濟、右大臣殿・納言・参議常御殿へ被為^{（マユ）}、英王子参朝等骨折思食候トノ勅語被為在、御酒肴賜り、殊ニ天酌ヲ以御杯被下、恐惶不可言、且御包物小判五十兩、御印籠一、羽二重一疋御手賜之候、

今日之事豈容易ナランヤ、卑賤之我輩 玉座ニ近侍シ、親ラ綸言ヲイタ、キ、莫大之 恩賜ヲ蒙リ、反省仕候得共、如夢之仕合、子孫タル者厚鑑ルヘキコト也、

一 今夕吉井へ訪、

四二二 公議人正権大参事ヨリ相勤ムヘキヲ達ス

二十九日、太政官ヨリ今般執政参政ヲ改メテ、正権大参事トセラレタルニ付、公議人モ亦此ノ中ヨリ相勤ムベキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

二十四藩触頭へ御達書

公議人ハ執参中ヨリ可相勤旨、従前之御規則ニ有之、今般御改正、正権大参事即チ執・参ニ相当候間、此段

為心得相達候事、

四二三 藩庁旧格ニ拘ハラズ百姓・町人ヨリモ人材登用ノ旨ヲ達ス

コノ月、藩庁ニテハ、朝廷撰錄門流ヲ廢シ、人材拔擢ノ政体ニ変更セラレ、藩ニテモ藩治職制ヲ治定シ、旧格ニ拘ハラズ、百姓・町人タリトモ才器徳望アルモノハ、擢用アルベキニヨリ、其ノ意ヲ了シ、推挙スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一 先般於 朝廷、撰錄門流被廢、諸事御変更之上、草莽之人材御拔擢、御政体 御一新之折柄、藩治之儀も改めて被

仰出候付、是迄之旧格不拘、百姓町人たり共、才器徳望有之者は、至当之任職御擢用可被為在 思召候間、誰人ニよらず人材可申出旨被 仰出候条、向々江不洩様可申渡候、

明治二己八月

知政所

四二四 藩庁西洋医院召建ニ付、有志ノ者ノ入門

ヲ達ス

又藩庁ニテハ、今般西洋医院ヲ立テタルニヨリ、有志ノ者ハ入門スベク、且ツ来月四日ヨリ西洋医学ヲ開講スベキニヨリ、コレ亦藩内ヘ洽ク申渡スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一今般西洋医院被召建候付、有志之者は彼方江相付、致入門候様、御藩内江不洩様可申渡候、

明治二已八月

知政所

四一五 朝命ニヨリ藩庁京・大坂詰公用人ヲ廃ス

又藩ニテハ、朝命ニヨリ京都並ニ大坂詰ノ公用人ヲ廃シ、大坂ニ会計奉行ヲ詰メシメ、京都ノ会計ヲモ兼ネシメ、京都平日ノ出納ハ、公用方理事ニテ兼務セシムベキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一京都并大坂詰公用人之儀、以来不及詰旨、従

朝廷被仰渡候付、此節引取被仰付、大坂は尔後会計奉行詰被仰付候条、京師表会計之儀も可致管轄候、左候て同所平日出納局は、公用方理事より兼相動候様被仰

付候、此旨可承向江可申渡候、

明治二已八月

知政所

四一六 藩庁外城ヨリノ雇足輕ヲ廃ス

又藩庁ニテハ、外城士ハ往古ノ如ク、城下士同様ニ待遇スベキニ付、外城ヨリノ雇足輕ヲ廃シ、復帰セシムヘシ、然レトモ交義上難キモノハ、願出ニヨリ兵器方足輕ニ列スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一外城士之儀、往古ニ被復、

御城下同様被 仰渡候処、御雇足輕相動候儀、名分不相当之訳ニ候間、一切令廃止候付、当然之御奉公可相動候、就ては数代御雇之勤方いたし居、自然馴合交義ニおゐて難相離者は、頭人江相付願出候ハ、永代兵器方足輕名籍ニ相列候様可被仰付候、帰郷之者は足輕勤務中取込拜借等は、都て被下切被 仰付候条、向々江可申渡候、

明治二已八月

知政所

〔稿本表紙〕

明治二年
九月 忠義公史料 九

〔稿本にて補正〕

四二七 上野景範ヲ傭奴召還ノ為布哇国ニ差遣ス

三日、監督正上野景範敬ヲ布哇国ニ差遣シテ、傭奴ヲ召

還セシメラル、米国公使〔Van Valkenburg〕アルケンホルク及ヒ英・佛二

公使ハ言ヲ布哇駐在ノ公使ニ贈リ、其ノ事ヲ閑説セシム、

明治、史要景範ヘノ辞令左ノ如シ、

三日未辛

御沙汰書写

上野監督正

為御国人召還、以当官布哇島へ使節被 仰付候事、

四一八 太政官ヨリ弾例書ヲ布達ス

八日、去月弾正台ニテ、天裁ヲ得テ決定シタル弾例書ヲ太政官ヨリ布達セラル、其ノ書左ノ如シ、

〔第八百五十四〕九月八日（太政官）〔録註〕「三年第四百十三ヲ以テ停止」

弾例

一 親王及諸司ノ奏任、非職ノ五位以上ノ犯解官親王ハ以上

及判任以下、庶人ノ父母ヲ殴チ、叛逆ニ連累スルモノ

ハ奏彈ス、自余ハ直ニ刑部省ニ糺移ス、

一 判任以下ノ解官以上ハ、台ニ於テ糺彈シ、自余ノ犯ハ

本司及府藩県ノ司ヲ召シテ糺彈ス、又市井庶人ノ非違

ハ巡察視ル所ヲ審ニシ、是ヲ府官ニ移シテ糺サシム、

藩県同之、

但本司及ヒ府藩県ノ司ハ、判官以上ヲ召ス可シ、

一 応須糺劾シテ犯罪未タ其実ヲ審ニセス、抛状勘問スヘ

キハ、刑部省ニ移シテ推考セシメ、委ニ事由ヲ知テ事

大解官ナラハ奏彈ス、又罪条既ニ明著ニシテ勘問ニ及

ハス、或ハ告密ニ涉リ、事急卒ニ出ルモノ等ハ、直ニ

刑部省ニ告テ捕縛セシメ、其推拷スル所ヲ得テ、事大ナラハ奏彈ス、其直ニ省ニ告テ捕縛セシメ、推拷セシムルノ時、解官以上ノ罪ハ、大忠以下一人省ニ臨テ是ヲ聴ク、又台ヨリ發スルノ罪ニアラスト云ヘトモ、大獄ニハ大忠以下監臨スルコト、既ニ布令アルカ如シ、一刑部省死囚ヲ決セハ、断案ヲ台ニ移ス可シ、若冤枉灼然タルアラハ、決ヲ停メテ奏聞ス、又死罪既ニ奏報ストイヘトモ、猶冤枉ヲ訴シテ、事可疑アラハ推覆シテ、以状奏聞スヘシ、

一犯罪發覺スル所ヲ論セス、杖罪以下トイヘトモ、科断ハ一々刑部省ヘ附スヘシ、

一親王・大臣以上官人、及ヒ華族ヨリ庶人ニ至ル迄、車馬・兵仗・衣服・従者ノ数法則ニ違ヒ、華麗僭奢ニ過ルモノハ糺彈ス、吉凶ノ礼法ヲ超ルモノモ又同、

一官司枉判アレハ、所由ヲ追テ糾正ス、又官人本司ニ於テ政ヲ行フニ、怠慢シテ欠有ラハ是ヲ糺劾ス、

一納表匱官人ノ害政、及ビ抑屈ヲ告ルノ書ハ、弁官右大臣ニ上リ不可、後台ニ受テ其所訴ヲ按察シ、理当ハ奏聞シ事大小ヲ、不当理ハ之ヲ彈シテ刑部ニ移ス、論セス

一京中ノ巡察ハ、每町坊令一人ヲ從ヘテ巡視ス、若急卒

捕縛スヘキモノアラバ、巡邏ノ兵ヲシテ縛セシメ、先勘問シテ所司ニ移ス、

一巡察彈正時々京中便地ヲ点シ、坊令ヲ從ヘ、戸主ヲ会集セシメ、巡察是ニ臨テ京府官人及坊令等百姓ヲ枉害セル欵、時政其宜ヲ得サルカ、孝順義節ノ顯ハレサルモノ有欵、如何ヲ尋ヌ可シ、藩県同之、

一巡察時々囚獄ヲ檢校シ、獄司ノ非違ヲ糺彈ス、

一人罪ヲ告ルモノアラハ、宜ク三審ノ法ヲ用ユ可シ、告密モ又令文ニ抛ル、

一奏彈ハ太政官ヲ歷スシテ、直ニ奏聞ストイヘトモ、時宜ヲ計リ、尹若クハ弼、右大臣ト共ニ奏ヌ可シ、尹・弼アラサレハ大忠、右大臣ニ就テ奏ヌ、但右大臣ノ外職事預聞ク事ヲ得ス、

一親王及ヒ參議以上ノ罪ヲ糺劾ス可シハ、時宜ニ從テ制ヲ立ツ可シ、其朝堂ノ非違ハ式ノ例ニ準ヌ、但參議以上ハ尹・弼在ルニアラサレハ彈スルヲ得ヌ、

一四位以下ノ糺彈ハ、悉ク台ニ召ヌ、

一參議以上身病アレハ、家令ヲ召シテ勘問ス、家令本主ニ告テ猶不肯答ハ、忠以下其家ニ向テ對彈ス、四位以下病アレハ、其愈ルヲ俟テ台ニ召ヌ、

但急卒ノコトアレハ此例ヲ用ヒス、

一 台喚三度ニシテ參セス、并ニ勘事ヲ弁申セサルモノハ罪ニ処ス可シ、

一 非常巡察ヲ藩県ニ発シ、政事ヲ覆問シ、非違ヲ糺彈ス可シハ、詔使ノ例ニ準ス可シ、

一 叛逆告密アルニアラサル以外ハ、内奏スルコト有ヘカラス、

但勅問ニ出ルモノハ此限ニアラス、

一 彈正私ヲ挾テ、事實ナラサルモノヲ彈セハ、反座ノ法ニ準ス可シ、

一 尹若シ犯スコトアラハ、弼以下忠以上共ニ議判シテ奏彈ス、其台中ノ官人非違アラハ各相彈ス、

一 朝議法律ニ関ルモノハ彈正悉ク預知ル可シ、儀式衣冠等ノ制度モ又同、

右依 天裁、決定如件、

明治二年八月

彈正台

右之通ニ付、此旨相達候事、

コノ日、藩庁ニテハ、集成館并ニ銃薬方・兵器方奉行以

下筆者ニ至ルマテ、其ノ職ヲ免ス、ソノ達書左ノ如シ、

一 集成館并銃薬方・兵器方之儀、御吟味之訳有之、奉行

以下筆者ニ至迄、都て職務被差免候条、軍務局総裁江
申渡、可承向江も可申渡候、

明治二己九月八日

知政所

四二〇 藩庁改メテ兵器奉行・火薬製造局ヲ建テ、

改革並ニ火薬増産法ノ取調書ヲ上ラシム

九日、藩庁ニテハ兵器方調役ヲ廢シ、兵器奉行^{等六}同副役

及ヒ同見習^{等七}ヲ置キ、銃薬方ヲ改メテ火薬製造局ト称ス、

是ニ於テ局内ニテハ右役員連名ヲ以テ改革并ニ火薬増産

法ノ取調書ヲ上ル、ソノ達書及ヒ取調書左ノ如シ、

一 兵器方調役

右被廢候、

一 兵器奉行副役

右六等官ニ被召建候、

但礮台半隊長次、

一 兵器奉行見習

四一九 藩庁集成館並ニ銃薬・兵器方奉行以下筆

者ニ至ルマテ、其職ヲ免スルヲ達ス

右七等官ニ被召建候、

但礮兵小頭次、

銃菓方之事

火菓製造局

右名目被召替候、

右之通官職廢立等被 仰付候旨被 仰達候条、軍務局

總裁へ申渡、向々へモ可申渡候、

明治二己九月九日

知政所

四〇〇ノ一

火菓増産之事件大頭取調書

王政御一新、海外万国可並立との御趣意を以て、御軍
政一涯御振挙之折柄、火菓製造局之儀、軍務局管轄に
被召替、従前姑息の流弊御一掃の上、改めて我々共へ掛
り被仰付、一局職掌之衆科海陸兩軍礮墩等の御予備、
誠実に充足相成候様との御趣意、謹で奉承知、実以て
其任に当らざる事とハ申ながら、各其得所を取り科業
を分掌し、紛骨碎身して、是非近年中全備いたし候様
勉励仕度申談、盛業勃起之順序左に申上候、
上製火菓百万斤御貯積之事
右當時一日纔百四拾斤調合、御在合ハ六万斤程にて、

時々之御禿し用も其内より差出し、若し事あるの日に
は一日の御用途にも足合不申、抑火菓之事ハ国家の興
亡、人命の死活に関係し、又無事の時と雖も外は侮を
禦き、内ハ非常を戒め、天下を擁護する武備一大根本
の薬品にして、三軍共ニ心を傾け倚頼する所に御座候
得は、何れ海陸兩軍礮墩等之御予備、規則通り充足無
之候ハ、難相濟儀と奉存候、右に付てハ、財賦之弁
不弁ニ依て事業の興廢も有之事ゆへ、向後の所、第一
會計用財之向に於ても、其意を能々体認し、諸向配賦
之輕重を弁晰し、当局起業の財賦聊廢滯不致様、被仰
渡置度儀奉存候、総藩兵隊等も未だ御全備の場には至
らざる由に候へ共、火菓之儀至急之調製出来難き品柄
故、則より手を付け申し度、依て凡そ見当を以て概算
仕候処、百万斤の御貯積にても充分とハ難申上、乍併
此節之所ハ、先づ本行之斤数を目的として諸事取扱仕
度奉存候、

硝石生殖一条之事

右火菓調合用硝石之儀、御国製僅二三万斤位之出産に
て、余ハ都テ他国製等御買入を以て、御用弁相成來、
一旦硝石丘等(産硝場ヲ云フ)御取建にて、稍生硝之道

相立ち候へ共、從來火薬局之儀、治と乱とに依て盛衰いたし、何事に限らず月移り人代り候へ共、頭の御趣意ハ全々貫徹不致、動もすれバ姑息に流れ、画餅に相成候儀のミ有之、尤当時諸藩一同軍備相競の折柄にて、売硝の道も閉塞いたし可申、追々洋製御買入相成、谷山に於て製煉の手に相掛候処、少々ツ、の優劣ハ有之候得共、大体半減より以下にて相留り、甚しきハ五拾斤にて、漸々拾六斤位之採製も有之、たとへは一斤四五百貫文にて御買入被成候品も、薪製法手間等迄相籠候得ハ、拾式三貫文程にも相及、別して高科(科力)に相当不経済之至りと可申、よしや右通高価の品とても、御用弁さへ相成候得ハ可宜候得共、万一も外国と事あるに至り、硝石の入港を停止するに於ては如何致可き哉、此上もなき御一大事と奉存候、加州・奥州辺の寒地さへ売硝之産業致者、御当藩之儀ハ西南海に斗出し、温暖順和の氣候作硝適當の良地にして、中々加州杯の及ふ所にてハ御座なく候、当地も、追々野人の陋習を脱し、文明開化之世振に相成折柄、國産生殖の道も開かずして、多くの不足を他邦に仰ぐハ、実に盲目同然之所為、自然他処の嘲弄も可有之事に御座候、依て生硝

増殖の大概左に列挙す、

一 諸郷々の内先づ第一ハ、沿海筋生硝適宜之地より相始め、便利ニ就て審又は三坪余り之地ニ雑草覆ひの小廠、一家部毎ニ為受持、易簡之作硝場最寄々々に相円め、作土仕込ミ方有之候様、尤手入能行届候得ば、三ケ年余には成熟可相成、其上製法いたし、相当之直成を以て御買上相成候様、是第一集めて為積之趣法にして、郷々に於て往々産物ニも相成り可申、従前之製法所を被廢、苛法を解脱いたしたる上の事候得ば、衆民染付も決てよろしかるべき事と奉存候、

- 一 出水 出水郡内 作土木屋 拾軒
- 一 國府 西曾於郡内 右同 五軒
- 一 高山 肝付郡内 右同 五軒
- 一 川邊 川辺郡内 右同 四軒
- 一 伊集院 日置郡内 右同 三軒
- 一 指宿 指宿郡内 右同 三軒
- 一 串良 諸県郡内 右同 三軒
- 一 鹿屋 肝付郡内 右同 三軒
- 一 末吉 東曾於郡内 右同 三軒
- 一 櫻島 全上 右同 三軒

右拾壹ヶ郷

作土木屋四拾貳軒

右御取建後差て手入は無之候得共、随分成熟いたし候ニ付、同席教示方之内より回動いたし、焚子召列差入地頭申談、所士族之内へ篤と教込ミ、製法いたし候様被仰下度、御入費并運ひ等之儀は、教示方之面々より追て取調可申上候、作土木屋不便之場所も御座候ニ付、澄渣は便利之地へ相運ひ、易簡之趣法ニ召替度奉存候、

一人家床下土持入之事、

右先年より諸郷へ硝石製法所被召建、数度鞍山之上再三取迄も取尽し、跡へ土入之補ひも無之、床下空虚と相成り、既ニ傾覆ニ可及家にも有之、此上取方致し難き訳等にて、引払申上たる時機ニ御座候、右ニ付、此節改所計ひを以て土持入方いたし、三四ヶ年程も相立候得ハ、硝石醸成いたす場所も可有之、其上所計ひにて製法有之度、尤澄渣土ヲ以テ持入イタシ候得ハ、猶亦早々硝氣ヲ醸シ申候ニ付、製法所跡最寄之人家へハ、右ヲ以持入有之候様、取扱仕度奉存候、

一木炭用柳木植殖方之事、

右近郷便利之地ニ就て、挿し付方・生育手入等の次第、教示方之面々より、地頭并所士族等申談、賦付被行候様取計有之度奉存候、

一前条硝石成熟之上、製法方追々の間、凡三ヶ年以上ニも相及可申、当分通之火薬製造器械にては、年分七万斤程之出来にて、当時御貯積之硝石貳拾七八万斤計有之、三ヶ年程は差支無之賦候得共、存外欠缺相立候ニ付ては如何可有之哉、別て無覚束奉存候付、若哉不足ニも相及候ハ、其間他国製・洋製ニても御買入御用便相成候様、被仰付置度奉存候、

一谷山作硝局之事、

右は当時丘廠三拾軒之作土仕込ミ有之、速之成熟採製相成候、右ニ付薪便利之場所故、第一以来之儀は、純精硝石製煉方盛大ニ相成候訳にて、猶又本局一大根本ニ相立申場所柄ニ御座候間、我々共同席より繰廻し相詰、且所士族ニも同様致出席、作土之作業は勿論、製法方之一般詳悉伝習いたし、篤と心得候上、諸指揮をも相加へ候様被仰付度、此節柄段々趣法召替度儀も御座候間、追て取しらべ可申上候、同所之

儀

御先代様齊彬公御創建之御遺跡にして、西洋人(福良ウチノスリ)硝石試験等参局も有之、且他藩拜見人・伝習人(福良ウチノスリ)等毎度参局いたし、滞在も有之場所柄ニ御座候、

一霧島硫黄蒸餾製之事、

当局上製火薬調合ニハ、従来硫黄華被相用來候処、
一 亞硫黄を含有して、火勢を妨ケ候故、火薬ニハ不宜
段、砲術者の議論も有之、餾製・華製両様之火薬、
一 試薬曰砲を以優劣試験仕候処、餾製之方別て宜しき
確証を得申候、右は陶器蒸餾易簡之法を洋書より採
出し、陶器を造り試験する事數十回、或ハ破裂し、
或ハ焚焼し、並列之餾器火度ニ適し不申、執事之面々
大ニ勞屈し、洋書之欺妄ニ申成候得共、猶意を鋭に
して只管成功を謀り、諸書ニ照し識者ニ問索し、鋤
鉄を以て陶器ニ換へ、竈内炎焰の廻旋平均の度を考
へ、折衷数端、又ハ試験する事数回、遂ニ流滴して、
一 純精の品を採取するの法を了得仕候次第ニ御座候、
一 尔来物価騰揚いたし、硫黄華の製費即今之所を以て
一 算計仕候処、一斤の前凡拾貳三貫文ニ的當可仕、左
候得ハ火薬調合用三万斤宛にして、年々三拾貳三万

貫文余の御失費ニ相及可申、然処蒸餾製之法開けて
より火薬ニ適良なるのみならず、残余硫黄余り銀を
以資用ニ召仕ひ、一錢も他ニ仰ぐ儀ハ無之、代銀之
精硫を以火薬調合相成り、西洋人も品位宜しきを称
誉仕候、若又餾製之法開けざる時ニは、高価なから
も硫黄華不被用ては相済申間敷、特ニ霧島出産の魚
硫廢物を取起し、拾五万斤以上の盛産と相成たるも、
一 畢竟蒸餾器之大功力ニ御座候間、右体之情実、會計
局等ニ於て瞭察有之度事ニ奉存候、右ニ付、製法方
之次第もいまた手を附度廉々段々有之、且亦是迄之
仕向運輸等之手続、往々無滞行はれ候様召替度、右
治定迄之間ハ、能く心得候者被遣候様申談置候間、
一 其通被仰付度、未定之内不案内成者ニ於ては、猥ニ
一 私意臆見を以取扱仕、混雜之基ニ御座候ニ付、右之
一 通吟味仕候、
一 火薬調製新水車・樽・器械木屋、今ニ軒御建添之事、
一 火薬調製之儀、当局瀧の上・敷根両所ともに取合せ、
一 一ヶ年漸く七万斤程之出来ニ御座候、其上古水車之
一 儀、精製ニ付十分無之候間、いづれ本行通御建添無
一 之候ては、外ニ百万斤御貯積之目論見更ニ無之、尤

右新水車之儀は、惣力二十六馬力にて御座候処、当

同 見習

分御取建相成たる器械、一軒分の運転八馬力にて相

濟候、然は鉄軸を通し今二軒御建添相成候ても、馬

力の不足無御座候、既ニ一軒分之器械完備の上の事

候得共、差て疑惑の廉も無之、此節は速ニ御成就可

相成儀と奉存候、本行通御建添の上、運轉の度規則

通宜しきを得候へは、一日六七百斤の調製にて、一

ヶ年式拾万斤内外の仕上げニ相及申候間、此際早々

御造當有之度、諸入具賦方迄申上候筈候得共、急埒

の妨罷成候ニ付、頭御免被仰付候ハ、則より取附、

賦書之儀は取しらへ相濟次第差上可申候、

右は当局之儀、是迄姑息間違之取扱勝ニ御座候処、

此節より万端創業同然之所置與廢交換等、別て混雜

にて急速備り難き品々のみ有之、則より手を付ケ不

申候ては、弥以延滞罷成申候間、右之通り頭御免被

仰付置度、左候得は巨細之儀は、追々取しらべ申上

候様可致、大隊長申談、此段申上候、以上、

巳九月

火葉製造局掛

兵器奉行

同 副役

四二一 桂久武官許ヲ得テ四郎ト改名ス

十二日、桂久武(右衛門)官許ヲ得テ四郎ト改名ス、其ノ記

録左ノ如シ、

明治二年己巳九月十二日請官改名四郎

四二二 島津久光権大納言從二位ヲ拝辞シ、猶從

三位様ト称スルコトヲ達ス

十三日、藩庁ニテハ久光公去ル六月二日、権大納言從二

位ニ叙任アリタレトモ、拝辞セラレタルニヨリ、猶從三

位様ト称シ奉ルヘキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一宰相様御事

從三位様

右之通奉称候様、一同江可申渡候、

但先般御位階御昇進被為蒙

仰候得共、御辞表被差出置候付、本文之通、

明治二巳九月十三日

知政所

四三三 函館戦功ニ依リ島津忠義ニ禄壹万石ヲ、

春日艦及ヒ赤塚源六ニモ賞賜セラル

十四日、函館賊徒平定ノ功ニ依リ、忠義公ニ禄壹万石ヲ

三ヶ年下賜セラレ、又別ニ三千三百石ヲ春日艦ニ三ヶ年

間下賜シテ、艦長以下ニ分与セシメ、特ニ艦長赤塚真成

源ニハ、太刀料金千両ヲ下賜セラル、其ノ各辞令左ノ如シ、

四三三ノ一

島津從三位忠義

戊辰之秋北越ニ出張シ、一旦東京ニ凱陣シ、己巳之春

更流賊追討之命ヲ奉シ、奥ノ青森ニ出兵、統テ蝦夷地

ニ入、各所奮戦、屢賊鋒ヲ碎キ、竟ニ箱館ノ巢窟ヲ

拔、平定ノ功ヲ奏候段

叡感不斜、仍為其賞高壹万石三箇年之間下賜候事、

己巳九月

太政官

四三三ノ二

嶋津從三位忠義

其藩春日艦、己巳之春流賊追討之命ヲ奉シ、賊ト奥海

ニ戦、進テ蝦夷地ヲ衝キ、遂ニ函館ノ巢窟ニ迫リ、冒銳

深入、殊死奮撃、運轉其宜ヲ得、屢賊銳ヲ挫キ、竟ニ

成功ヲ奏候段

叡感不斜、仍為其賞高三千三百石、三ヶ年之間下賜候
条、艦長ヲ始夫々可分与事、

己巳九月

太政官

四三三ノ三

從三位源朝臣忠義

高壹万三千三百石

依海陸兵軍功、三年間下賜候事、

明治二年 己巳九月

(太政官印)

(以上三通忠義公史料影写本にて校訂)

四三三ノ四

春日艦長

赤塚源六

己巳之歳、於蝦夷地流賊追討之砌、殊死奮戦、指揮得其

宜候段 叡感不浅、依之為御太刀料金千両下賜候事、

四二四 黒田清隆賞典禄ヲ下賜セラル、奉還スレ

トモ許サレス

コノ日、又黒田清隆ノ功ヲ賞シ、高七百石ヲ永世下賜セ
ラレ、知事公父子并ニ西郷以下ト同シク之ヲ奉還シタレ

トモ許可セラレズ、ソノ辞令及ヒ奉還書左ノ如シ、

戊辰之夏、北越參謀之命ヲ奉シ、大ニ強悍之賊ヲ破リ、進テ羽州之賊ヲ討シ、画策其宜ヲ得、竟ニ成功ヲ奏ス、己巳ノ春流賊北辺ニ横行スルニ当リ、再ヒ參謀ノ命ヲ奉シ、奥ノ青森ニ至リ、統テ蝦地ニ入り、賊巢ヲ挙ケ、平定之功ヲ奏候段、叡感不斜、仍為其賞高七百石下賜候事、

臣清隆頓首謹テ白ス、賞罰ハ國家之大典、一日廢スヘカラサルヲ以テ、朝廷臣ノ微功ヲ録シ、御高七百石下賜セララル、臣伏テ願フニ、乱賊ヲ擒滅シ、王事ニ勤勞スル、固ヨリ臣子ノ常分、豈ニ敢テ重賞ヲ望ンヤ、況ンヤ臣カ如キ、特ニ朝廷ノ威靈旧藩ノ兵力トヲ仮リ、纒カニ克ク功ヲ奏スルヲ得、臣何ノ力カ之レアラシ、嚮キニ旧藩知事父子・西郷以下諸臣辞表ヲ奉シ、叙位賞典ノ位記宣旨ヲ封シ、謹テ闕下ニ奉還ス、朝廷悉ク允許セラレスト雖モ、臣亦嘗テ其部下ニ屬シ、其指揮ヲ奉スレハ、情亦知事父子・西郷以下諸臣ニ同シ、豈ニ微功ヲ以テ重賞ヲ叨ニスルヲ欲センヤ、朝命ヲ汗瀆シ、大典ヲ阻廢スル罪逃レ難シト雖モ、臣ノ

情ヲ憐レミ、罪ヲ宥タメ、賞ヲ収サメ、臣ヲシテ分寸

ヲ効スヲ得セシメバ、何ノ幸カ之レニ加シ、仍テ謹テ賞典ヲ奉還ス、伏シテ冀クハ、臣ノ鄙衷ヲ諒察シ賜ヘ、臣清隆昧死以聞ス、

九月 黒田外務權大丞源清隆

弁官御中

御附紙

辞表之趣、神妙ニ被 思食候得共、御詮議之上被賞賜候事ニ付、不被及 御沙汰候事、

四二五 函館戰降伏ノ者十五名ヲ南林寺脇寮内ニ

置ク

コノ日、又函館表ニ於テ降伏シタル者、十五名ヲ本藩ニ預ケラル、依テ之ヲ南林寺脇寮内ニ置カシム、其ノ達書左ノ如シ、

鹿兒島藩

別紙之者共、於函館表ニ官軍ニ抗敵候処、今般降伏候間、其藩江御預申付候条、国元ニ引取禁錮為致置可申事、

但禁錮中タリトモ、見込以使役等可為勝手事、

九月

兵部省

写

九月十四日

明後十六日芝山内ニ於て

取締

一之宮藩より

可請取事、

櫻井莊三郎

澁谷太左衛門

千代塚鞆負

鈴木金次郎

大瀧重次郎

池田 傳

為貝金八郎

内田万次郎

横田新吉

伊那誠一郎

渡邊昇太郎

上原仙之助

長尾宰一郎

堀口惣平

井川武治

拾五人

櫻井莊三郎外二十四人、於箱館抗敵官軍、今般降伏之者共御預之儀、別紙之通被

仰出候付ては、到着之上南林寺脇寮内江被召置、町役

人之内一兩人付置、日用雜事を弁し、歩行等之節附添候て、彼等申出候儀共は、諸事監察方請持被仰付、随分叮嚀之取扱被仰付、既ニ降伏謝罪之上は、愈以悔悟心服いたし、

御徳政ニ感化仕候様被

仰達候条、監察局総裁江申渡、可承向々江可申渡候、

但禁錮中使役之趣、別紙被

仰出候得共、銘々到着之上、其材器ニ応し召仕候

儀も可有之候、

明治二己十月十七日

知政所

四二六 島津忠義親ラ妙圓寺ニ參詣ス

又藩内ニテハ毎年々中ノ行事トシテ、甲冑裝束ニテ妙圓寺ニ參詣スルヲ例トス、コノ日忠義公亦馬上ニテ親ラ參詣セラレ、軍務局ヨリハ四大隊武裝シテ之ニ列セリ、其ノ概況左ノ如シ、

妙圓寺ハ薩摩国伊集院郷ニアリ、島津家十六代義弘公ノ靈屋アリ、公島津家中興ノ祖ニシテ勲蹟多シ、故ニ藩主ヲ始メ一般士民皆崇敬セリ、此日往時慶長五年

(庚子) 九月十四日、關原ノ大戦アリ、厄難ヲ凌テ難
戦ノ当日ナリ、後代此日ヲ以テ公苦難ヲ嘗ラレタル紀
念ノ日トナシテ、藩士皆甲冑・帶刀・武器ヲ携ヘテ、
參詣スルノ慣風ナリトス、此日忠義公親ヲ參詣セラレ、
隊員皆戎装隊列ヲ組ミテ行軍セリ、其行盛ナリキ、

四二七 藩庁百次・山田二郷ヲ合併シテ永利郷ト
唱フヘキヲ達ス

十七日、藩庁ニテハ百次・山田ノ二郷ヲ合併シテ、^{ナガリ}永利郷ト唱フヘキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一 永利郷

右は百次郷・山田郷之儀、全体小郷ニテ家部人体も
相少、常備兵編制も難相整候付、合郷被仰付、以来
本行之通相唱候様被 仰達候条、可承向々江可申渡
候、

明治二己九月十七日

知政所

四二八 藩庁軍馬役・内厩役・軍馬役助ヲ置ク

コノ日、藩庁ニテハ、軍馬役^{等七}ヲ置キ、廿三日ニ至リ從
来ノ厩役助及ヒ馬医ヲ廢シ、更ニ内厩役^{内務局屬 下八等}及ヒ軍馬
役助ヲ置クベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、
四二八ノ一 一軍馬役

右七等官ニ被召建候、

但毆兵小頭次、

右之通被仰付候旨被 仰達候条、軍務局總裁へ申渡、
向々へも可申渡候、

明治二己九月廿日

知政所

四二八ノ一 一 厩掛出納方之儀御吟味之訳有之、奉行以下筆者ニ至迄
都て職務被免候、左候て出納向之儀は、会計局計被仰

付候旨、被
仰達候条、会計總裁并軍務總裁江申渡、可承向へも可
申渡候、

但厩方威役人之儀は、諸首尾相濟迄之間、是迄之通

可相勤候、

明治二己九月廿三日

知政所

四二八ノ三 一 内厩役

但内務局屬下、

右八等官ニ被召建候、

但道具方頭助次、

一軍馬役助

右九等官ニ被召建候、

但毆兵伍長次、

一厩役并厩役助

一馬医

右被廢候、

右之通官職廢建被仰付候旨、被

仰達候条、軍務総裁并家令江申渡、向々江も可申渡候、

明治二己九月廿三日

知政所

四二九 藩庁諸郷士族ニ家来・下人ノ召抱ヲ許ス

二十三日、藩庁ニテハ、諸郷士族ニモ家来・下人ヲ召抱
フルコトヲ許ス、其ノ達書左ノ如シ、

一鹿兒島諸郷士族之儀、家来・下人召抱候儀差支無之候
条、以来家来家筋之者は、家来ニテ召抱、下人家筋之
者は下人ニテ召抱、不致混雜様向々江不洩様可申渡候、

明治二己九月

知政所

四三〇 藩庁砲兵小頭ノ次ニ軍営下長等ヲ設ク

二十四日、藩庁ニテハ、軍営下長・裨官長・標官^七等ヲ設
ケ、砲兵小頭ノ次ニ位セシムベキヲ達ス、其ノ達書左ノ
如シ、

一軍営下長

一裨官長

一標官

右七等砲兵小頭之次、

右之通官等被召建候条、向々江可申渡候、

明治二己九月廿四日

知政所

四三一 西郷・大久保・小松・岩下ニ賞典祿ヲ賜フ

二十六日、詔シテ王政復古ノ功ヲ賞シ、西郷隆盛ヲ正三
位ニ叙シ(六月二日賞典祿
二十五石ヲ辭ス)、從四位大久保利通ヲ從三位ニ昇
セ、永世祿千八百石ヲ賜ヒ、從四位小松清廉・同岩下方
平ニ各々祿千石ヲ賜フ、其ノ辞令左ノ如シ、

四三二ノ一

西郷吉之助隆盛

大政復古ノ際ニ方リ、身ヲ以テ国ニ許シ、鞠躬尽力以テ成効ヲ奏候段、
叡感不斜、仍賞其功勞、正三位ニ被叙候事、

藤原隆盛

叙正三位

右大臣従一位藤原朝臣實美 宣

大弁従三位藤原朝臣俊政 奉行

四三二ノ二

大久保従四位利通

積年心ヲ 皇室ニ尽ス、丁卯ノ冬大政復古ノ基業ヲ策シ、夙夜励精献替規画、以テ今日ノ丕績ヲ贊成候段、
叡感不斜、仍賞其勲勞位階ヲ進メ、禄千八百石下賜候事、

従四位藤原朝臣利通

叙従三位

右大臣従一位藤原朝臣實美 宣

大弁従三位藤原朝臣俊政 奉行

四三二ノ三

小松従四位清廉

積年心ヲ 皇室ニ存ス、戊辰ノ春大政ニ預參シ、日夜励精以テ中興ノ丕績ヲ贊ケ候段、
叡感不斜、仍賞其勲勞、禄千石下賜候事、

従四位平朝臣清廉

高千石

依勲勞永世下賜候事、

〔維新日誌にて補正〕

四三二ノ四

岩下従四位方平

丁卯ノ歳、復古ノ基業ヲ助ケ、大政ニ參シ、日夜励精以テ今日ノ丕績ヲ贊ケ候段、
叡感不斜、仍賞其勲勞、禄千石下賜候事、

従四位藤原朝臣方平

高千石

依勲功永世下賜候事、

四三二 島津忠義朝命ニヨリ兵ヲ率イテ上京ス

二十七日、忠義公ハ、久光公御召ノ拜辞及ヒ藩知事拜命御礼等ノ用ヲ帯ビ、今回朝命ニヨリ出兵ノ二大隊(第三大隊長篠原冬二郎)

村与十郎・第二大隊長篠原冬二郎

ヲ総括シテ上京セラル、其ノ概要左ノ如シ、

(注) 村田新八・貴島平八両氏ハ君側ノ人ニテ兵ニ關係ナキ人ナレバ、實際ノ大隊長ハ川村・篠原ノ両氏ナルヘシ

四三二ノ一 一宰相様御事、今般從

朝廷御召ニ付、速ニ 御拜趨可被為在筈候得共、未

御全快不被為至候付、

少将様御事右之御辞謝且藩知事被為蒙

仰候御請御礼旁之為め、今度

朝命ニ依て被差出候兵隊 御惣括ニテ、

御上京可被遊候間、何篇軍務之規則ニ基き、輕装之御

手当可致旨被

仰達候条、向々江可申渡候、

明治二己九月八日

知政所

四三二ノ二

一從四位様、明廿七日被遊 御發駕候間、三等官以下任

職之面々并士族、其外一同御城下より御通筋江可罷出

候、

右之通向々江可致通達候、

明治二己九月廿六日

知政所

四三二ノ三

九月廿七日

太守様御在京夷船并肥前等ヨリ御借入ノ蒸氣船モ有

之、都合四艘ニテ二番・三番二大隊、大隊長ハ川村與

十郎・篠原冬一郎ニテ候ヨシ、養子ノ仲八モ出兵云々、

太守様モ衣服袖印相付、兵士ニ御紛レニテ御出立ノヨ

シ申事ニテ候、

但

此節ハ、薩・長・土・肥前ノ大村中藩ニテ、東京

為_マ此屋ヲ建居候向之由、夫故殊ノ外規則モ正シ

ク六ヶ敷候由、尤モ去廿五日ニ、二番隊ノ内五小

隊出帆イタシ候事、

四三二ノ四

九月廿七日 晴

村田新八

帖佐彦七

貴島平八

種子嶋中輔

參役伊集院直右衛門

今朝六ツ時

御發駕、御召船英艦江

御乗船直ニ出艦、御供船飛龍丸・温泉丸・臯月丸も追

々出艦、御崎辺より雨降出ス、
戸之浦沖辺より夜入、

四三三 入道公現親王徳川慶喜以下ノ謹慎ヲ有ス

二十八日、詔シテ入道公現親王・徳川慶喜・松平容保以
下ノ蟄居謹慎ヲ寛宥シ給フ、其ノ文左ノ如シ、

九月廿八日

有典録

四三三ノ一 詔書写

朕聞、明君徳ヲ以テ下ヲ率ヒ、庸主法ヲ以テ人ヲ待ツ、
顧フニ乱賊常ニ有ラス、君徳奈何ニアルノミ、今ヤ北
疆始テ平キ天下粗定ル、慶喜・容保以下ノ如キ、各宜
シク寛宥スル所アツテ、自新ニセシメ、以テ天下ト更
張セン、

明治二年己巳九月廿八日

添 御沙汰書写

法律ハ国家之重事ニ候処、昨年犯逆之罪ニ於テハ、名
義紊乱ノ後ヲ承ケ、政教未洽ノ際ニ付、聖上深く御反
躬被為在、専ラ非常寛典ニ被処候次第、就テハ今度深

キ 思食ヲ以テ、 詔書之通更ニ被 仰出候間、名義
ヲ明ニシ、順逆ヲ審ニシ、反省自新 盛意ニ対膺可致
候事、

四三三ノ二

徳川慶喜

先般謹慎被 仰付置候処、深キ 叡慮ヲ以テ被免候事、

四三三ノ三

静岡藩知事徳川家達

徳川慶喜儀、別紙之通被 仰付候条、此段可相達事、

四三三ノ四

飯野藩知事保科正益

松平容保儀、先般城地被召上、父子永預被 仰付置候
処、深キ 叡慮ヲ以テ、今度家名被立下候間、血脈之
者相撰可願出事、

四三三ノ五

鳥取藩知事池田慶徳

各通

久留米藩知事有馬頼咸

松平容保儀、先般城地被召上、父子永預ケ被仰付置候
処、深キ 叡慮ヲ以テ今度家名被立下候間、血脈之者
相撰可願出旨被 仰出候間、此段為心得相達候事、

四三三ノ六

輪王寺宮

先般、伏見宮へ御預、謹慎被 仰付置候処、深キ 思食ヲ以テ被免、位ヲ止メ実家へ復帰被 仰付候事、

四三三ノ一

小田原藩知事大久保忠良

大久保忠禮儀、別紙之通被 仰付候条、此段可相達事、

四三三ノ七

公 現

今般実家へ復帰被 仰付候ニ付、格別之 思食ヲ以、為御扶助終身三百石下賜候事、

四三三ノ二

伊達慶邦

南部利剛

各通

阿部正静

酒井忠篤

四三三ノ八

伏 見 宮

輪王寺宮先般御預被 仰付置候処、深キ 思食ヲ以テ被免、位記ヲ止メ帰復被 仰付候、此段相達候事、

丹羽長國

牧野忠訓

先般於東京、謹慎被 仰付置候処、深キ 叡慮ヲ以テ被免候事、

四三三ノ九

唐津藩知事小笠原長國

林忠崇儀、先般没籍永預被 仰付置候処、深キ 叡慮ヲ以テ今度家名被立下候間、血脉之者相撰可願出事、

四三三ノ三

伊達宗敦

先般謹慎被 仰付置候処、深キ 叡慮ヲ以テ被免候事、

四三三ノ一〇

大久保忠禮

先般永蟄居被 仰付置候処、深キ 叡慮ヲ以テ被免候事、

四三三ノ一四

仙臺藩知事伊達宗基

伊達慶邦宗敦儀、別紙之通被 仰付候条、此段可相達事、

四三三ノ一五

南部利剛儀、云々同上、

盛岡藩知事南部利恭

各通

内藤政養

四三三ノ一六

阿部正静儀、云々同上、

棚倉藩知事阿部正功

酒井忠良

松平信庸

岩城隆邦

堀直賀

久世廣文

四三三ノ一七

酒井忠篤儀、云々同上、

大泉藩知事酒井忠保

先般、以御咎隠居被 仰付置候処、深キ 叡慮ヲ以テ

被免、更ニ叙爵被 仰付候事、

四三三ノ一八

牧野忠訓儀、云々同上、

長岡藩知事牧野忠毅

四三三ノ二一

上杉齊憲儀、別紙之通被 仰付候条、此段可相達事、

米澤藩知事上杉茂憲

四三三ノ一九

丹羽長國儀、云々同上、

二本松藩知事丹羽長裕

四三三ノ二二

南部信民儀、云々同上、

八戸藩知事南部信順

四三三ノ二〇

上杉齊憲

南部信民

四三三ノ二三

板倉勝尚儀、云々同上、

重原藩知事板倉勝達

板倉勝尚

本多忠紀

田村邦榮

四三三ノ二四

本多忠紀儀、云々同上、

泉藩知事本田忠伸

四三三ノ二五

田村邦榮儀、云々同上、

一ノ關藩知事田村崇顯

四三三ノ三一

水野勝知

四三三ノ二六

内藤政養儀、云々同上、

湯長谷藩知事内藤政憲

先般隱居謹慎被 仰付置候処、深キ 叡慮ヲ以テ謹慎
被免候事、

四三三ノ三三

結城藩知事水野勝寛

四三三ノ二七

酒井忠良儀、云々同上、

松嶺藩知事酒井忠臣

水野勝知儀、別紙之通被 仰付候条、此段可相達事、

四三三ノ三四

磐城平藩知事安藤信男

四三三ノ二八

松平信庸儀、云々同上、

上ノ山藩知事松平信安

其方父鶴翁、先般永蟄居被 仰付置候処、深キ 叡慮
ヲ以テ被免候事、

四三三ノ二九

岩城隆邦儀、云々同上、

亀田藩知事岩城隆彰

四三三ノ三五

酒井雅楽

先般蟄居被 仰付、徳川家達へ御預相成候処、深キ
叡慮ヲ以テ被免候事、

四三三ノ三〇

堀直賀儀、云々同上、

村松藩知事堀 直弘

四三三ノ三六

姫路藩知事酒井忠邦

四三三ノ三一

久世廣文儀、云々同上、

關宿藩知事久世廣業

四三三ノ三七

静岡藩知事徳川家達

酒井雅楽儀、別紙之通被 仰付候条、此段可相達候事、

酒井雅楽儀、其方へ御預被 仰付置候処、被免候ニ付、
此旨相達候事、

一三種二荷

嶋津(忠應)珍彦殿

嶋津(忠應)安藝

四三三ノ三八

久松定昭

嶋津(實政)讚岐

嶋津(久遠)兵庫

先般蟄居被免候節、家事等一切関係致間敷旨被 仰付

置候処、不及其儀候事、

一御太刀

嶋津(久遠)圖書殿

嶋津(久遠)又吉

四三三ノ三九

同人へ

一御馬代銀一枚

今般深キ 思食ヲ以、更ニ叙爵被 仰付候事、

川上東馬

嶋津織之介

四三三ノ四〇

松山藩知事久松勝成

一二種一荷

久松定昭儀、別紙之通被 仰付候条、此旨可相達事、

嶋津太郎左衛門

嶋津隼人

四三四 藩庁家格ニテ異リタル式礼ヲ同式ニ改ム

新納四郎左衛門

桂四郎

二十九日、藩庁ニテハ、從來ノ家格ニヨリ異リタル式礼

ヲ廢シテ、同式ニ改メ、贄品ヲ二種トシ、謁見ノ座席ヲ

定ム、其ノ達書左ノ如シ、

一御太刀

一御馬代銀一枚

嶋津壬生

嶋津助之丞

喜入主計

嶋津良馬

島津郷大夫

嶋津多右衛門

町田民部

伊集院静馬

末川主計

北郷作左衛門

伊集院伊膳

川上勘解由

新納次郎兵衛

種子島彈正

土岐四郎

穎娃彌市郎

小松玄蕃頭 入來院彈正

比志嶋静馬 肝付兵部

菱刈奎之助 諏訪甚四郎

川田掃部 畠山丈之助

鎌田仙十郎 伊勢雅楽

山田新助 鎌田源左衛門

右ハ 御直元服并 御前元服之 御礼 御内証元服之儀、

御家御伝来之御旧式にて、屹と立候御式礼には候得共、此節家格付右式礼は被廢候、左候て嶋津珍彦殿以下初て之 御目見一篇之御式に被相改、以来家名之列順、前件之通、御支族之儀、家統之新古倫次之次第を以て被相定、贄品之儀も二等に被究置、其外従前之拜謁席より一等被引進、別紙之通 御盃并御流頂戴可被仰付旨被 仰達候条、此段向々江可申渡候、

明治二己九月廿九日 知政所

但家督継目等之御礼席并贄品、本文同様被仰付候、

四三五 藩庁城下士ノ家督ヲ相統スル郷士ハ、嫡

庶又ハ血統連続明白ナル者ニ限り許ス

二十九日、藩庁ニテハ、重ネテ郷士ヨリ城下士ノ家督ヲ相統スル者ハ、嫡庶又ハ血統連続明白ナル者ニ限り許可スベキヲ達セリ、其ノ達書左ノ如シ、

衆中より御小姓与養子成、双方互ニ往来御免被仰付、尤第一嫡庶之訳、且血統連続之者より可相撰旨、先達て被仰渡置、其後一同士族被仰付、何れも区別は無之事候得共、全体鹿兒島士族希望之者不少、追々統等不正之者、継目養士等ニ願出候向も有之、家統連続之儀は至重之事候処、右式心得違之儀願出候ては、随て衆弊も可生、旁混雜之基ニ候条、以来嫡庶又は血統連続明白之分、御免被仰付旨、更ニ被 仰達候条此旨一同江可申渡候、

明治二己九月廿九日 知政所

四三六 藩庁水上客屋ヲ廢スルコトヲ達ス

三十日、藩庁ニテハ、水上客屋水上坂上ノ旧藩主參勤往復ノ休憩所ヲ廢セラル旨ヲ達ス、其ノ書左ノ如シ、

一水上客屋

右御不用ニ付被廢候条、会計總裁江申渡、可承向江も

可申渡候、

明治二己九月晦日

知政所

四三七 島津久光・忠義父子ノ賞秩返上ノ上表

コノ月、久光公・忠義公ハ重ネテ、父子ノ昇叙ハ軛シテ故薩摩守ニ贈位ヲ賜ヒ、賞典ハ国債償還ノ万分ノ一二充テラレンコトヲ願出セラル、其ノ願書左ノ如シ、

齊彬公追賞上表

臣久光・臣忠義頓首再拜謹白、今夏六月臣等辱モ 勅感ヲ蒙リ、高位顯官ニ叙任セラレ、加之御高十万石永世下賜フ、然共臣等敢テ其賞典ニ当ラス、天功ヲ貪ルニ似タルヲ以テ、頻捧辞表ノ処、只当年限賞秩ノ半返献ヲ納ラレ、救荒ニ可被為充行ノ 勅旨ヲ蒙リ、官位及ヒ西郷以下ノ儀ハ、其命ヲ得ス、臣等惶伏恭惟微力ヲ王室ニ致シ、朝廟決議ヲ歴テ賞典ヲ賜フ処、皆共ニ奉辞表ハ、強テ

朝命ヲ拒ムニ似タリ、然共前ニ建言スル如ク、臣等聊藩屏ノ任ヲ尽ス、畢竟先臣薩摩守カ遺志ヲ継キ、其事ヲ補充スル所也、故ニ願ハ今臣等ニ所賜ノ賞典ヲ移シ

テ、薩摩守ニ贈位ヲ賜ハラシ事ヲ、然ハ則臣等ニ於テ

孝義ヲ遂テ、 聖恩却テ自ラ拜戴スルニ倍スベシ、且

其賞秩ノ如キハ、猶敢テ是ヲ奉還ス、熟顧ニ方今東北

平定 皇国一体、日々維新ノ治ヲ求ム、然ルニ旧来幕

府ノ弊政、海外ニ対シテ 御国債莫大ニ及フ、是終ニ

国難ヲ醸シ、財用虚耗スルノ根基、実ニ臣子憂患スヘ

キノ最大ナル者、伏テ冀クハ今返献スル所ノ賞秩ヲ納

メ、海外ノ国債万分ノ一二充償セラレ、速ニ会計ノ道

ヲ立、終ニ国債無ラシメン事ヲ、是レ臣等切徳想到、

固辞シテ止サル所以也、西郷以下ノ心情亦同ク、前ニ

請フ所ノ如シ、願クハ 聖明臣等カ表情ヲ照察シ玉ヒ、

哀憐ヲ垂テ、賞秩返献ノ懇願ヲ允容シ給ヘ、 臣久光・

臣忠義誠恐誠惶、頓首再拜謹白、

九月

島津従三位久光

鹿兒島藩知事忠義

弁官御中

四三八 島津忠義北海道開拓ノ宥免ヲ出願ス

コノ月、忠義公ハ、先月廿八日ヲ以テ命セラレタル北海

道ノ開拓ハ、土地遠隔ニシテ且ツ藩内属島ノ事繁多ナレハ、開拓渋滞ノ恐レアルヲ以テ、之ヲ免セラレンコトヲ出願セラル、其ノ願書左ノ如シ、

臣忠義謹建言

皇道古ニ復シ、維新ノ時ニ至リ、日ニ治教上ニ明ニ風俗下ニ美シク、蝦夷ノ遠キ國ヲ開キ、繁殖シ愛恤ヲ加フ、今其地ヲ北海道ト改称シ、分割シテ國郡ノ名号ヲ定メ、各藩ニ令シテ其地ヲ開拓セシム、鹿兒島ノ如キ十勝・日高二國ノ内ニ於テ某々ノ五郡ヲ管轄セシム、實ニ千古希觀ノ盛典、億兆綏撫ノ浩業、皇沢夷民ニ波及スト云フヘシ、何レノ藩カ拮据經營ノ力ヲ用ヒ、勉勵シテ其成功ヲ謀ラサラン、雖然鹿兒島藩ニ於テハ、皇國ノ極南ニ在テ北地ヲ距ルコト殆千里、況乎琉球國及ヒ四島諸島ノ如キ藩ヲ距ルコト、其遠キハ五百里、近キハ数十里、如斯遠離ノ諸島士ノ利害ヲ弁解シ、急苦ヲ救ヒ難シ、是ヲ憂傷スル日久シ、更ニ他藩ノ比類スヘキニアラズ、然今蝦夷ノ遼遠ナル北南隔絶、四時寒暖ヲ異ニスルノ地、併セテ是ヲ管轄セバ、開拓治民ノ成功我藩決シテ成シ得ヘキニアラズ、夫如斯ハ自ら王民ヲ傷ヒ疾シムルノ罪ヲ拓クハ、實ニ恐懼ノ至ニ勝

ス、伏テ願クハ聖心特ニ臣ヲ任重、道遠シテ難任ノ苦情御洞察ヲ垂玉ヒ、今蝦夷管轄開拓ノ命ヲ允許シ給ハシコトヲ是望是冀、臣忠義謹録奏聞謹奏、

己巳九月

鹿兒島藩知事

弁官

御中

四三九 藩庁各武術ハ各々ソノ師宅ニ於テ練磨ス

ヘキヲ達ス

コノ月、藩庁ニテハ、上下演武館ヲ閉ヂタルニヨリ、各武術ハ各々ソノ師宅ニ於テ練磨スベク、且ツ從來設置ノ各師範家ハ、今回皆免セラル、然レトモ自宅ニ於テ教授スルヲ妨ケサル旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

四三九ノ一 上下演武館之儀、御引取被仰付候条、銘々師家宅ニお

ゐて武術致出精候様被仰付候、就ては以来不時ニ、

少将様師家江被為 入、武術被遊

御覽、又は二丸稽古所江も追々被召出、可被遊

御覽旨被 仰達候条、師家之面々江申渡、可承向江も

可申渡候、

但下演武館跡之儀は、軍務局支配被 仰付候、

明治二己九月 知政所

四三九ノ二

馬術師家

比志嶋 静馬

町田 平

高橋 甚五兵衛

射術同

高田 十郎 右衛門

東郷 長左衛門

伊集院 半五右衛門

平田 平六

木上 源五郎

鎗術同

梅田 九左衛門

白尾 登五右衛門

長刀

田代 宗次郎

右は是迄師家被召立置候得共、右諸術何れも当用実用之利相少候間、銘々師家被差免候旨被 仰達候条、当

人共江申渡、向々江も可申渡候、

但銘々師家共は被差免候得共、懇望人江は其術致指南候儀は不苦候、

明治二己九月

知政所

四四〇 藩庁集成館并火薬製造局ニ士族ノ就職ヲ

許可ス

コノ月、又藩庁ニテハ、集成館并火薬製造局ニハ、士族ニテモ就職スルコトヲ許可スヘキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一集成館并火薬製造局之儀は

御先代様深 思召を以被召建、軍器專要之製造所ニ候間、士族たりとも是迄之通製造方として、罷出候儀不苦候旨、被

仰達候条、軍務局總裁江申渡、可承向江も可申渡候、

明治二己九月

知政所

四四一 藩庁大工等諸職人ノ賃金定則ヲ取締ル

コノ月、又藩庁ニテハ、大工・木挽・日雇等諸職人ノ賃銀定則ヲ紊ラザル様、取締ルベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一大工・木挽・日雇等諸職人賃錢之儀、上下夫々兼て被定置候処、頃日何となく緩せ相成、就中下町出火以後ニ至り、過当之雇賃払受、殊ニ甚敷ハ別段食物等差出候哉ニ相聞得、別て不可然事候、方今物価沸騰一般之折柄、猶更右休之取締、嚴重不行届候ては不叶事にて、右等職工之儀は、専宮繕方管轄之事候条、前文之趣奉行監作汲受、取締精微行届候様、宮繕奉行江申渡、會計局・監察局其外向々江可申渡候、

明治二己九月

知政所

四四二 藩庁二ノ丸ニ内厩方ヲ置クコトヲ達ス

コノ月、又藩庁ニテハ、二ノ丸（久光公邸）へ内厩方ヲ置キ、五足立馬并予備馬ヲ養フベキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一内厩方

右二丸江被召建候、左候て五足立馬並右見合馬被召置

候旨被 仰達候条、此旨家令へ申渡、可承向江も可申渡候、

明治二己九月

知政所

四四三 黒田清隆箱館戦功賞典取調ヲ命セラル

コノ月、朝廷ニテハ、黒田清隆ニ箱館戦功賞典取調ヲ命セラル、

明治二年九月日^{不詳}

箱館戦功賞典取調被仰付、

四四四 島津忠義国産出品記念ノ金牌贈与ニ対シ

佛国皇帝へノ礼状

コノ月、佛国皇帝ヨリ同国展覧所へ、国産出品記念ノ金牌ヲ忠義公ニ贈与セラレタル御礼状、

朝廷へ伺ノ上、外務省町田民部へ渡方ヲ依頼セシ旨ヲ、東京ヨリ知政所ニ報ス、其ノ文左ノ如シ、

一佛国展覧所へ御国産被差出候記念として、彼国帝より黄金之切貨を 太守様江進上相成候儀ニ付、御直御挨拶

明治 2 年(1869)

摺之儀、御草案之通

朝廷へ相伺、彼国へ相達候様可取計旨、被仰越候趣承
知仕則外務省町田民部へ引合、御草案取直之通ニテ、
渡方等之儀も同人引受相成申候、此段申上越候、以上、

巳九月三日

田中清之進

知政所

〔稿本表紙〕

明治二年
十月 忠義公史料 十

〔稿本にて補正〕

四四五 大久保・小松・岩下上書シテ昇叙ノ位階并

賞典禄ノ奉還ヲ請フモ許サレス

二日、大久保利通上書シテ、昇叙ノ位階并ニ賞典禄ヲ奉還シ、其ノ禄ヲ以テ救荒ノ一助ニ供センコトヲ請ヒ、小松清廉・岩下方平亦同様ノ懇請ヲナシタレトモ、皆聽許ナシ、其ノ上書及ヒ指令左ノ如シ、
四四五ノ一
乃ち十月二日、左の表を奉りて恩賞を辞退したり、

臣利通頓首再拜、謹て白す、頃者

朝廷大政復古の功を録し、褒賞の典を挙げ、臣に授るに從三位を以てし、臣に賜ふに禄千八百石を以てす、臣命を奉して愧悚の至に堪へず、伏て惟ふに、數百年衰頽の運を回し、今日維新の基を開く、是皆列聖在天之靈

皇帝陛下威徳の然らしむる所、固より臣か輩の能く為す所に非ず、豈に恩寵を叨にし、朝章を玷すべけんや、故に敢て 尊嚴を冒瀆し賜ふ所の位禄を併せ、謹で之を奉還す、今茲淫雨農を害し、年穀登らず、

朝廷節儉を行ひ、用度を減し窮民を賑恤す、願くは区々の微衷を察し、辞する所の禄を以て救荒の一助に供せよ、臣菲才を以て密勿に參贊し、日夜惴々其任に副はざるを是懼る、今此隆命を奉する、尤心に安んぜざる所、故に鄙衷を具陳す、伏て乞ふ、幸に照覽を賜へ、

臣利通恐懼再拜、

然るに、恩賞は深き叡慮に依りて賜はりしものなればとて、許し給はざりき、御沙汰書に曰く、

辞表厚き旨趣に候得共、思食被為在被 仰付候事に付、返上之儀不被及

御沙汰候事、

四四五ノ二

小松清廉上表

臣清廉謹テ奉願候、今般格別之 叡旨ヲ以テ、積年心
ヲ 皇室ニ存シ、戊辰之春大政ニ預參シ、中興ノ丕績
ヲ贊ケ、其功勞トシテ禄千石下賜候段拜承、恐懼ノ至
奉存候、清廉不肖先キニ參預ノ末列ヲ辱スト雖モ、曾
テ寸功ヲ奏セス、負職之罪寔ニ多シ、 聖朝寛大、特
リ其譴責ヲ赦シ給フ而已ナラス、重テコノ非常ノ特恩
ヲ蒙ル、感戴寔ニ無已、伏惟ルニ、方今軍国多事、
用度至急、清廉無功ノ身ヲ以テ、徒ニ廩禄ヲ費シ、
計ヲ虧キ候儀、罪責益重シ、謹テ禄千石如數奉還仕度
奉存候、但至重ノ 特旨ニ奉戻候段、恐怖非輕ト雖モ、
寔ニ不得已ノ情願被 聞食候様、宜ク御執奏奉願候、
臣清廉頓首々々謹言、

十月

小松清廉

弁官御中

御附紙

辞表之趣尤ニ被 思食候得共、功勞 叡感之余リ賞賜
候ニ付、返上之儀ハ不被及 御沙汰候事、

四四五ノ三

岩下方平上書

去月二十八日、東京ニテ名代へ、復古之基業ヲ助ケ、

大政ニ參シ、日夜励精、以テ今日ノ丕績ヲ贊ケ候段
叡感不斜、仍賞其勲勞、禄千石下賜候旨被 仰渡、千
万難有奉存候、右ハ拙劣之身ヲ以テ 皇運之隆盛ニ奉
逢、無量之蒙 朝恩、奉高官不堪恐懼候、然ニ軍務ノ
輩ハ、東国ノ大敵ヲ一年ノ内ニ平定仕、前代未聞ノ大
功ヲ立候ニ、治事官ハ既ニ三年ヲ経候得共、民心全平
定ニ不至、兩京逐日テ窮民相生候由承候へ、在官之輩
ノ罪ト深奉恐入候間、右千石此涯返上仕度候ニ付、海
陸軍御入費、又ハ窮民御救助ノ端ニモ御用被下、追テ
御基本確立、万民安堵仕候上、拜領被 仰付被下候得
ハ、寔ニ難有奉存候間、微衷御憐察被下候テ、可然御
執成被下度奉伏願候、恐惶頓首、

十月

岩下方平

弁官御中

御附紙

辞表之趣尤ニ被 思食候得共、功勞 叡感之余リ賞賜
候ニ付、返上之儀ハ不被及 御沙汰候事、

四四六 島津忠義ヨリ六月五日附軍艦献上ノ請願

許サル

三日、忠義公ヨリ本年六月五日附軍艦献上ノ請願、本日
聴許セラル、

二年十月三日

鹿兒島藩知事島津忠義、軍艦ヲ献センコトヲ請フ、是
日之ヲ聴ス、

四四七 藩庁末吉郷ノ内伊勢雅楽旧領地ヲ岩川郷

ト唱フヘキヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、末吉郷ノ内伊勢雅楽旧領地ヲ以テ
一郷ヲ分置シ、岩川郷ト唱フベキヲ達ス、其ノ達書左ノ
如シ、

一岩川郷

右は末吉郷之内伊勢雅楽旧領地岩川之儀、此節隊兵
編制之處、從來之士氣振起、一邑之兵員を以常備兵
制も相整候付、諸外城同様、今般一郷ニ被召立、以
來本行之通相唱候様被 仰達候条、軍務總裁并地頭
江申渡、向々江も可申渡候、

但岩川之儀、是迄末吉地頭并副役管轄之事候付、
以來共此内之通相心得、可致指揮候、

明治二己十月三日

知政所

四四八 藩庁從來ノ厩ヲ改メテ軍馬方ト称シ同筆
者ヲ置クヘキヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、從來ノ厩ヲ改メテ軍馬方ト称シ、
同筆者ヲ置クベキヲ達セリ、

一軍馬方

右是迄之厩右之通唱被相替候、

一軍馬方筆者

右十一等官江被召建、馬医頭、

右之通被召建候旨、被 仰達候条、軍務總裁へ申渡、
向々江も可申渡候、

己十月三日

知政所

四四九 島津忠義兵隊引卒神田橋邸ニ着館ス

五日、忠義公兵隊引卒、本月一日神奈川ニ上陸シ、三日

間川崎駅ニ滞在シテ、後船ノ到着ヲ待チ本日入京、神田橋邸ニ着セラル、コレ徴兵ノ始メナリ一大隊ハ神田橋内ノ藩邸、二大隊ハ砲隊ハ、教寄屋橋ト町奉行邸

内旧大河内邸、四四九ノ一、其ノ記録左ノ如シ、

実父從三位、就御用至急東京江參着候様、御達之趣承知仕候、然処此内より病氣ニテ、涯々出府仕候体無之、

私儀も兼テ御届申上候通、春米所勞罷在、未療養中ニ候得共、実父病氣之御届、且藩知事被

仰付候御礼旁として、先月廿七日押テ鹿兒嶋表出船、

今日 御当府着仕候、依之早速可奉窺

天機咎候得共、猶又途中より不快ニテ參

朝難仕候、此段御届申上候、以上、

十月五日

鹿兒嶋藩知事忠義

弁官

御中

右隈元敬一郎より官掌横川虎藏へ差出候処、落手相

成候事、

一三條様・岩倉様へ御使者を以形行被仰進候事、

四四九ノ一

同月五日 雨

伊集院直右衛門

村田 新 八

貴 島 平 八 種子嶋中輔

今日御機嫌能川崎八字御発途、梅屋敷鮫洲釜屋へ

御小休ニテ、二字比神田橋内御屋鋪江御機嫌克被遊

御着候事、

四四九ノ三

一從四位様御儀、去ル朔日神奈川御着船、同所より御上

陸御通行、同二日より四日迄川崎駅御滞在ニテ、同五

日御機嫌能被遊御着邸候段申来候、依之外略ス、

明治二巳十月廿七日

知政所

四五〇 島津忠義春日艦及ヒ赤塚等ニ下賜ノ賞典

ヲ奉還センコトヲ請フ

七日、忠義公ハ、曩時公並ニ春日艦及ヒ赤塚等ニ下賜セ

ラレタル箱館征討ノ賞典ヲ奉還センコトヲ請ハル、其ノ

書左ノ如シ、

上表

臣忠義頓首謹白、今茲巳巳之春、流賊追討ノ命ヲ奉シ、

兵ヲ奥ノ青森ニ出シ、続テ蝦地ニ入り、箱館ノ賊巢ヲ

抜キ、平定ヲ致ノ功ニ依リ、自今三年御高一万石ヲ下賜ヒ、其他春日艦及ヒ赤塚某以下ノ軍勞ヲ被録、御高

并御金等ヲ賜フ有差、皇恩優渥臣等不堪感戴ノ至、

然トモ窃ニ惟レハ、方今百度維新、諸費不貲、殊ニ外城ノ御国債莫大、宸襟憂惱ノ日、時勢ヲ忘レ、微功

ヲ以テ隆寵ヲ叨ニスル、実ニ臣子所不安、赤塚某以下ノ者ニ至リ、臣ト同情亦別紙ニ表ス、因テ恭シク所賜ヲ拳テ闕下ニ奉還ス、

天威ヲ冒瀆ス、実ニ不堪惶恐、冀クハ 聖明鄙衷ヲ垂照シ賜へ、臣忠義頓首昧死以聞、

十月七日

鹿兒島藩知事忠義

弁官御中

四五 一 庶民ノ西洋形船舶ヲ所有スルヲ允ス

コノ日、庶民ノ西洋形船舶ヲ所有スルヲ允シ、又製造購入セントスル者ハ、管轄庁ヲ經テ外務省へ願出ツベキヲ達セラル、ソノ達書左ノ如シ、

西洋形風帆船・蒸気船、自今百姓町人ニ至ル迄所持被差許候間、製造又ハ買入等致度者ハ、管轄府藩県添書

ヲ以テ、東京外務省へ可願出事、

但

身元不慥ノ者共、外国人馴合、御国人所持ノ名ヲ貸与へ候様ノ悪弊無之様、府藩県ニ於テ篤ト吟味ノ上、添書可致候事、

十月〔七日〕

太政官

別紙式通之通被 仰渡候段、東京ヨリ申来候条、此旨向々へ致通達、諸郷へモ可申渡旨、地頭へ可申渡候、

月 日

知政所

四五 二 藩庁諸郷士ノ養子願ハ伝事ノ指揮ヲ受ケ

サス

九日、藩庁ニテハ、諸郷士ノ分地別立・隠居・家督・養子等ノ取扱ハ、地頭ニ委任セラレタレドモ、格違ノ者ヨリ養子願ノ件ハ伝事ノ指揮ヲ受クベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一 外城士族分地別立之儀、尔後本家江軍役高拾五石以上残置、五石以上分地いたし候者は、別立可被仰付候、但拾五才以上ニテ、御軍役等相動候年輩相成候上可

願出候、

一 隠居・家督并継目其他諸事、従前地頭又ハ旧領主より
処置相成候儀は、都て以来も地頭江被託置候、

一 養子成之儀は、兼テ御布告之通、至重之事情付、第一
嫡庶并血統連続之者可相撰候、

但同格より養子相当之者無之、格違より嫡庶或ハ血
統連続之訳を以、養子願出候節は、伝事江相付可
得差図候、

一 諸郷士族之家筋追々治定之上は、夫々名籍編集、到後
年追補致連続候様被仰付候、

右之通、諸郷士族分地別立等之儀被定置、取扱之儀
ハ、地頭江委任被 仰付候旨被

仰達候条、諸地頭江可申渡候、

明治一己十月九日 知政所

四五三 藩庁菱刈七ヶ郷ハ小郷ニ付牛山・太良・菱

刈三郷ニ合併ス

十日、藩庁ニテハ、菱刈七ヶ郷ハ皆小郷ニテ、兵隊編制
并ニ政治上不便ニ付、大口・羽月・山野ヲ合併シテ牛山

郷ト、本城・曾木ヲ太良郷ト、馬越・湯ノ尾ヲ菱刈郷ト
唱フベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、
薩州伊佐郡之内

一牛山郷

右大口郷・羽月郷・山野郷合郷にて、右之通可相唱候、
隅州菱刈郡之内

一太良郷

右本城郷・曾木郷合郷にて、右同断、

一右同郡之内

一菱刈郷

右馬越郷・湯之尾郷合郷にて、右同断、

右は菱刈七ヶ郷之儀、全体小郷にて、兵隊編制は勿論
治事に付ても、旁弁別之訳も有之候付、右之通合郷被
仰付、旧名之由緒を以、以来本行之通相唱候様被

仰達候条、地頭江申渡、其外可承向江も可申渡候、

明治一己十月十日 知政所

四五四 藩庁諸郷軍役高ヲ五十石限ト改メ、過上

高ハ無高ノ者ニ売却セシムヘキヲ達ス

十二日、藩庁ニテハ、諸郷軍役高百石限ヲ五十石限ト改

メ、過上高ハ当秋收納以後、壹石二百貫文ニテ、同郷常

備兵中無高ノ者ニ売却セシムベキヲ達ス、其ノ達書左ノ

如シ、

一諸郷軍役高之儀、百石限被究置候得共、追々常備兵被

召建候処、無高之者共不少候付、此節猶又吟味之趣有

之、全体諸郷は土着之儀ニも有之候付、以来諸郷一同、

軍役高五拾石限被究置候条、過上高有之面々は、壹石

式百貫文直成を以、其郷々ニおひて相對売払候様、無

混雜可取計旨、地頭江申渡、会計局其外可承向江も可

申渡候、

但当秋收納済之上、本文之通可取計候、

明治二己十月十二日

知政所

四五五 島津忠義藩知事拜命御札ノ為參内天氣ヲ

伺フ

十三日、東京ニテハ、忠義公參内天氣ヲ伺ヒ、藩知事拜

命ノ札ヲ述ベ、三條公・岩倉公ヲ訪問セラル、其ノ概況

左ノ如シ、

四五五ノ一

十月十三日 晴

伊集院直右衛門

種子嶋中輔

村田新八

帖佐彦七

貴嶋平八

一今日四時御直垂被為

召、御書院より御本門

御出、御馬ニテ

御参

内、三條様・岩倉様江

御見舞、八ツ時分被遊

御帰殿候事、

一五節句朔日御衣冠

御参賀相成候事、

但十五日は御参賀無之候、

一初て伺

天氣御参

朝之節、御着服伺候処、直垂・狩衣勝手次第第二御差図

付、狩衣被成御用候、

一札服着用と御達有之候御廉ニは、御衣冠ニ候事、

一御供方羽織袴致着用候、

一御供方人数

從衛長式人

御馬脇四人

御先供三人

徒目付壹人

御草履取三人

御鎗持壹人

御長柄傘持壹人

御手傘持壹人

押 三人

一下乘内

從衛長式人

御草履取三人

御長柄傘持壹人

押壹人

雨天之節雨具持壹人

一下乘内江入候御供は、御玄喚前脇掛江扣居候、

一平常は直垂狩衣之間御用之事、

一大手門横前ニテ御下乘御下馬被成候、

一御刀は藩知事之御廉ニテ御自身御持上り、御華族方御

扣所江被差置候事、

但御職掌無之御位階計之御方は、田安・一橋辺ニテ

も御持上り無之由承申候、

一官掌御頼無之事、

右之通御座候、以上、

十日

右公用方より佐竹様方江聞合差出候事、

一士分六人

内家令壹人

侍直長式人

侍直式人

侍医壹人

下部三人

草履取式人

傘持壹人

右之通

御参

内其外屹と立候御供方人数、被相究置候事、

一知事儀、為窺

天機、明十三日参

内仕候ても御差支無御座候哉、此段奉伺候、以上、

唐尼鳩澤
公用人

十月十二日

弁官

田中清之進

御役所

御張紙朱書

伺之通、

本文 以来は不及伺候旨承届候事、

右田中清之進より官掌へ差出候処、即日 御張紙にて被召下候事、

四五五ノ二
一巳十月十三日、御直垂被為召、御馬にて巳ノ刻御発邸、

坂下御門下馬より御歩行、御玄関より御刀御持上り、

御扣所へ御滞席、官掌柴野辰太郎を以、御手扣書被差出、四ノ間ニおゐて岩倉卿御逢、大手御門より御出、三條様へ御見舞、岩倉様へも御同断、夫より御帰邸被遊候事、

伺

天氣、且藩知事被

仰付候為御礼、参

内仕候、以上、

十月十三日

宮内省

鹿兒嶋藩知事

御中

右当日官掌を以被遊御差出候事、折紙等毎之通、

私事、今日窺

天氣、且藩知事被

仰付候為御礼、参

内仕候付、時候為御見舞

伺公仕候、

十月十三日

鹿兒嶋藩知事

右上包折紙ニ手扣と相認、三條様・岩倉様へ御見舞、取次へ被遊御差出候事、

四五六 藩庁民事局ヲ会計局ノ上ニ置ク

十五日、藩庁ニテハ 朝廷ノ職制ニ基キ、民事局ヲ会計局ノ上位ニ置キ、総裁(首等) 一人ヲ増加シテ、会計局ノ管掌セシ市政総判ノ事務ヲ移シ加フベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、
四五六ノ一
一民事局

右は 朝廷之御職制ニ基き、改めて会計之頭ニ被召建

明治2年(1869)

候、

一民事局総裁

右二等官ニ被召建候、

一民事奉行同副役見習

右官等は迄之通、

一民事局筆者

右十等官ニ被召建候、

右之通被召建候旨被 仰達候条、向々江可申渡候、

明治二巳十月十五日

知政所

四五六ノ一
一民事局

総裁一人

田宅・租税・賦役・駅通・水利・開墾・牧場及ヒ

市政之事を総判するを掌る、

奉行

掌同総裁、

一會計局

総裁一人

内外之用度・金穀・出納・物産・営作之事を総判

するを掌る、

但市中之事を総判之件除く、

奉行

掌同総裁、

内一人市政を主当し、市中之庶務・訴訟を聴受

する之件除く、

右は此節民事局被召立候付、右之通職制被相改候旨被

仰達候条、民事局総裁并會計局総裁江申渡、可承向へ

も可申渡候、

明治二巳十月十五日

知政所

四五七 島津忠義大圓寺ニ參詣シ廟所ヲ拝シ戦死

者ノ墓所ヲ弔フ

十六日、東京ニテ、忠義公大圓寺ニ參詣シ、廟所ヲ拝シ、

戦死者ノ墓所ヲ弔ハル、其ノ概況左ノ如シ、

十月十六日 晴

伊集院直右衛門 種子嶋中輔

村田新八 帖佐彦七

貴嶋平八

一今日十一字比より

御歩行ニテ南御門

御出、大圓寺江

御参詣、

御廟所江

御拝礼、夫より戦死人数墓所江被為

入、御焼香被下、同所

御立、片町萬清江

御立寄、昼過比

御立、愛宕社江も

御立寄、暮時分被遊

御帰殿候事、

四五八 藩庁諸局ノ総裁以下筆者迄在職人数名書

ヲ差出スヘキヲ達ス

十九日、藩庁ニテハ、諸局総裁以下筆者迄、現在在職人数ヲ朝廷ニ届出ツベキニツキ、人名書差出スヘキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一諸局総裁・奉行初筆者迄、当分在職人数、此節

朝廷江御届相成候付、人数名書早々差出候様、向々江

可申渡候、

明治二己十月十九日

知政所

四五九 島津忠義所勞ニ付参内セス

二十日、東京ニテハ、忠義公本日御召アリタレドモ、所

勞ニテ参内セラレズ、其ノ御届書左ノ如シ、

一私儀、今日限(依カ)

召参

内可仕之處、所勞ニ付御断申上候、以上、

十月廿日

鹿兒島藩知事

弁官

御中

右田中清之進より官掌へ差出候事、

四六〇 藩兵二大隊・二砲座ノ調練ヲ天覽アリ

二十二日、東京ニテハ、藩兵二大隊・二砲座ノ調練ヲ

天覽アリタリ、其ノ大要左ノ如シ、

十月廿二日 晴

伊集院直右衛門

種子嶋中輔

村田新八

帖佐彦七

貴嶋平八

一今日調練就

天覽、朝五ツ時分二大隊・二砲座共繰出、九ツ半時分相濟帰陣有之候事、

明治二(二十)月廿二日

知政所

一御二度後より

御歩行ニテ西御門

御出、淺草内江暫時被為

入、夫より兩國橋脇青柳江

御立寄、暮前被遊

御帰殿候事、

四六二 皇后宮着京ニ付、島津忠義名代參内ス

二十四日、東京ニテハ、皇后宮御着京ニ付、忠義公參

内セラルベキノ処、所勞ニ付名代トシテ重臣ヲ參内セシ

メラレタリ、其ノ御届書并ニ知政所ヘノ報知左ノ如シ、

四六二ノ一
一明廿四日

皇后

御着輿被為在候ハ、則刻又は翌日之

知事參

内、恐悦申上候儀ニも可有之哉、且差掛病氣之節ハ、

名代重役を以申上候儀ニも可有御座候哉、此段奉伺候、

以上、

鹿兒島藩

公用人

四六一 藩庁兵器方隊ヲ編制シ其ノ俸禄ヲ定ム

コノ日、藩庁ニテハ、兵器方隊ヲ編制シ、其ノ俸禄ヲ定

ムル旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一、一等禄六石

一、二等禄五石

一、三等禄四石

十月廿三日

田中清之進

宮内省

御中

(朱書)
御張紙

明廿四日第十二字より第三字迄之内、恐悦可申上、
且病(氣丸)之節は、可為伺之通候事、

右十月廿三日山本十次郎より差出候処、御張紙を
以、平松宮内権大丞より被相渡候事、

一右ニ付、月番金澤外二藩よりも伺出候処、在東京
ハ参賀可致、在藩之向は名代ニも不及候事、

右之通御張紙相成候て、猶又平松大丞殿より隠居嫡
子参朝ニ不及、当主不参之向は、宮内省宛之書面を
以、官掌へ御届可申出旨被相達候、申達候事、

四六二〇二
一今日

皇后着御被為在候、為御祝儀参

朝可仕之処、所勞ニ付御断申上候、以上、

十月廿四日

鹿兒島藩知事

宮内省

御中

右田中清之進より官掌へ差出候事、

右付清之進より 礼服着用、官掌へ相付、名札を以

恐悦申上候事、

皇后着御ニ付
恐悦
鹿兒島藩知事所勞ニ付
重役代
田中清之進

四六三 島津忠義岩倉具視へ答礼品ヲ進上ス

コノ日、東京ニテハ去ル十三日、岩倉公ヨリ洋馬具一通、
忠義公着ノ祝儀トシテ賜ヒタル御返礼トシテ、唐縮緬緞
子等ヲ進上セラル、ソノ贈答左ノ如シ、

十月十三日

一洋馬具一通

岩倉大納言様より

一御使者

太田愛之助

右澳大利亞公使より

天献之処、御拝領之由ニテ、此節

御着之御悦として被進候事、

(朱書)
一紅白糖縮緬

五卷

一緞子唐織

二本

一白砂糖

一捲

一御肴

一折

手扣

芝御勇健被成御座、恐悦御儀奉存候、猶又澳大利亞公使より

天献之馬具一揃御拝領之処、着府御欲旁として、先日

御使者を以頂戴被

仰付、忝次第奉存候、右為

御礼目録之通進上被仕候、

十月廿四日

鹿兒島藩知事

使者

時任清左衛門

四六四 太政官ヨリ外国人ニ乱暴狼藉スル者ノ取

締ヲ布告ス

二十六日、太政官ヨリ昨年来各所ニ於テ、外国人ニ対シ、

乱暴狼藉ヲ加へ、卑怯ノ挙動ヲナシ、皇威ヲ汚損セシ者多シ、尔後取締ヲ嚴重ニスベキノ布告アリタリ、其ノ告書左ノ如シ、

一昨辰年以來、兵庫港を初とし、京都井塚・長崎・横濱等にて、外国人江対し乱妨いたし、猶又今般東京ニ於て、熊本藩之者共英国公使江対し拔刀ニ及び候始末、

何れも不容易大事を引出候条、昨春三月以來、屢御布令之趣も有之候ニ付てハ、諸藩を初、夫々其主宰之者より屹と取締方可致之処、右様数度法憲を犯候者有之

ハ、全御政令之不行届ニ相当リ、

皇威ニ関係致候次第ニ付、向後取締筋一層嚴格之御処

置無之候てハ、

叡慮不被為安御儀ニ候、尤外国御交際以來、深く時勢を弁へさる、(より脱カ)只管非常ニ驚愕し、(掃カ)狼ニ掃除之論を唱へ、

徒ニ血氣小勇を恃ミ、眼前御国へ渡來之者を無故乱妨

ニ及び、吾ニ曲之実を為し、彼へ直之名を与へ、加之

其場を逃去候杯卑怯之振舞致し、

君父ニ迷惑を掛ルのミならず、第一

皇威を汚し候次第、実以不屈至極之事ニ候、万一右様之者於有之は、本人は勿論、其主宰之者とも嚴重之

御沙汰ニ可被及候、就ては府藩臬ニ於て、示方之儀嚴密行届、向後右様之儀無之様、厚可相心得事、

但東京諸藩邸詰合之人数并邸外住居之者等、屹と取締相立可申出、向後御糺等有之節、胡乱ケ間敷儀無之様可致候事、

十月〔二十四日〕

太政官

(四五)一号と同文削除
西洋形船舶所有允許ノ件、并ニ当百錢増鑄ノ二件布告アリシ旨ヲ布達セリ、其ノ達書左ノ如シ、

一 今般新銅錢御鑄造ニ相成候得共、差向北海道開拓為融通、在来之当百錢御鑄造増相成候条、為心得相達候事、

十月〔十八日〕

太政官

四六五 永利郷ナガリヲ永利郷ナガトリト改称ス

廿八日、藩庁ニテハ、先月十七日布達シタル永利郷ナガリハ永利郷ナガトリト唱へ相替フベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

永利郷之事、

一 永利郷ナガトリ

右之通唱被相替候旨被 仰達候条、地頭江申渡向

々江可申渡候、

明治二己十月廿八日

知政所

四六六 太政官ヨリ布告ノ二件ヲ藩内ニ布達ス

コノ月藩庁ニテハ、去ル七日、太政官ヨリ布告ノ庶民ノ

四六七 藩庁ニテハ各局ノ日用品ハ宮繕方細工局

ヲ經テ命セラルヘキヲ達ス

又藩庁ニテハ、会計局ヨリ各局ノ日用品ハ、其ノ職人ニ直接ニ命ゼズ、必ズ宮繕方細工局ヲ經テ命ゼラルベシトノ議ニテ、其ノ旨ヲ達セリ、其ノ達書左ノ如シ、

一 乗物師

一 傘張

一 挑灯張

一 仏師

一 竹細工人

一 打物師

一 塗物師

一 錫細工人

一カヲ紙師

一皮靴

一張物師

一綴物師

一鑄物師

一鍋屋

一鎗師

一蒔絵師

一印判師

右は宮繕局細工方支配職人之内にて、細工方江職局被召建置、致日勤御用相勤来候処、此比向々より職人江出来品手当申渡、二重ニ相成候儀、毎々有之、依品々御定置も有之事候処、右等之御取締も届兼候付、以来右職人江相掛候儀は、不依何色宮繕方細工局より申渡、屹度向々より直手当之儀無之候様、被仰渡度事、

明治二巳十月

會計局

右之通可承向々江可申渡候、

十月

知政所

四六八 藩庁兵器方筆者及ヒ同肝煎ヲ廢シ兵器方

吟味役ヲ置ク

又藩庁ニテハ、兵器方筆者及ヒ同肝煎ヲ廢シ、兵器方吟味役ヲ置クベキ旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一兵器方吟味役

但

六等官ニ被召建、兵器奉行

副役次

一兵器方筆者

一兵器方肝煎

右被廢候、

右之通官職廢建被 仰付候旨、被 仰達候条、軍務局總裁江申渡、向々へも可申渡候、

明治二巳十月

知政所

四六九 島津忠義ヨリ勝海舟并望月大象へ、諸生

引立御礼ノ挨拶ヲナス

又東京ニテハ、忠義公ヨリ勝安房并ニ望月大象へ、諸生

引立尽力ノ廉ヲ以テ、御礼ノ御挨拶アリタリ、其ノ控書

左ノ如シ、

四六九ノ一
一琉球嶋織綿 三反

一緞子唐織 一本

一御着代 式千疋

勝 (義邦)
安房

右以前より、肥後七左衛門其他扶持いたし置候訳合も有之、今度

御出府ニ付、右之御挨拶として被遣候事、

御使者

時任清左衛門

外ニ

金五拾両、南部彌八郎出立候節借入置候由ニ付、

内金として被遣候事、

四六九ノ二
一琉球嶋織木綿 二反

一御着代 五百疋

望月大象

右葦山県よりわさく御頼入之上、出府相成、諸生

引立方骨折ニ付、

御出府之廉を以為御挨拶被遣候事、

御使者

有馬藤太

四六九ノ三
一唐紙 一束

一唐墨 二挺

勝 安房へ

右同日十一月五日

天璋院様へ

御見舞序ニ御立寄ニて、被下相成候事、

四六九ノ四

手扣

一金 五拾両

一蠟燭 五拾挺

一葉煙草 壹斤

右は此内より、諸生御教授方別て預御骨折、忝次第存候、右御礼且御路用として以使者被相贈候、

鹿兒島藩知事

使者

十一月十九日 山本十次郎

右望月大象江被下相成候事、

明治2年(1869)

〔稿本表紙〕

明治二年
十一月 忠義公史料 十一

〔稿本にて補正〕

四七〇 鹿兒島藩公用人ヨリ弁官役所へ届書

四日、東京ニテハ、藩公用人ヨリ先月御達ノ外国人へ乱
暴取締之件ハ、早速御趣意貫徹スル様取計ヒタル旨ヲ、
弁官役所ニ届出デタリ、其ノ届書左ノ如シ、

一昨辰年以來於諸所外国人江乱妨之者有之候付、此節御
達之趣承知仕候、早速末々迄も 御趣意奉貫候様急度
申渡、以來之儀も分て嚴重取締向相達置候間、此段御
届申上候、以上、

鹿兒嶋藩

公用人

田中清之進

十一月四日

弁官

御役所

四七一 島津忠義勝海舟ヲ訪問シ天璋院ニ面会ス

五日、東京ニテハ、忠義公紀州侯邸内ナル勝安房ヲ訪問
シ、天璋院殿ニ面会セラル、其ノ概記左ノ如シ、

十一月五日 晴

伊集院直右衛門

種子島中輔

村田 新八

帖佐彦七

貴嶋 平八

一今日子御二度にて紀州様御屋敷内勝安房所江被為入、

夫より同所奥江

御通 天璋院様江 御逢、夕方被遊

御帰殿候事、

四七二 山澤鐵之進等三名ノ改名ヲ許可セラル

十一日、東京ニテハ、藩公用人ヨリ山澤鐵之進ハ静吾ト、
村田平右衛門ハ三助ト、坂元愛之丞ハ鄭介ト、何レモ改
名許可セラレタル旨ヲ藩知政所ニ報ス、其ノ報知書左ノ
如シ、

山澤鐵之進

改名

静 吾

村田平右衛門

同

三 助

坂元愛之丞

同

鄭 介

右之通改名御免被仰付候間、於其許向々江仰渡相成候
儀共、毎々通御取計有御座度、此旨申上越候、以上、

巳十一月十一日

田中清之進

知政所

四七三 各藩ニテ無用ノ銅砲ヲ買上ケ貨幣鑄造ニ

充ツヘキヲ令ス

十二日、各藩ニテ無用ノ銅砲ハ、相当ノ代価ヲ以テ、東
京真崎鑄錢座ニ納レ、貨幣鑄造ノ料ニ充ツベキヲ令セラ
ル、其ノ達書左ノ如シ、

〔第五十一〕十一月十二日(達) (太政官)

〔頭註〕三年第二百八十九ヲ以テ取消
御達書

今般新貨幣御鑄造ニ付、藩々ニ於テ当今無用之銅製大
砲所持致シ候ハ、相当之代価ヲ以テ御買上ケニ相成
候間、東京真崎鑄錢座へ申出、早々廻シ方可取計、尤
便利之為吹崩シ相廻シ候トモ不苦候、猶委細之儀ハ大
藏省へ可承合候事、

四七四 島津忠義賜暇帰藩ヲ願出許可セラル

コノ日、東京ニテハ、忠義公ハ久光公病氣ノ故ヲ以テ、
賜暇帰藩ヲ願出セラレ、十九日ニ至リ許可セラル、其ノ
願書左ノ如シ、

一私儀実父病氣之御届、且藩知事被

仰付候御礼為旁致出府候処、兼て御届申上置候通、病
氣今以全快不仕候付、外御用も不被為在候ハ、追々
御暇被下候様奉願候、宜御執

奏可被下候、以上、

十一月十二日

鹿兒嶋藩知事

弁官

御中

右有馬藤太より官掌へ差出候事、

(朱書)
願之通、

右御呼出之上、上野官掌を以有馬藤太へ御渡相成候事、

已十一月十九日

四七五 英医ウイルス島津忠義ニ面謁ス

コノ日、又東京ニテハ、英医ウキリース午後一時頃参邸、
忠義公ニ面謁ス、其ノ概記左ノ如シ、

十一月十二日 雨

伊集院直右衛門

種子嶋中輔

村田新八

帖佐彦七

貴嶋平八

一

英医

ウキリース

右一字比より参上

拝謁被仰付、御料理被下候事、

四七六 藩庁新發明品ハ願出ニヨリ販売ヲ許可シ

公益アルモノハ賞賜アルヘキヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、新發明品ハ願出ニヨリ、一手販売
ヲ許シ、且公益アルモノニハ賞賜アルベキヲ達ス、其ノ
達書左ノ如シ、

一世人一同のため便利之器械新發明之者は、生産方江相
付願出候ハ、御吟味之上、年限以御見合一手売御免
可被仰付候、尤官府之御為筋相成候儀は、屹と御賞賜
可有之候間、生産奉行江申渡、向々江も不洩様可申渡
候、

但士分以上之儀も、同様致發明候者は、依品柄御吟
味之訳可有之候、

明治二己十一月十二日

知政所

四七七 島津久光藩内ノ風習乱雜ニ流レタリトテ
内務局ヲ戒メ其ノ心得方ヲ達ス

明治二己十一月十二日 御名
右之通為被仰渡由候事、

コノ日、久光公ハ、近來藩内ノ風習乱雜ニ流レタリトテ、
御住邸内ナル内務局ヲ戒メテ、其ノ心得方ヲ達セラル、
其ノ達書左ノ如シ、

中将様より二丸御曲輪江

御達之覚

一家令已下内務局、絶て休日不相成候、

一侍直長・侍直・泊番以前之通、

一家令・侍直長・侍直・道具方病氣故障ニて暇之節は、

届可申出、

一酒宴遊興歌謡ひ候儀不相成、

一平常戎服不相成、乱髪勿論之事、

一座中椅子無用之事、

一学問は実行を相嗜、高上之議論停止之事、

右は当時自尽之風習被行、以之外ニ候、殊ニ内務局は

目前之事候付、不得止事、

右条々相達候条、不心得之者は職務免許可申出候、尤

知藩事方江は引合ニ不及候事、

四七八 島津忠義召ニヨリ参内ス

十五日、東京ニテハ、忠義公御召ニヨリ参内セラレ、御
前ニテ御馬拜見ノ上酒肴ヲ賜ヒ、帰邸セララル、其ノ概況
左ノ如シ、

一己十一月十五日二字御用召ニ付、

御直垂被為召

御参 内之処、

御前ニおゐて御馬御拜見、御手自

御酌ニて御酒肴 御頂戴、六字前被遊

御帰邸候事、

十一月十五日 晴

伊集院直右衛門外四人
略ス

一今日御用召付、二字

御直垂ニテ

御参

内、御馬

御拜見被為濟、

御座之間江御緩々被為 召、御手自

御酌ニテ御手肴

御頂戴、五字過被遊

御帰殿候事、

四七九 諸藩ノ選抜兵ヲ東京府ノ警備ニ充ツ

コノ日、兵部省ハ東京府ヲシテ、諸藩兵士中ヨリノ選抜兵ヲ府内ニ駐メテ、府ノ警備ニ充テシム、ソノ達書左ノ

如シ、

四七九ノ一

十一月十五日

御沙汰書

東京府

其府取締筋ニ付、兵備無之テハ不相濟儀候得共、府兵取立不容易儀ニ付、当分之処兵部省ヨリ差送り相成候諸藩兵士ヲ以、府兵之姿ニ組立、約束号令賞罰黜陟ニ至ル迄、都テ其府へ御委任被 仰付候事、

但重大之事件ハ可相伺、且兵部省へモ可申達事、

四七九ノ一
第一千五百六 十一月十五日

御沙汰書

兵部省

東京府下取締筋ニ付、兵備無之テハ不相濟儀候得共、府兵取立不容易儀ニ付、当分之処東京府ヨリ兵士入用之見込、其省へ申達次第、諸藩兵士人撰致シ同府へ可差送、其上ニテハ約束号令賞罰黜陟ニ至ル迄、都テ同府へ御委任被 仰付候得共、兼テ其省ニ於テモ可相心得置候事、

但重大之儀処置致シ候節ハ、東京府ヨリモ其省へ可申達候事、

四八〇 検事二名箱館降人ノ監督トシテ下藩サス

十七日、東京ニテハ、曩時検事四名ヲ減シテ式名トシ、当分深川邸ニ留置セル箱館降人ノ取締ニ任セシメシモ、他ニ所用ナキニヨリ、右監督方トシテ下藩セシムル旨ヲ報ス、其ノ書左ノ如シ、

一御書付三通

函館降伏人御預等被仰付候儀

宛所同断知政所

右は去ル十四日兵部省より御呼出ニ付、山本十次郎罷出候処、少録井後最中を以御渡相成候付、同十六日増上寺ニおゐて一之宮藩より相受取、中途駕籠乗セ付ニテ、足輕相付、十次郎差引いたし御邸内へ召入置、随分叮嚀ニいたし置申候、就ては追て舟便より差下候様可仕候間、早速より下置候場所御手当有御座度奉存候、此段申上越候、以上、

宛所同断知政所

巳十月十一日、檢事川北新九郎・大野新八郎〔重九〕急使

檢事

川北新九郎

大野新八郎

右は檢事之儀四人相詰居候処、騎兵所之儀も外方之者へ受負被仰付、御蔵へハ出納奉行相詰居、差掛御用も無之候付、詰被相減、今日御着之御左右旁として、急ニテ被差立候、左候て先便申上候通、流賊之内御預被仰付、深川御邸へ被召置候付、土橋休之進・谷元作之助儀、見締として滞在被仰付候、此段申上越候、以上、

巳十一月十七日土橋休之進・谷元作之助便

一櫻井莊三郎

澁谷太左衛門

千代塚鞆負

鈴木金次郎

大瀧重次郎

池田 傳

為貝金八郎

内田萬次郎

横田新吉

伊那誠一郎

渡邊昇太郎

上原仙之助

長尾宰一郎

堀口惣平

井川武二

右は此内御届申上置候通、先達て御預被仰付置候付、檢事土橋休之進・谷元作之助へ才領被仰付、長崎迄差遣、夫ヨリ海陸之間都合次第差越候様、同所詰會計奉行江問合申遣置候間、別紙生国覚相添、此段御届申上越候、以上、

田中清之進

知政所

追て檢事之儀は、此程爰元詰被仰付候様申上越趣有之、是迄相詰居候得共、御国元之儀御改革後、御蔵

出入之儀は、何れも出納奉行迄ニテ相済候由ニ付、同様取計之処、差当検事不相詰候て不相済程之事も無之候付、形行申出、先達て検事兩人差立置、此節都て詰引取候儀ニ御座候、此段も申上越候、以上、一右付、長崎會計奉行へ之問合略ス、

四八一 藩庁歴代ノ遷魂祭ヲ執行スルコトヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、来ル二十五日忠濟公真之助祭主ト為リ、歴代ノ遷魂祭ヲ執行セラルベキ旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一来ル廿五日

御代々様遷魂祭付、真之助様祭主被、成御勤咎候条、神社奉行へ申渡、可承向へも可申渡候、

明治二己十一月十七日 知政所

四八二 藩庁士族ニシテ卑賤ノ職業ヲ以テ渡世ス

ル者ハ士族ノ籍ヲ返上セシム

二十日、藩庁ニテハ、士族ニシテ公然商売或ハ日雇等卑

賤ノ職業ヲ以テ渡世スル者ハ、士族ノ籍ヲ返上セシメ、再ヒ軍役ヲ勤ムル時ハ、之ヲ復セシムルコトヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一御城下・諸郷・私領一同士族被仰付候付ては、士氣憤發一涯廉恥可相守之処、御城下并諸郷之内、公然商売或日雇等卑賤之職業を以、致渡世候向も有之、畢竟困窮ニ迫り、不得止処より右等之輩も可有之候得共、士分之名義不相当に付、屹と不相成候間、右職業之者は其職業中士族差上候様被仰付候、尤乱髮惣髮戎服被差留候間、右職業ニテ渡世不致候て不相叶面々は、伝事并地頭江相付可申出候、差候て尔後士分相当之御軍役相勤候節は、本復可被仰付候、家督之者士族差上候ハ、家内迄も同様被仰付候条、伝事并地頭へ申渡、可承向江も不洩様可申渡候、

明治二己十一月廿日 知政所

四八三 島津忠義帰藩ノ際外国船雇入ヲ願出ルモ

許可ナク、外人雇入ノ許可ハ得ラル

二十一日、東京ニテハ、忠義公昨日公用人ヲシテ、帰藩

ノ際鹿兒島迄、外国船雇入ノ事ヲ弁官役所并ニ外務省ニ願出セシメラレタレドモ、開港場外へハ外国船ノ運輸禁止ニ付許可ナク、更ニ外人雇入レヲ願出シテ、許可ヲ得ラレタリ、其ノ書類左ノ如シ、

四八三ノ一

一今般藩知事御暇被下候付、近々御当府出足之筈御座候、

然処依時宜大坂・兵庫之間ニおゐて、外国船雇入、鹿兒嶋表迄罷下度御座候間、御免被 仰付下度、此段奉願候、以上、

十一月十九日

鹿兒島藩公用人

田中清之進

外務省

御役所

右山本十次郎より寺嶋外務大輔へ差出候処、開港場外江外国船運輸之儀は不相成旨、御達相成居候付、受取難相成段申聞候事、

四八三ノ二
一今般藩知事御暇被下候付、近々御当府出足之筈御座候、

然処依時宜大坂・兵庫之間ニ於て外国船雇入、鹿兒嶋表迄罷下度、就ては開港場外江運輸之儀は、兼て御布令之通、御禁止之事ニ付、長崎迄奉願候儀、当然之事候得共、同所より陸路罷越候ては、無用之雜費莫大相

掛り、殊ニ時節柄纜之海路ニは候得共、倭船ニては風波之懸念も不少候付、旁別段之御評議を以、速ニ御免被仰付被下度、此段奉願候、以上、

同鹿兒島藩
公用人

十一月廿日

田中清之進

弁官

御役所

右田中清之進より差出置候処、即日御呼出之上官掌横川虎藏を以、左之通御張紙ニて被相渡候事、

願之趣無余儀候得共、御規則も有之候付、不被及御沙汰候事、

四八三ノ三

一藩知事此度御暇被下候付、近日御当府発足仕筈御座候処、自然大坂・兵庫之間江手船致廻船居候ハ、依時宜航海為習、同所より鹿兒島表迄異人相雇儀も可有御座候間、兼て御免被仰付置被下度、此段奉願候、以上、

鹿兒島藩
公用人

十一月廿一日

田中清之進

外務省

明治2年(1869)

御役所

右寺島大輔へ頼遣候処、御張紙を以当日被相下、大坂府へも御達封被相渡候付、貴嶋平八へ引渡置候事、
(朱書)書面之趣承届候間、弥外國人雇入候儀ニ候ハ、大坂府江可申立候、尤其段同所へ申達候事、

四八四 島津齊彬ニ從一位追贈ノ勅書ヲ受ク

二十二日、東京ニテハ、忠義公帰藩御請暇ノ為メ参内セラレタルニ、齊彬公ニ從一位御追贈ノ勅書ヲ拝受セラ
四八四ノ一ル、其ノ勅書、其ノ他ノ書類左ノ如シ、
四八四ノ二一同月廿二日、御直垂被為召御暇御参

内、大広間ニおゐて三條右大臣様へ御謁済、
暫時御扣被遊候処、

坊城大弁様より

齊彬公從一位御追贈之御書付御渡相成候段は、御賞
典一卷帳ニ有之候事、

四八四ノ二

廿二日己

御沙汰書写

從三位源朝臣忠義

贈權中納言從三位源齊彬朝臣、先朝多事ノ際ニ方リ、
身外任ニ在ト雖トモ、心乃チ

王室ニ存シ、子弟ヲ督励シ、鬪藩ヲ鼓舞シ、上書献策
忠ヲ尽シ義ヲ表ス、終ニ厥謀ヲ貽シテ後裔ニ垂レ、以
テ今日盛業ノ基ヲ開キ候段、深 御追感被為遊候、依
之贈位宣下候旨被

仰出候事、

十一月

大政官

天皇
御璽

贈權中納言從三位源朝臣齊彬

贈從一位

右大臣從一位藤原朝臣實美 宣

大弁從三位藤原朝臣俊政 奉行

天皇御璽
明治二年己巳十一月廿二日

四八四ノ三

十一月廿二日 晴

(前略)

一明後廿四日

御下国御発駕為御届、十二字比

御参

内之処、

齊彬公 御贈官

御賞典被為蒙

宣下、被遊

御退

朝候事(下略)

四八五 藩庁各郷ヨリ一人宛選出シ軍務局学問所

及学寮等ニ出府セシム

コノ日、藩庁ニテハ、外城士ニ見聞修業ノ為メ、軍役高二十五石以上ハ自費ニテ、以下ハ一日白米六合ヲ与へ、半年交代ヲ以テ各郷一人宛ヲ選出シ、軍務局学問所及ヒ学寮等ニ、出府セシメラレタキ軍務局ヨリノ議ヲ贊シ、之ヲ布達セリ、其ノ達書左ノ如シ、
一外城之儀、常備隊被召建、追々士氣も可致振起候得共、

何分辺土ニテ聞見狭く、時勢ニ通し兼、動すれハ頑陋ニ陥り、歎ケ敷儀ニ御座候間、此節軍務局学問所江師員寮被召建候付、一外城より老人宛、地頭副役人撰を以為致出府、漢学方学寮へも配り入れ、専ら武文致修行、四ツ・八ツ時之間は軍務局江出席、局中之吟味は勿論、世上之事情等致探索、時々自分郷々江通達し、且又追々常備隊兵士共も学寮江出府ニ付ては、右人撰之者より取締向も致関係候様、地頭副役江被仰渡度、左候て自然と文明開化、士氣振興之基本可相立哉と吟味仕、此段申出候、以上、

但人撰にて入寮之者、軍役高貳拾五石以上之者は、自分失脚にて罷出、右以下は老日ニ白米六合宛之割を以、内三合は糧餉方より通帳を以被相渡、残り三合は其郷人民之出費ニ不及、別段地頭計を以差統相成候様、左候て半年交代被仰渡度御座候、

十一月

軍務局

右之通被仰付候条、会計局總裁・軍務局總裁・地頭へ申渡、可承向へも可申渡候、

明治二己十一月廿二日

知政所

四八六 島津久光・忠義等ノ賞典返献ヲ許サス

二十三日、久光公・忠義公及ヒ西郷其ノ他ノ賞典返献ノ儀ハ、深ク叡感アラセラレタレドモ、功勞ニ酬イサセラル、厚キ思食ヨリ下賜アリシモノナレバ、固辞スベカラザル旨ヲ令セラレテ、聴許ナシ、其ノ書左ノ如シ、

御沙汰書

從二位源朝臣久光

從三位源朝臣忠義

賞秩返献之儀、先頃以來再三及建言候ニ付、当年限半高上納被

仰付、救荒ニ被為備候処、猶又今般自分并ニ西郷以下、賞秩一同返献及懇願候儀、全以至誠精忠憂國之衷情ヨリ申出候段、深ク

叡感被為在候得共、元ヨリ其功勞ニ被為酬候厚キ思食ヲ以テ下賜候儀、決テ不可固辞旨、更ニ御沙汰候事、

十一月

太政官

四八七 島津忠義九段坂招魂社ニ參詣ス

コノ日、東京ニテハ、忠義公九段坂招魂社ニ參詣セラル、ソノ概況左ノ如シ、

十一月廿三日 晴

伊集院直右衛門外四人略ス

一今日御二度後

御馬ニテ

御出、九段坂招魂社江

御直詣被遊候事、

但二大隊御供被召列、祝砲打方有之候事、

四八八 川村純義・黒田清隆兵部大丞ニ任セラル

コノ日、川村純義・黒田清隆兵部大丞ニ任セラル、
四八八ノ一

正三位勲一等伯爵川村純義

履歴

天保七年十一月十一日生、○明治二年十一月廿三日

任兵部大丞略下

四八八ノ二

從二位勲一等伯爵黒田清隆

履歴

前同明治二年十一月廿三日 任兵部大丞下略

十一月廿七日 晴

貴嶋平八 種子嶋中輔 帖佐彦七

四八九 島津忠義帰藩ノ途中鎌倉・伊勢・京都ニ立

寄ル

一今朝七字金澤

御立、朝日奈切通

御野立、夫より

鎌倉宮

頼朝公

忠久公御廟所、鶴岡八幡宮江

御参詣、夫より雪之下

御休、稲村ヶ崎

御立場、片瀬村

御野立にて、三字比藤澤駅江

ノ途中ノ重ナル日程左ノ如シ、

十一月廿四日 晴

村田新八 種子嶋中輔

貴嶋平八 帖佐彦七

一今朝九字四十分、神田橋内 御屋敷 御立、御門前よ

り馬車江被為 召、数寄屋橋目付通町 御通行、川崎

御小休にて、一字横濱鈴木屋江

御光着、御機嫌能被遊

御止宿候事、

但御二度後より、異人商社并陳屋等被遊御見物候事、

一今朝七字二見村

御立、二見浦

御見物、楠部村

御野立にて、

内宮江

御参詣、夫より中地藏江

御休ニテ、

外宮江

御参詣、三字過山田江被遊

御着候事、

但外宮之儀は、去廿九日末社出火有之、三拾日之触

穢ニ付、一之鳥居外ニテ

御拜、御内分ニテ脇屋より

御宮廻 御覧有之候事、

十二月十五日 晴

貴島平八 帖佐彦七

一 今朝六字大津駅

御立、追分瀧上

御小休ニテ、相國寺内林光院戦死人数墓江御直詣、夫

より近衛家江被為

入、十一字過

御立、大佛前

御立場ニテ、東福寺内即宗院江被為

入、招魂場江

御直詣、夫より伏見街道

御通行、三字伏見江被遊

御光着候事、

十二月十六日 晴

村田新八 帖佐彦七 貴嶋平八

一 今朝六字伏見

御立、京橋通今留橋下より

御乗船、四字

御着坂、御機嫌能被遊

御止宿候事、

但御本亭近江屋権兵衛所御借入相成居候得共、三橋

樓江

御借替相成被遊

御止宿候事、

一

有川十右衛門

矢野喜蘇次

其外詰 役々

右 御着之御祝儀申上候、
十二月十七日 晴

村田新八 種子嶋中輔 貴嶋平八

帖佐彦七

一 当所江中三日

御逗留、来ル廿日五字

御立、三邦丸江

御乗船可被遊

御下向候旨、被

仰出候付、御供中江申渡、詰會計奉行其外江申渡、三

邦丸船將江申渡候事、

村田新八

一 今日御二度後より、異館 御見物として

御出、七ツ半過被遊

御帰亭候事、

但シヤンハン酒進上ニ付、御返之儀は會計方計、

十二月十八日 晴

村田新八 種子嶋中輔

貴嶋平八 帖佐彦七

一 今日も御機嫌能被遊

御逗留候事、

内務局仕番

足輕

一 大山万左衛門

右病氣有之、御供被成御免、病院江被召入御賄料等如
例可被申渡旨、詰會計奉行江申渡候事、

貴嶋平八

十二月十九日 晴

村田新八 種子嶋中輔

貴嶋平八 帖佐彦七

一 住吉

有川十右衛門

右

御代参被仰付候事、

村田新八

十二月廿日 晴

一 今晝五字

御立、三橋樓下渡戸より川御船江被為

召、七字二拾分三邦丸江

御乗船、十一字十分大坂川口

御出艦、淡路嶋中比にて夜入ル、藝州御手洗三里位通

過夜明ル、

十二月廿一日 雪天

村田新八 種子嶋中輔

貴嶋平八 帖佐彦七

一 藝州御手洗三里位過て夜明ル、夜入り八字三十分、坊(廻)

州三田尻港江

御着艦御碇泊之事、

十二月廿二日 雪天

村田新八 種子嶋中輔

貴嶋平八 帖佐彦七

一 今日三田尻港江

御滞船、十二字通船江

御乗付ニテ

御上陸、小堀客館江被為

入候処、無程

從三位様被為(毛利元徳)

入、緩々

御対顔被為

在、夜十二字客館

御立、一字三拾分三邦丸江

御帰船、二字三田尻港

御出艦、伊豫大鼻崎志里計手前ニテ夜明ル、

但從三位様御儀は、御旅館江前以

御引取相成候事、

十二月廿三日 曇

村田新八 種子嶋中輔

貴嶋平八 帖佐彦七

一 伊豫大鼻崎手前ニテ夜明、無滯

御通船、佐土原沖ニテ夜入、佐多御崎四五里手前ニテ

夜明ル、

十二月廿四日 小雨

村田新八 種子嶋中輔

貴嶋平八 帖佐彦七

一 佐多御崎四五里手前ニテ夜明ル、八時過前之濱江

御着船、石燈爐御渡戸脇番所江暫時

御上陸、夫より石燈爐通本明時館前枿形

御通行、二丸江被為

入、七ツ半過被遊

御着城候事、

但

二丸御本門より被為

入、同所

御立御庭内より
御着之事、

十一月廿四日 忠義公東京神田橋邸ヲ発シ、御帰国ノ途ニ就カレタリ、兵隊歩兵二大隊・砲兵一大隊ハ禁闕守衛ノ為残シ置レタリ、公ハ神田邸ヨリ馬車ニ召サレ、東海道ニ向テ発セラレタリ、扈從士分三十人、上下五十人余、本日ハ横濱ニ一泊、次日御滞留、同所夷館巡覽セラレ、次日金澤、鎌倉ニ御通り、忠久公御墓參、畢テ諸所御巡覽、藤澤御泊、夫ヨリ東海道順次御通行伊勢御社參等ナリ、

四九〇 外務大輔寺島宗則ニ太刀料金三百兩ヲ下

賜セラル

二十八日、外務大輔寺島宗則ニ、昨年来勉勵尽力ノ賞トシテ、太刀料金三百兩ヲ下賜セラル、其ノ御沙汰書左ノ如シ、

正三位勲一等伯爵寺嶋宗則

履歴

略前〇同年明治二年十一月十八日 昨年来奉職執掌勉勵尽力候段、御満足被思召候、依之為御太刀料金三百兩下賜略下、

四九一 藩庁島津家歴代総社ヲ鶴嶺神社ト称ス

二十九日、藩庁ニテハ、島津家歴代ノ総社ヲ旧南泉院跡ニ創建シテ、鶴嶺ノ神社ト称シ、又同時ニ伊作家・相州家ノ総社ヲモ日新寺境内ニ建設スベク、且ツ各所ノ寺院ニ安置セラレタル先代ノ肖像位牌等ハ、合祀從祀又ハ一社建立ノ事ニ執行スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、
一鶴嶺神社

右旧南泉院跡江此節

御家御代々之

御惣社御創建、社号右之通可相称旨被

仰達候条、神社奉行へ申渡、可承向江可申渡候、

明治二己十一月廿九日

知政所

一伊作・相州御両家之儀、

〔島津貴久〕
大中公御正統御相統之折、御兼帯以来

御代々様厚く御祭祀被成来候付、今般日新寺境内 梅
〔島津忠良〕
岳公御神社之傍江右 御両家之御惣社被召建、御当地

御惣社之御振合通、御両家御代々之御靈様都て御遷魂之上、御改祭相成、以来春冬之御神祭被為在候旨、被仰達候条、神社奉行へ申渡、向々へも可申渡候、

明治二己十一月廿九日

知政所

市来龍雲寺

(島津立込)

一節山公御画像

山田陽春院

(同忠信)

一圓室公御画像

隆盛院

(同忠隆)

一興岳公御画像

大乘院

(同義弘)

一松齡公御肖像

右浄光明寺内

(同忠入)

得佛公御社内ニ御合祀、

御画像は箱入付之俣社内江御格護、御祭日迄奉懸候

様被定置候、

但以下御画像之儀は同様被定置候、

伊作海蔵院

一梅岳公御幼年之御画像

但当分鹿籠江転院被仰付置候、

右日新寺内

御同公御社内江御合祀、

阿多上宮寺

一運久君井

梅岳公御画像

高山日新院

一梅岳公御肖像

川辺玉泉寺

一右御同公御画像

右三ヶ所之儀は、当分之寺地御由緒之訳も候間、所

中計を以小社建立、

御軍神ニ奉崇、是迄之通敬仰仕候様被仰付、御誕日

を以神祭是亦所計被仰付置候、尤銘々所土族江社守

被仰付、寺地之儀は其者江支配被仰付置候、

但神社奉行より社守致吟味可申出候、

伊集院芳真軒

一松齡公御肖像

右同寺

一 右御同公御夫人 宰相君御影像

右妙圓寺内

松齡公御社内江御合祀、

福昌寺

一 恕翁公御肖像

興国寺

一 圓室公御画像

月香院

一 大中公御画像

興国寺

一 持明君御画像

寿国寺

一 大信公御木像

右福昌寺内

英猷殿御社内江御合祀、

伊集院梅岳寺

一 梅岳公御肖像

寿国寺

一 大信公御画像

大乘院内鎮国殿

〔島津系奥〕
一 金剛定公御肖像

右妙谷寺内

〔島津系久〕
貫明公御社内江御合祀、

寿国寺

一 信證君御遺像

右同

一 信解君御木像

良英寺

一 妙心君御肖像

右諏訪社宗源殿江御合祀、

右は 御先代様御肖像等諸所江御安置被遊置候処、此

節寺院被廢候付、前件之通御合祀又は一社建立被仰付、

御合祀之

御靈々様は、 御本社御同日ニ御祭祀被為行候旨被

仰達候条、神社奉行其外向々江申渡、諸郷江も不洩様

可申渡候、

明治二己十一月

知政所

四九二 藩庁殉難者・戦死・病歿者ノ遺族及ヒ重傷

者ニ撫恤ヲ行フ

コノ月、藩庁ニテハ、一昨年江戸変動殉難者ノ遺族并ニ

一金五拾両

右同人妻

戊辰戦役戦死又ハ病歿者ノ遺族、及ヒ重傷者ニ撫恤ノ為

一御扶持米貳拾俵宛

メ、扶助米或ハ金員ヲ給与スベキヲ達ス、其ノ達書并ニ

但三拾ヶ年限

附士山下惣右衛門

人名等左ノ如シ、

一御扶持米七拾五俵

篠崎彦十郎

大崎庄八

但三拾ヶ年限

一右同 五拾俵

竹内雅春

但書同断

足輕大崎猪之助

但書同断

一右同 四拾八俵

立花直記

手塚庄之進

但書同断

一右同 四拾俵宛

關 太郎

中村覺左衛門

但書同断

柴山良助

野元與太郎

一右同拾八俵宛

白石彌左衛門

但五ヶ年限

從卒龍太郎

兒玉雄一郎

次郎八

天辰勇右衛門

鹿次郎

黒田松榮

次郎右衛門

花崎錦蔵

勇七

落合孫右衛門

甚八

安右衛門

人足市郎兵衛

利右衛門

助次郎

助六

喜太郎

源次郎

右ハ東京變動之砌、為国事及死亡、御感之至候、就

テ親子兄弟之情不愍ニ 思召候付、等級ニ応シ本行之

通被下置候条、家名相統之者ハ勿論、親族共

御趣意之程厚可奉承知候、

右可申渡旨、軍務局總裁へ申渡、可承向へモ可申渡

候、

十一月

知政所

一金五拾兩宛

右同 石神彦七

戦兵 林太郎兵衛

精松善次

東郷四郎左衛門

樺山伊十郎

東熊助

野添左衛門

野元直助

佐野藤助

椎原助二

吉井彦左衛門

江嶋喜左衛門

山口利兵衛

岸良矢右衛門

執印傳左衛門

肥後幸藏

奈良原矢八

有馬孫兵衛

佐田休之進

四九二ノ一
一金七拾兩

小隊長鈴木武五郎

一金五拾兩宛

監軍 林正之進

大崎

横川

伊集院

知寛

都之城

右同

武田源左衛門

富松善十郎

飯田源之丞

本村仲太郎

大山助次郎

永井佐四郎

一右五拾俵宛
〔頭註〕「歿死者八十七ヶ年トキク」
但書同断

春日繁葉付
二等士官

村田長左衛門
牧野正之進
西郷吉次郎
和田彦兵衛

分隊長

中島彌次郎

有川藤七郎

宮内藤左衛門

伊集院八郎右衛門

伊作 松崎麟平

附士 伊地知愛四郎

右ハ、昨春以來鳥羽・伏見、又ハ奥羽・北越諸所へ致
出兵、為王事及奮戰、賊巢ヲ屠、速ニ奏功、随テ御藩
威モ相立候処、終ニ於陣中致病死、実ニ父母子弟之情
不愍ニ被 思召候、依之等級ニ応シ、本行之通親族之
者へ被成下候、
右可申渡旨、軍務局總裁へ申渡、可承向へモ可申渡候、
十一月 知政所

十一月

知政所

一右同四拾俵

但書同断

四九二ノ三

監軍

椎原小彌太

毛利強兵衛

松田健四郎

川上八郎左衛門

西郷宗次郎

湯地休右衛門

小頭 西 藤次郎

平川助左衛門

肝付十郎

伊地知惣吉

河野彦助

中村休左衛門
 榊山清五郎
 竹内伊左衛門
 宮原清吾
 奥山佐八郎
 川上休右衛門
 別府五左衛門
 隈元太一左衛門
 奈良原彌六左衛門
 江田喜平次
 岩切彦次郎
 加世田西剛右衛門
 同 絞島武兵衛
 伊集院松崎勘助
 同 本田太郎作
 同 阿多新吾
 伊作 篠原彦次郎
 串木野長静吾
 谷山 平山直左衛門
 都之城 肥田雄太郎

附士 原田長藏
 同 向田彦左衛門
 同旗長 絞島金兵衛
 小頭見習 伊集院金次郎
 川崎休右衛門
 山田孫一郎
 八田幸輔
 門松喜藏
 田中藤五郎
 二階堂右八郎
 左近允彌兵衛
 長束一郎
 久保源藤
 村橋宗之丞
 愛甲嘉右衛門
 藤崎勇藏
 久保甚兵衛
 斥候役
 黒田平左衛門
 川崎清左衛門

明治2年(1869)

戰兵
附士
出水

日高郷左衛門
益満休之助
榎元新十郎
高柳幸左衛門
田畑平九郎
坂元仲蔵
麥生田有誠
金里矢兵衛
大山源右衛門
川西與十左衛門
四本佐平次
大場軍輔
染川彦兵衛
塩田雄蔵
平岡彦九郎
宅間惣左衛門
白尾孫兵衛
入佐助八
福田喜左衛門

宅間榮之丞
平川丈助
山田雄助
柳田藤左衛門
谷山佐平太
肥後嘉二
野村清兵衛
前谷宗智
平田喜右衛門
鎌田尚圓
阿田孫二郎
赤井清心
溝口雄四郎
關十郎左衛門
堀添清左衛門
田中直次郎
橋口彦四郎
大河平壯之助
豎山卯一郎
竹内正介

西田 藤助
山口 彦八
諏訪次郎右衛門
河野 宗八
丸田喜右衛門
岩下 半助
貴島勇右衛門
海江田諸右衛門
萩原強之丞
松崎 壯八
古後七之丞
東郷助之丞
尾上為八郎
加藤郷兵衛
山田 十郎
原田 敬助
藤野 休八
有馬早八郎
湯地次右衛門
有吉庄之丞

川北五郎左衛門
濱川彦兵衛
山本 仲助
橋口 與助
坂元亮之助
赤塚源之進
池之上新八
上田 友輔
伊地知清八
河野助五郎
有川彦右衛門
有馬十郎次
大迫市郎左衛門
伊勢左七郎
山之内次郎
加納次右衛門
築地宗次郎
伊地知助五郎
草野直太郎
岩城平右衛門

明治 2 年(1869)

西田 要之進
松井 十郎兵衛
佐藤 彦五郎
永山 覺太郎
川北 六左衛門
鷓木 吉次郎
税所 龍右衛門
長野 仲之進
上原 正八郎
藤井 才之助
川上 彦八郎
園田 勇吉
中島 岩次郎
伊地 知金之進
床次 勇四郎
田村 小太郎
吉井 甚之助
田中 源藏
井上 吉左衛門
川上 助十郎

野村 正八
三原 周助
池田 次郎左衛門
佐土 原新助
米良 伸之丞
猪俣 壮七郎
牧野 吉之進
相良 正右衛門
阿田 六郎兵衛
酒匂 孫一郎
税所 正吉
堀之 内平八
久保 田清次郎
隈元 八次郎
白石 吉左衛門
池田 猪之助
二宮 藤次郎
千田 壮八郎
伊勢 彌一郎
丸田 彌七左衛門

甲斐利兵衛
宮下市助
畠山孫四郎
久米田雄右衛門
田原與一郎
能勢源左衛門
林 歳之丞
甲斐彦左衛門
兒玉彦四郎
有馬良次郎
辻 盛之助
塩田分左衛門
鮫島源助
川村宗之丞
伊地知市左衛門
松元新左衛門
丸田助四郎
山下彌四郎
矢田休之丞
伊藤彦兵衛

山田助左衛門
吉田二次郎
兒玉休五郎
精松喜平次
龜澤宗八郎
石原金次郎
神戸休兵衛
平瀬友次郎
隈崎宗之丞
有川彦兵衛
伊地知休左衛門
川村榮之助
尾上為之丞
德田助左衛門
町田清次郎
山田勇助
新納彌五右衛門
上野嘉次郎
蒲地嘉次郎
北濱喜八

明治2年(1869)

川俣平左衛門
 三嶋彌太郎
 中村吉太郎
 永田吉之助
 平田助八
 川原仲兵衛
 松元甚七
 本田郷右衛門
 嶋山彌八郎
 堤彦太郎
 伊藤敬助
 北郷由之進
 大山宗之助
 日置半之進
 本田市太郎
 本城牛之助
 川村市十郎
 吉田喜右衛門
 木村韜二郎
 堀添平左衛門

榑 吉之助
 田中榮右衛門
 國生六郎
 有川彦太郎
 久保武七
 和田乘左衛門
 本村彦二
 田中道賢
 武元昌蔵
 長野仲之助
 中原八郎
 入田新左衛門
 日高源左衛門
 海老原直一
 長友次郎左衛門
 鮫島十郎兵衛
 川越邑二
 吉田與藤次
 宮内喜蔵
 松元彦右衛門
 同
 伊作
 同
 同
 加世田
 同
 同
 同
 同
 同
 高岡
 同

同

坂元仲左衛門

山之内半蔵

田尻伊兵衛

川越正左衛門

黒川戸右衛門

上原周左衛門

川村源七

日渡十次郎

木場良右衛門

山元城之助

重信良右衛門

上原直助

川崎次郎太

佐々木助右衛門

田中惣右衛門

平原平八郎

松木嘉右衛門

税所孫太郎

酒匂雄七

川俣徳太郎

市来

亀川覺兵衛

關屋八太郎

兒玉清兵衛

野崎半左衛門

上野珍樹

永井宗太郎

岩重佐兵衛

佐藤休蔵

有馬嘉兵衛

石神為兵衛

中村源右衛門

有馬十九郎

大内田玄中

本田吉左衛門

兒玉源兵衛

臼井道載

池田半之助

宮之原彌兵衛

川添庄太郎

兒玉次郎兵衛

伊集院

串木野

出水

岩川 田中覺四郎
附士 野添助四郎

長瀬熊太郎

安楽金太郎

河野浄介

弓削休右衛門

坂口軍次

池上平太

横内次郎助

弓削直八

兵具隊

篠崎勘七

同 藤崎勘四郎

竹下平左衛門

上村戸右衛門

内藤金治

唐鎌勘助

奥新五左衛門

黒田運次

藤崎吉次郎

満喜祐次郎

藤崎壯八郎

谷崎喜右衛門

鬼丸甚左衛門

本吉庄八郎

鳴田市次郎

田中泰蔵

隈元僊太郎

上村直之進

竹下猪之丞

本宮筆者

家村彦五郎

同 四役場 加治木清之丞

堀彌之助

同 廣瀬喜兵衛

同 床次吉之助

同 竹内直太郎

同 肱岡藤八

同 末田諸右衛門

同 出水 華北宗右衛門

同 高山 日高曾兵衛

同 旗隊 吉利正兵衛

喇叭役 桂 彌八郎

太鼓役 竹原 佐一郎

鹿兒島郡吉田 脇田 仙之丞

兵具隊喇叭役 田尻 平太郎

醫師 重 信 友 輔

醫師 新 村 鎌 益

一右同拾八俵

但書同断

諸從兵

木原 藤一郎

加藤次右衛門

西田 十太郎

西田 新 蔵

永井 佐太郎

田中 太郎 太

ノ四百式拾式人

右ハ昨春以来、鳥羽・伏見・奥羽・北越其他諸道へ致
出兵、為王事抽忠節及奮戰、賊巢ヲ屠、速ニ奏功、隨

テ

御藩威モ相立、夷ニ定難之功不少候処、終ニ遂戦死、

千歳武夫龜鑑卜可相成、別テ

御感之至候、就テ親子兄弟之情不慙ニ被

思召候付、等級ニ応シ本行之通被下置候、

一右同四拾俵宛

但一世

監軍 田代五郎左衛門

小頭 税所靖之助

村山源左衛門

土師 孫 一

小頭 鮫島雄四郎

同 河野十左衛門

同 伊集院小藤次

小頭見習 井上清左衛門

戰兵 押川喜右衛門

永 吉 德 次

中村新五左衛門

松元清右衛門

友 野 清 六

東 郷 吉 之 進

町田 矢 八 郎

奥 良之丞
 前田正之進
 伊藤權兵衛
 益山次右衛門
 相良壯五郎
 北郷萬兵衛
 武元庄五郎
 齊藤藤太
 二木甚兵衛
 園田紋九郎
 四本宗之丞
 白坂吉兵衛
 牧 十左衛門
 種子嶋吉兵衛
 福島良助
 川上伸太郎
 名越正助
 肥後四郎兵衛
 堀切休庵
 宮里仲庵

横山勇藏
 原田長左衛門
 大山清右衛門
 川畑金左衛門
 黒江勇右衛門
 讚良武五郎
 小嶋助次郎
 新原應之助
 谷山
 加世田
 宮内幸藏
 同 森庄助
 伊集院
 別府郷之丞
 伊集院
 長谷川龍助
 伊作
 木場良輔
 串木野
 吉武彦四郎
 右同
 東次郎太
 右同
 有馬仲之進
 鹿屋
 伊集院彦七
 同
 末野仲吾
 岩川
 馬場正之進
 同
 松元彦助

同 達山勇之進

同 江口喜之助

同 岡山平吉

鹿屋 高木吉蔵

加治木 日高藤之進

同 丸野仲二

都之城 丹山佐一郎

同 鈴木十大夫

附士 壹岐喜之助

同 原田直助

同 津之池民之助

同 竹迫傳兵衛

中島直次郎

黒江喜次郎

石塚市太郎

高松庄兵衛

松田宗次郎

右ハ昨春以来・鳥羽・伏見・奥羽・北越其他諸道江致

出兵、為王事忠節(拙脱力)重創ヲ負迄及奮戰、故ニ賊巢ヲ毛屠、

速ニ奏成功、随テ 御藩威モ相立、定難之功不少、別

テ 御感之至被 思召候、依之為御賑恤本行之通被下

置候、左候テ追々平愈之上ハ、軍治之諸官ヲモ可被

仰付候間、精々可致療養候、右可申渡旨軍務局總裁江

申渡、可承向ヘモ可申渡候、

已十一月

知政所

一其身足輕格式

一扶持米拾八俵宛

但拾五ヶ年限

中村源吾從卒

月下喜左衛門從平

川上東馬家来

臼砲隊夫卒

春日艦乗付

春日艦水夫久見崎

右同乗付亡山田司家来

右同乘付大迫吉左衛門年寄拘

右同火焚田辺七右衛門

御軍艦朝陽丸乗付早川

五郎家来 湯陽次郎左衛門家来

月野徳次郎

田中彌七

久留松太郎

前田己之助

春日傳助

前田嘉七郎

三迫宗太郎

太 郎

村山貞介

山下清左衛門

踊 四郎太

石神万右衛門從卒伊集院野田村之太	太郎	有尾新太郎從卒	清太郎
小統方二隊之夫卒	休八	小統拾六番隊町夫之	盛吉
外城四番隊夫卒出水之	三五郎	小統十四番隊夫卒	藤左衛門
種子島鹿京都東漸寺住僧	竹庵	較島周吉從卒	鍊之助
小統第三隊之夫卒	助市	上山郷兵衛從卒	勇吉
二番大砲隊夫卒鹿兒島之	藤助	小統十番隊町夫之	小次郎
小荷駄方右同谷山之	彦四郎	外城二番隊玉葉役夫伊作中原村之	助次郎
旧私領第一隊之從卒鹿籠之	正次	右同加世田津貫村之	十介
小荷駄方夫卒指宿之	次郎	右同伊作小野村之	次郎
兵具隊右同上飯島之	岩右衛門	右同夫卒伊作和田之	權太
吉田喜藏從卒	喜之助	外城三番隊夫卒市來港之	熊吉
大砲一番隊夫卒	藤四郎	永田五兵衛下僕	八太郎
旧私領二隊右同知覽	市藏	外城三番隊夫卒伊集院神殿村之	市太郎
旧私領第三隊右同加治木之	甚太郎	外城三番隊夫卒市來伊作之	直左衛門
一番遊擊隊隊夫	畷次郎	遊擊隊第二隊水夫	上飯島土族塩田傳五郎
大砲二隊夫卒宮之城之	十助	二男塩田傳四郎	
右同出水江内村之	仁藏	遊擊隊第二隊夫卒西郷半兵衛下人	政次郎
右同阿久根山下村之	東市	外城四番隊夫卒阿久根之	吉太
小統十番隊夫卒伊集院神之川	半助	安田泰助從卒	源次郎
右同川辺郡山田村之	八太郎	番兵一番隊從卒高山野町之	常吉

番兵六番隊夫卒志布野村之

直助

遊撃隊第四隊夫卒

平助

國府蒲生隊

太吉

右同國府小村之

源太郎

松元寛之丞從卒鹿兒島之

三四郎

内田勘兵衛從卒

太郎

中村喜十郎從卒加世田津實之

早助

小荷駄方夫卒伊集院之

三五郎

夫卒

市次郎

右ハ昨春以来、鳥羽・伏見又ハ奥羽・北越於諸所及戰

亡、父母子弟之情不愍ニ被思召候、依之乍死後本行通

被召出、跡相統之者共ハ右之通扶持米被下置、百姓・

町浜人ハ、家内公役三拾ヶ年、狩夫銀并浜町出銀永世

差免候、

一扶持米拾八俵宛

但一世

二番隊夫卒島津頼母家来

柴山徳次郎

三番大砲隊夫卒伊東仙大夫家来

清次郎

二番大砲隊夫卒谷山下榎元村之

次郎

右同夫卒

熊四郎

小荷駄方

庄助

右同垂水之

夫卒串木野下名村小原之

太郎左衛門

休助

一右同断蒙重創、不愍被 思召候、依之為御賑恤本行通

扶持米被下置、百姓ニハ公役并狩夫銀一世差免候、

一金式拾兩宛

小荷駄方大工

財部善左衛門

番兵一番隊玉葉持夫

助右衛門

小荷駄方夫卒宇宿村之

小次郎

小荷駄方夫卒

十太郎

小銃十番隊夫卒

政次郎

一番遊撃隊水夫

助次郎

私領三番隊夫卒加治木白木山村

市左衛門

大砲三番隊夫卒

金次郎

外城一番隊夫卒

松太郎

大砲二番隊夫卒

甚太郎

常吉

直右衛門

十郎次

小銃隊一番隊主取夫

傳藏

総合四百八拾老人

右同断於陣中致病死、父母子弟之情不慙ニ被思召候、依之本行通親族之者へ被下候、

右可申渡旨軍務局総裁へ申渡、可承向江モ可申渡候、

已十一月

知政所

桑木江狼リニ立障リ枯損し、妨害無之様取締向并趣法立等^(詳カ)他細取調申出候儀は其通にて、此末ニ至リ御趣意致貫徹候様可取計旨、民事総裁并織物掛製造奉行江申渡、可承向江モ可申渡候、

明治二已十一月

知政所

四九三 藩庁道路田園ノ境等ニ桑樹ヲ植エ養蚕ヲ

盛ニスヘキヲ達ス

コノ月、又藩庁ニテハ、道路田園ノ境界或ハ河辺堤上等ニ桑樹ヲ植エ、養蚕ヲ盛ニシ、国産ヲ増大スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一 養蚕之儀は、御先代深以

思召御取起相成、追々繁殖候様と之趣は先達て申渡通ニ候、就ては御城下并近在諸所不毛之地は勿論、道路田園ノ境、或川筋土堤ノ辺不差障場所は、無残桑木可植付候、左候ハ、追年盛栄蚕絲相植、御国産致増盛候様成行、専ら諸人上下之為、産業有益之基と可相成御趣意にて被仰渡儀候間、一同深此旨を体し、植付之

四九四 能方ノ師家并同役々悉ク廢セラル、コトヲ達ス

コノ月、御能方ノ師家并ニ同役々悉ク廢セラル、コトヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、
一 御能方之儀、師家は勿論、役々仕手等ニ至迄、都て被廢候旨被 仰達候条申渡、可承向江モ可申渡候、

明治二已十一月

知政所

四九五 藩庁小郷ヲ合シテ襲山郷・真幸郷ト唱フ

ヘキヲ達ス

コノ月、藩庁ニテハ、曾於郡日當山ヲ合併シテ、襲山郷^{ソウヤマ}ト唱へ、又諸縣郡吉田・馬關田ヲ合シテ真幸郷ト唱フベ

明治2年(1869)

キヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一 襲山郷

右曾於郡日當山合郷ニテ右之通唱被相替候、

一 真幸郷

右諸縣郡吉田・馬關田合郷ニテ、右之通唱被相替候、

右ハ全体小郷ニテ、兵賦編制モ難相整、合郷被仰付、
以來本行之通唱被相替候旨被仰達候条、地頭江申渡、
可承向江モ可申渡候、

十一月

知政所

〔稿本表紙〕

明治二年
十二月
忠義公史料
十二

〔稿本にて補正〕

四九六 士族禄制ヲ定メラル

二日、朝廷中下大夫・上士以下ノ称ヲ廢シテ、都テ士族及ビ卒ト称シ、悉ク其ノ地方ニ貫屬セシメ、知行所ヲ收メテ粟米ヲ給シ、三代以上臣隸ノ者ニハ、特ニ扶助スヘキヲ達セララル、其ノ達書・粟米左ノ如シ、

四九六ノ一
一先般各藩大義名分之案壞ヲ正シ、海外諸国之形勢ヲ察

シ、以テ其封土ヲ奉還ス、依テ大ニ公論衆議ヲ被為尽、府藩県一途之政令ニ帰シ、天下ト共ニ綱紀ヲ更張被遊

度 御主意ニ付、更ニ知藩事ニ被任、随テ家禄之制被為定、藩々ニ於テモ、維新之御政体ニ基キ、追々改正可致、就テハ中下大夫・士以下之称被廢、都テ士族及卒ト称シ、禄制被相定候、尔後各其地方官ニ於テ、可為貫屬旨被 仰出候条、篤ト 御主意ヲ奉体シ、銘々分ヲ守リ、其職ヲ可尽候事、

但知行所一同上地被 仰付、總テ廩米ヲ以テ賜候事、一大夫・士以下之面々、今般家禄御定相成候ニ付テハ、其家来共三代以上相恩之者ハ、相應之御扶助可被下候間、姓名并ニ従前之禄・扶持米等取調、早々可申出事、但旧主ニ於テ扶持致シ候儀ハ可為勝手事、

規則

一 禄制二十一等ニ分チ、士族ハ十八等ニ止候事、

但士族ノ元高十三石ニ滿タス、卒ノ元高八石ニ滿

サル者ハ、是迄通之事、

一 元禄ハ現今被宛行候高ヲ以テ定候事、

一 旧来同心之輩ハ卒ト可称事、

一 禄制ハ總テ現石高ヲ可称事、

一 禄制当年ハ是迄之通、来春ヨリ可減事、

一 禄ハ都テ廩米ニテ賜候間、其触頭ニテ取札、大蔵省

へ可申出事、

四九六ノ一
禄制

現米

一元禄万石未滿九千石迄	二百五十石
一同 九千石未滿八千石迄	二百二十五石
一同 八千石未滿七千石迄	二百石
一同 七千石未滿六千石迄	百七十五石
一同 六千石未滿五千石迄	百五十石
一同 五千石未滿四千石迄	百三十五石
一同 四千石未滿三千石迄	百二十石
一同 三千石未滿二千石迄	百五十石
一同 二千石未滿千五百石迄	九十石
一同 千五百石未滿千石迄	七十五石
一同 千石未滿八百石迄	六十五石
一同 八百石未滿六百石迄	五十五石
一同 六百石未滿四百石迄	四十五石
一同 四百石未滿三百石迄	三十五石
一同 三百石未滿二百石迄	二十八石
一同 二百石未滿百五十石迄	二十二石
一同 百五十石未滿百石迄	十六石

一同 百石未滿八十石迄	十三石
一同 八十石未滿六十石迄	十一石
一同 六十石未滿四十石迄	九石
一同 四十石未滿三十石迄	八石
一同 三十石以下是迄之通	

但免二ツ五分、四捨五入之法ヲ以テ、斗ニ切上ケ可申事、以上、

四九六ノ三
御沙汰書写

京都府
東京府

今般士族之面々、別紙之通被 仰付、其府管内ニ有之
分ハ総テ可為貫屬旨、被 仰出候間、此段相達候事、

府県

右同文

民部省

今般士族之面々、別紙之通被 仰付候間、大坂府并諸
県、其省ヨリ相達可申候事、

大藏省

今般士族之面々、別紙之通被 仰付候条、為心得相達

候事、

四九六ノ四

御布告写

諸官并宮・華族之家士及諸藩士等、東京在留之向、東京府下へ相関リ候公事出入有之節、以来東京府ヨリ其主長へ一応掛合之上、本人直ニ呼出シ、取捌候間、此旨兼テ相心得可申事、

但諸官員之儀ハ、奏任以上ハ家来、判任以下ハ本人呼出候事、

四九七 海軍規則方略及ヒ人材登用ニ関スル内田

政風建言

コノ日、東京ニ在ル公議員内田政風ハ、集議院ヨリ海軍規則方略、及ビ人材登用ノ諮問ニ対シ、華族以下身代ニ応シテ釀金シ、軍艦ヲ購入シ、学校ヲ興シテ人材ヲ養成シ、漸次機器ヲ整フベキヲ建言セリ、其ノ書左ノ如シ、

明治二年己巳十二月、集議院ヨリ海軍規則方略人材見込候者可申上御下問ニ付、鹿兒島藩議員内田仲之助ヨリ建言

謹テ申ス、上古ハ和漢共文武一致ノ政ヲ布キ、治國平天下ノ大経ヲ立、人民艱難ヲ救済ス、後世是ヲ分裂シ、文ヲ貴ヒ武ヲ賤ム、文義ヲ兩途ニ誤リ、武ヲ傍ニ窺フ、是全ク兩輪ノ理ヲ真ニ得サルノ誤ヨリ、遠大ノ策ヲ失スル者ナリ、今ヤ初メテ、

朝廷先ツ海軍ヲ整立シ、外国ノ猖獗ヲ征防セント、彼カ勢ニ大ニ備ヘ、文武双立ノ政ヲ復興シ、人民ヲシテ安泰ナラシメントス、

帝王ノ天威ナリトイヘトモ、国体ヲ輝シ生靈ヲ愛憐セラル、ノ

叡慮ノ厚キニ出サレハ、豈今日ノ事ニ及ハンヤ、孰レカ真ニ感動奉戴セサランヤ、伏テ冀クハ一日モ速ナラシコトヲ、夫レ我カ扶桑洲ハ、元来大東洋ニ位シ、四方周圍海面ヲ帯ヒ、外国ニ隔牆ナク、彼カ火輪船ハ數万里ノ波濤ヲ越ユルコト比隣ノ如ク、時日ヲ定メテ来ル、一度ヒ變ヲ生スルトキハ、何ヲ以テ是レニ応シ、人タル者豈ニ枕ヲ高フシテ安居スルヲ得ンヤ、神速盛大ノ策立スンハアルヘカラス、方今ノ形勢安危輕侮、只海陸兵勢ノ強弱ニアリ、敢テ他ノ難ニアラス、然ルカ故ニ速ニ全州ノ力ヲ以テ整立セスンハ、何ヲ以テ国

体ヲ立、我人民塗炭ノ苦ヲ濟ワンヤ、是ヲ施サンニハ、其宜ヲ得ハ亦何ソ難シトセンヤ、只布告ノ道信義ヲ得ルト得サルニアリ、華族以下社寺・穢多ニ至ル迄、其情実真ニ懇切ヲ尽シテ、

朝廷ニ親シク奉仕シ、各一家ヲ守ルカ如ク同心協力シ、奉護スルノ志確乎ト動カサルノ氣真ニ生ルノミ、然レトモ当年天下凶作ノ聞ヘアリ、就中奥羽・北越ノ如キハ甚シキ由、其上兵馬騷亂ノ後ニシテ民心未タ治ラス、屹ト救済ノ道立スンハアルヘカラス、物ニハ必ス緩急アリ、上仁政ヲ布キ、寛大ノ所置ナクンハ、内国ノ紛擾ヲ釀スヘシ、於政府是等ノ災害ヲ鎮定スルノ遠慮ナクンハ行ハルヘカラス、由テ先ツ華族以下各身代ヲ五等ニ分チ、粗漏ノ管見ヲ試ニ左ニ挙ク、敢テ其數ヲ定ムルニアラス、暫ク其目ヲ立ルノミ、全州ノ戸籍大略二千万家ト賦ル、内二十分一ヲ富家トシ、一家金三兩ツ、貢獻シテ、凡ソ三百万金、二十分二ヲ中富家トシ、一家一兩二步ツ、同三百万金、二十分二ヲ下富家トシ、一家一兩ツ、同二百万金、二十分二ヲ上ノ貧家トシ、一家二步ツ、同百万金、残り十三分ヲ貧家トシ、一家一朱ツ、同八十一万五千五百金、合金大略九百八十一

万二千五百金ニ及フ、

但シ華族以下十万石以上ヲ上ノ富家トシ、一万石以上ヲ中ノ富家トシ、千石以上ヲ下ノ富家トシ、百石以上ヲ上ノ貧家トス、農商工ハ、十萬金以上ノ身代ヲ富家トシ、以下前ニ同シ、然レトモ奥羽・北越ハ、依場所除ヘキナリ、又鰥寡孤独且極ナルハ府藩県ニ於テ取調、貢獻ヲ免スヘキナリ、如此ニシテ軍艦一艘器械砲器ヲ備ヘ、大略大小相混シテ、一艘二十萬金ツ、トシテ四十九艘余ヲ求メ得ヘシ、是ヲ半ハニシテ凡ソ二十四艘ニ及フ、先ツ初メハ半ハラ求メ、殘金ヲ以テ予備、且ツ製造所其他兵士ノ給料等ニ宛、翌年ヨリハ押并ラシ一朱ツ、貢獻ト定メ、破艦等ノ先墜ニ充テ置クトキハ、海軍ニ事欠クヘカラス、予備一朱ツ、ノ貢獻ハ、貧家ノ分ハ免シ、下富以上ニ割合トスルモ能キ策幾程モアルヘシ、一朱ノ數モ大略百二十萬金ニ及フヘシ、右ノ數戸數ノ總高ヲ知ラサレハ、只ニ目当ヲ立ルノミ、儲是ヲ府藩県ニ布告スルニハ、厚ク信義ヲ布キ、一世界ノ情態ヲ詳ニシ、困体不得止ノ勢ヲ示シ、名義ノ闕クヘカラサルノ大意ヲ説論鼓動セハ、全国ノ人民孰カ命ニ背クヘキ、最モ一變ヲ生スルトキハ、私財全ク瓦

石ニ同シク、自國ノ傾敗ニ関スル所以ヲ明瞭深察患慮セハ、赤子トイヘトモ奉戴セサランヤ、何ソ

朝廷ノ力而已ヲ以テ施スノ理アラランヤ、是ヲ詳ニセハ、國恩ノ辱キヲ知り、余財アラハ許多ノ數ヲモ厭フヘカラス、生靈アルモノ孰レカ之レヲ仰カサラン、賤夫モ敢テ苛政トセンヤ、而シテ

朝貢ノ期日ヲ定メ、一応ハ軍艦其他外國ニ求メ、追々自國ニ施行セハ、必ス突出ノ勢ヲ得ヘシ、其時ニ至リ、商船ノ如キハ一己ノ才覚亦摸合ヲ以テ、是ヲ整立シ、從テ商法ノ道盛ニ開ケ、十年ノ後ハ、彼レ今日ノ如ク勢ヲ以テスルコト能ワサルヤ必然タリ、尤モ海軍ヲ興張センニハ、先ツ第一學校ヲ初ニ立、航海ノ術ヲ勉強シ、一二等ニ至ラハ洋行ヲ免シ、現時ニ押当鍛練シ、目ヲ開クニアラサレハ、必ス其業進ムヘカラス、且ツ船艦製造、大小銃ノ器械場・硝石製造合衆所ヲ水車ノ如キニ至リ、亦ハ船艦修甫ロツク場等、悉ク遺漏ナク自國ニ備ヘ、盛大ニ造営シ堪能ナル洋人数名ヲ雇ヒ、親シク伝授ヲ請ハサレハ、基ヒ行ワルヘカラス、夫等ノ費用亦莫大ナルヘシ、學校其他製造各局ノ要地ハ、必ス疾ク勤行セラル、アラン、伝ヘ聞ク、ロツク場ハ

淡州松ヶ崎、合衆水車ハ摂州布引瀧ノ流、頗ル最上ノ地ナリト、広ク御下問アラハ分明ナラン、羅紗ヒツチ等ノ軍服用ノ布モ、羊ヲ牧シ、洋人ヲ雇ヒ伝習セシメ、自國ノ用ヲ弁セハ、是又宜シカラン、倭海軍規則方略等勝安房ノ如キハ、当今頗ル傑出ニシテ、天下ノ人能ク之ヲ知ル、其他純粹ノ人ヲ擧テ總裁以下ノ命ヲ下シ、全ク委任セハ、

朝廷何ヲ力憂ヘン、伏シテ願クハ廢軍ノ令ナキノ、人ヲ使フハ必ス夫々ノ司ル処ノ職ニ居ヘ置キ、面々一杯ノ力ヲ尽スニアラスンハ、万事從テ調フヘカラス、然ルニ古ヨリ人ヲ使フノ法アリナカラ、聾怙偏頗シ、或ハ妬ミ、或ハ疑ヒ、兎角中間ニシテ瓦解ス、是レ委任タラサル故事公平ナラス、其人ノ能ク一盃ヲ尽スヲ得サルナリ、如斯因循ノ弊アリテハ、事成ルヘカラス、在職中私アラハ事發覺ノ上、断然重ク罰シテ可ナリ、何ソ狐疑ヲ生スルニ及ハンヤ、最モ道ノ立テ様ニモ差別アルヘキ事ナリ、以上、

明治二年己十二月二日

四九八 英医ウイルスヲ藩ニ聘用ス

三日、東京ニテハ、先般来英医ウリス、藩ニ聘用ノ儀談判中ノ処、四ヶ年間月九百弗ニテ約束ヲ結ビ、外務省ノ許可ヲ得タルヲ以テ、此ノ日石神良策ト共ニ、門人林ト庵ヲ随從セシメ、三ヶ月分ノ給料并ニ旅費千両ヲ支給シテ出発セシムル旨ヲ、知政所ニ報セリ、其ノ書左ノ如シ、但シ約定書ヲ逸ス、

已十二月三日石神良策便

英医師

(WILLIAM GUTHRIE)
ウリス

一
右御雇入之儀、石神良策へ被仰含越趣有之、同心を以内談為致候テ、猶又私共ウリス宅へ差越談判仕候処、年限二ヶ年ニテは逆も医術相開候見当も無之、勿論当人罷出候詮も無之事故、四ヶ年御雇入被下候ハ、御受可仕、尤四ヶ年勉強いたし、医術開切不致節は、当人ノ罪ニ候旨申出、月給之儀も八百五十弗ツ、ニテ受合無之、精々九百弗ツ、之処ニテ、別紙条約書之通決定相成候付、外務省御免許之上、今日良策同伴御当府差立申候、委細ハ良策より可申上候、

ウリス門人

林 卜庵

右同伴いたし度、尤ウリス随從之旨承届候得共、猶於其許着之上、御構等之儀可願出も難計、其篇之儀ハ良策へも申含置候間、時宜次第御取計有御座度儀と奉存候、
洋銀貳千七百弗、三ヶ月給料として相渡置申候、金千両路用として同断、

右之通御座候間、別紙約条書相添、此段申上越候、以上、

已十二月三日

田中清之進

内田仲之助

知政所

ウリス門人

林 卜庵

右ウリス同伴ニテ被差遣候段は、別段申上越通御座候、然処多人數之病人ニテ良策少々不快有之、一人ニテは行届兼候段申出趣有之、舟中文頼入相成候付、為御挨拶金拾五両遺置申候、此段申上越候、以上、

宛所同断

四九九 藩庁ニテハ島津忠義参内シ、天酌ヲ賜ヒ

タルニヨリ、賀詞ヲ述フヘキヲ達ス

五〇一 大久保利通鹿兒島派遣ノ勅命ヲ受ク

コノ日、藩庁ニテハ、忠義公去月十五日参内、天酌ヲ賜ヒ、御馬拝見ヲ許サレタルニヨリ、賀詞ヲ述フヘキヲ達セリ、其ノ達書左ノ如シ、

〔達書欠〕

五日、大久保利通鹿兒島派遣ノ勅命ヲ受ク、是ヨリ先、利通木戸ニ謀リ、岩倉・三條ノ両公ニ説クニ、人材ノ採用ヲ以テシ、朝議終ニ木戸ヲ毛利氏ニ、利通ヲ久光公及ヒ西郷ノ召出ニ遣ハサル、ニ決シタルヲ以テナリ、ソノ概要左ノ如シ、

五〇〇 藩庁民事局中ニ支配役・同助ヲ増置ス

大久保利通日記

十二月

朔日

コノ日、藩庁ニテハ、民事局中ニ支配役^六・同助^十ヲ増置ス、其ノ記録左ノ如シ、

御履歴中

十二月三日増^二左之職員二科

今朝岩公へ参上ノ処、御参 朝跡ニ相成、訪黒田子、小子帰藩木戸同行ノ事ヲ談ス、岩公副島へ御出ニ付相訪、小子愚存言上御異論無之、

支配役

二日

六等官

民事奉行副役次

支配役助

十等官

民事局筆者上

右二員在民事局採事、

今朝黒田入来、集議院出席、岩公御出、條公御談合ノ上、小子進退正月迄及延引候様云々御沙汰也、然トイヘトモ愚意ニ不適故、直様参 朝條公へ尚又委細申述候処、尚明日岩公其外御談ノ上、御決答可被成トノコト故、則廣澤子へ参リ、無伏臆相談シ候処、同人異議無之、尚今夕中及熟慮相答可申トノ事也、

三日

今朝副島子へ参、尚又篤ト及示談候、

十字参 朝、今日 御前評議有之、小子進退ノコト、

尚前原へ及示談候処、異論ナシ、岩公・條公亭へ御出、

小子帰藩ノ事御談シ、内決被為在候段、御紙面承知イ

タシ候、今夕訪木戸子、段々目的ノコト、且同行一條

等細々示談ニ及候処、格別異議無之帰家、黒田参居篤

及示談候、

四日

十字参 朝 御前評議有之、

一今夕副島子入来、

五日

十字参朝 御前評議有之、

一今朝黒田子入来、退出ヨリ神田邸(同上)へ参、伊集

院・川村・吉井子等一会、小子帰藩ノコトニ付、示談

ニ及候、

一今日於 御前岩倉卿ヨリ、今般鹿兒島へ被差越候義、苦

勞思食候、兼テ大隅守(久光公) 御召相成居候得共、

就所勞上京延引之御願有之、不得已義ニ候得共、此后

ノコト実ニ御大事ト深被碎

叡念、頼ニ御依頼被 思召事候付、是非来春ニ当ツテ

ハ、上京有之候様可致尽力旨云々、從テ西郷(隆盛)

之処モ同断、兼テ御召之コト候間、大隅守へ隨從是非

上京イタシ候様、是又分テ尽力可致旨云々、拜承御受

仕候、

五〇二 藩庁会計方調役并同勘定役ニ金穀出納ノ

事ハ時々出張検査セシムヘキヲ達ス

八日、藩庁ニテハ、会計方調役并ニ同勘定役ハ、其ノ配

下ハ勿論、他方ノ管下ニテモ、金穀出納ノ事ニ関シテハ、

時々出張検査セシムルコトアルベキヲ達ス、其ノ達書左

ノ如シ、

一會計方調役

一右同勘定役

右ハ會計方管轄之役局ハ勿論、外役場たり共、金穀

出納之事ニ依テハ、時々致出府候様被 仰達候条、

會計総裁江申渡、可承向へも可申渡候、

明治二百二十二月八日

知政所

五〇三 藩庁西洋医院ヲ元浄光明寺跡ニ移シ西洋

学校ト唱フヘキヲ達ス

十二日、藩庁ニテハ、西洋医院ヲ元浄光明寺跡ニ移シ、

西洋学校ト唱フヘキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一 西洋医院ノ儀、本浄光明寺跡江転局被仰付、西洋学校

と相唱候様被仰付候条申渡、可承向江も可申渡候、

明治二巳十二月十二日

知政所

五〇四 大久保利通・木戸孝允帰藩ノ途ニ着ク

十三日、大久保利通ヲ木戸ト共ニ御前ニ召サレ、天盃ヲ

賜ヒ、三條公ヨリ御趣意ノ貫徹ニ尽力スベキヲ伝ヘラル、

依テ利通ハ、十八日東京発途、翌日横濱ヨリ米國飛脚船

ニテ帰藩セリ、其ノ概要左ノ如シ、

大久保利通日記

十三日

今朝山岡(鉄太郎)子入来、

一 三字参 朝、今日ハ近々就発足、玉座ニ被召御酒肴賜

り候、今般帰藩ニ付、呉々御趣意相貫候様尽力、両老

公出京イタシ候様云々、尤木戸公同様罷出候条、條公

御取伝ニ候、

御火鉢一・御絹一疋於 御前賜り候、

天盃頂戴、最 天酌ヲ以頂戴イタシ候、誠ニ以恐縮至

極ニ候、

條公ヨリ、於兩人ハ先年来為 皇國不容易尽力、終ニ

今日ノ盛業ヲ成シ、実ニ御満足 思食候、尚前途大事

ニ候間、精々勉励イタシ候様云々、拜承、恐縮イタシ

候、

一 今夕黒田子入来、

十四日

不参、

一 今夕副島子へ参ル、吉井モ参ル、

十五日

今朝木戸子入来候、

一 十二字参 朝、今日ハ同席中於紀州邸、條公・岩公・

徳大寺公其外弁官中相招、退出ヨリ差越候、

十六日

岩両公子入来、勝氏入来、昼后ヨリ條公へ参殿、段々

御懇話拜聞、夫ヨリ岩公へ参殿、副島モ入来、種々御

趣意拝承致候、

十七日

不參、

今朝伊集院子・川村子入来、徳大寺卿へ参殿、

一 今夕副島子・内田子・吉井子・黒田子・田中子・石原

子・南部子等入来、

十八日

今朝廣澤子・石原子・鮫島子等入来、

一 十一字頃馬車ニテ発途、梅邸迄彦之進・達熊・吉井倅

等為見送参ル、三字過同所打立、暮時横濱へ着、

十九日

今朝渡邊大忠・松方知県事、従長崎着港ニテ入来、耶

蘇事件都合宜敷趣承候、木戸子旅宿へ見舞、二字比ア

メリカ飛脚船へ乗込、五字開帆、

五〇五 戊辰役賞典ノ追賞及ヒ箱館征討ノ追賞ヲ

行ナハル

コノ日、戊辰役賞典ノ追賞ヲ行ハレ、十五日ニ至リ、又箱館征討ノ追賞ヲモ行ハル、本藩人ニシテ之ニ与リシモ

ノ左ノ如シ、
五〇五ノ一

明治二年十二月十三日戊辰役賞典ヲ追賜セラル、

戊辰賞典追賜御沙汰書

御沙汰書

金貳百五十兩

新納四郎右衛門

金百五十兩

蓑田耕之丞

全

吉田清蔵

全

市來太郎左衛門

全

前田伊右衛門

戊辰之年賊徒掃攘之砌、軍事勉勵之段、神妙之至被

思食、仍為其慰勞目録之通下賜候事、

金百兩

田尻善左衛門

全

吉原彦左衛門

全

松井十郎

戊辰之年賊徒掃攘之砌、軍事勉勵之段奇特之至ニ候、仍為其慰勞目録之通下賜候事、

五〇五ノ二
己巳箱館戦功賞典表

高二万石

松前兼廣

六千石

阿部正桓

三千五百石	德川昭武
三千石	土井利恒
七百石	黒田清隆 <small>介</small>
六百石	山田顯義 <small>允</small>
二百五十石	清水谷公考
二百石	増田明道 <small>虎之助</small>
百七十石	大田黒惟信 <small>亥和太</small>
百五十石	曾我祐準 <small>造準</small>
百五十石	中島佐衡 <small>郎四</small>
百五十石	中牟田武臣 <small>倉之助</small>
百三十石	石井靄吉 <small>富之助</small>
百二十石	森政知 <small>藏清</small>
五十石	石井忠亮 <small>貞之進</small>
五十石	駒井忠仲 <small>政五郎</small>
以上 永世祿	毛利廣封
二万五千石	島津忠義
一万石	池田章政
一万石	津輕承昭
五千石	有馬頼咸

五千石	毛利元蕃
三千石	藤堂高猷
三千三百石	春日 <small>艦鹿見藩</small>
三千二百石	甲鐵 <small>艦</small>
二千五百石	旧箱館府兵
二千石	朝陽 <small>艦</small>
千五百石	陽春 <small>艦</small>
千石	丁卯 <small>艦山口藩</small>
千石	第二大隊 <small>一番中隊右小隊</small>
九百石	豊安號 <small>船島藩</small>
九百石	飛龍號 <small>船柳河藩</small>
八百石	延年 <small>艦佐賀藩</small>
四百石	晨風號 <small>船米留藩</small>
以上 三年限	松前隆廣 <small>敦千代兼広ノ叔父</small>
太刀	細川韶邦
金千兩	津輕承叙
千兩	春日 <small>艦長</small>
五百兩	赤塚 <small>(真成)源六</small>
五百兩	岸良直養 <small>彦七</small>
四百兩	野田豁 <small>通大造</small>

明治 2 年(1869)

四百兩	丁卯艦長 山縣 久太郎	二百五十兩	豐安号船長入江 良之進
四百兩	延年艦長澤野種鐵六	二百五十兩	農風号船長西田 元三郎
四百兩	前田 雅榮	二百兩	林 友幸半七
四百兩	今井 弘亮介	百五十兩	藤井 源之進
四百兩	松本 鼎鼎造	百五十兩	長谷川貞雄殿
四百兩	和田 慎之助	百五十兩	小田 吉兵衛
四百兩	村橋 直衛	六十兩	西尾貞俊棟
四百兩	宮川長春助五郎	六十兩	田村 象之助
三百五十兩	寺田 良輔	六十兩	井口 貫七
三百五十兩	三刀屋祐寶七郎次	六十兩	深津 伝八
三百五十兩	香川 主税	六十兩	中田 伝藏
三百五十兩	山縣 甲之進	六十兩	今鷹 次郎
三百五十兩	山縣 衛与三	六十兩	三浦 只五郎
三百五十兩	不破 一学	六十兩	久保木 左忠
三百五十兩	有地 志津摩	六十兩	鈴木 金五
三百五十兩	原川 魁助	六十兩	藤岡 与市
三百兩	柳田友卿東洋	六十兩	今井 正平
三百兩	堀 義彦真五郎	六十兩	小池 仙之進
三百兩	飛竜号船長岡 正忠啓三郎	六十兩	奥寺 鉄四郎
三百兩	田島 敬蔵	五十兩	井上直貞金次郎

金 千 両

第一大隊撤兵
同三番中隊左小隊

十二月十五日隊中ニ分賜ス、

總計

米十二万〇七百二十石四人扶持内三万五千七百七十石 永世
八万五千五百石 三年限

金一万七千九百二十両〇二分内五十七石 永世祭案
三人扶持終身一人扶持祭案

五〇六 藩庁新ニ会計方勘定役助ヲ置キ從來ノ勘

定役助ヲ同見習ト改称スヘキヲ達ス

十五日、藩庁ニテハ、新ニ会計方勘定役助等ハヲ置キテ、

從來ノ勘定役助ヲ勘定役見習ト改称スベキヲ達ス、其ノ

達書左ノ如シ、

一勘定役助

右八等官、会計方調役助之次ニ被召建候、

一勘定役見習

右当分之勘定役助右之通名目被相替候、

右之通被仰付候旨被 仰達候条、会計局総裁江申渡、

向々江も可申渡候、

明治二己十二月十五日

知政所

五〇七 島津忠義周防三田尻ニ着艦シ毛利元徳ト

会见ス

二十一日、忠義公周防三田尻ニ着艦セラレ、翌日上陸、

客館ニ於テ毛利公ト会见セラレ、種々御挨拶アリ、当時

長州ニ遊学中ノ久封助之君并ニ横山安武正太、其ノ他ノ人

々ニモ謁ヲ賜ヒタリ、其ノ概況左ノ如シ、

十二月廿一日 雪天

村田新八 種子嶋中輔

貴嶋平八 帖佐彦七

一藝州御手洗三里位過テ夜明ル、夜入り八字三十分、防

州三田尻港江

御着艦御碇泊之事、

十二月廿二日 雪天

村田新八 種子嶋中輔

貴嶋平八 帖佐彦七

一今日三田尻港江

御滞船、十二字通船江 御乗付ニテ

御上陸、小堀客館江被為 入候処、無程

^{〔宅利元徳〕}
從三位様 被為入、緩々 御対顔被為

在、夜十二字客館

御立、一字三拾分三邦丸江

御帰船、二字三田尻湊 御出艦、伊豫大鼻崎巷里計手

前ニテ夜明ル、

但從三位様御儀ハ、御族館江前以^{〔旅カ〕}

御引取相成候事、

五〇八 大久保利通京都ニテ、大村永敏暗殺犯人

ノ処刑ニ付、彈正台大忠等ヲ説得ス

二十四日、去ル十八日、勅命ヲ奉シテ東京ヲ出發シタル
大久保利通、コノ日伏見ヨリ京都ニ着シ、先キニ大村永
敏ヲ刺シタル者ノ刑ノ執行ニ対シ、彈正台ヨリ抗議アリ
シヲ以テ、同大忠・海江田信義等へ懇々説得シタリ、其
ノ概況左ノ如シ、

大久保利通日記

廿四日

今朝伏見へ着、兼春ニテ大山彦八子見舞有之、十一字
比發足、二字京着、岩下・新納氏・海江田入来、

廿五日

海江田子相招、大村ノ罪人御所置ニ付、彈正台ヨリ引
留候義有之、段々説得イタシ候、

一二字參 朝、長官公へ云々示談ス、

一岩下家へ參ル、今夕海江田子尚又大村事件懇談ニ及、

廿六日

今朝宇田子入来、昼后門脇大忠・新納子等入来、

廿七日

今日終日不出、岩下氏入来、海江田子入来、大村罪人
一条示談之義、迎モ承伏難致旨決答有之、

廿八日

大村罪人兎角断然処置ノ外無之、中御門卿へ參上候処、^{〔經之〕}
東京ヨリ報知ノ御沙汰有之、安心イタシ候、岩下氏へ
立寄參 朝イタシ、弥明日御処置ノ筋御決シ、府へ御
達ノ運相成候、彈正台ノ処置六ヶ敷候へ共、海江田・門
脇へ懇々説得シ、漸クニ立合等致候事ニ決答有之、八
字過帰ル、

五〇九 藩庁島津忠義帰着ニ付、祝詞ヲ述フヘキ

ヲ達ス

二十五日、藩庁ニテハ、忠義公昨廿四日御帰着ニ付、祝詞ヲ述フヘキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一從四位様御儀、依御願御暇賜、先月廿四日東京 御発駕、去ル廿一日大坂

御出艦、昨廿四日 御着城御安康被遊 御座、奉恐悦

候、依之嶋津珍彦殿一列并二等官以上、今日登 城、

家令江相付

從四位様 從三位様江御祝儀可申上候、

右外略ス、

右之通向々江可致通達候、

明治二己十二月廿五日 知政所

五二〇 衣服容貌ノ儀ニ付藩庁達書

二十七日、藩庁ニテハ、曩時衣服容貌ノ儀ハ、随意タルヘキヲ達シタレトモ、藩知事公ヨリ公職ニ在ルモノハ、朝廷ヨリ規定アルマデ、平常戎服乱髪ヲ禁ゼラレシ旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一容貌衣服之儀、可為勝手次第旨相達置候得共、考之訳有之、

朝廷より 御沙汰有之迄は、治事局之儀は平常戎服乱髪不相成候事、

右之通 從四位様御書取を以被

仰出候条、一統奉承知、屹と心得違有之間敷候、此

旨向々江不洩様致通達、諸郷江も可申渡候、

明治二己十二月廿七日

知政所

五二一 藩庁島津歳久以下七名ノ神靈ヲ、其ノ功

勲ニ抛り祭祀スヘキヲ達ス

コノ月、藩庁ニテハ、島津歳久以下忠節ノ士七名ノ神靈ヲ、各々其ノ功勲ニ抛り、一社建立又ハ祭祀高寄附、或ハ従祀等ノ方法ヲ以テ祭祀セラルベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一 嶋津左衛門歳久

右歳久事、忠誠にして英武胆略、格別成御連枝ニて候

処、故ありて於帖佐瀧〔平松自刃カ〕ケ水自尽被有之候付、

〔島津歳久〕貫明公右瀧ケ水江心岳寺被召建、歳久菩提所被仰付置

候へとも、此節

思召之訳被為 在、心岳寺之儀は被廢、右寺跡江改て

一社御建立、歳久神靈被相崇、社司被召附置候、

伊集院大和忠朗

右忠朗事、

〔高津忠良〕
〔同貴公〕

日新公 大中公 貫明公江奉仕、忠節拔群之者候処、

不幸にして其孫右衛門事忠棟父子叛逆ニ依り、後嗣及滅亡、尤此節忠朗致創建候笑岳寺被廢、自身召附置候

寺高被召揚候付ては、忠朗祭祀尽果、御残多被

思召上候付、伊集院四郎事庶流之事候間、自家江忠朗

神靈相崇、祭祀向永年無退転様、屹と可遂行旨被仰付、

右寄附高之内七石永々被下置候、

嶋津圖書忠長

鎌田出雲政近

比志嶋紀伊國貞

伊集院下野久治

伊勢兵部貞昌

右五人之儀、御家格別成忠臣ニて、

〔高津家公〕慈眼公深其功勲を 御感被遊、御病腦被為重候節、

御位牌脇江右五人之位牌可配列旨、御遺命被遊置、

尤比志嶋國貞儀ハ、別段為菩提所源舜庵被建置候得共、

寺院廢絶ニ付ては、右

御趣意之程も可相消哉ニ被

思召上候付、此節之各靈改て長谷神社

御肖像脇江被召建、以来従祀之典、遂行候様被仰付候、

但御劍一振被建置候、

右之通被 仰達候条、神社奉行并銘々子孫江申渡、

可承向々江も可申渡候、

明治二己十二月

知政所

五二 藩庁民部省ヨリ酒造制限厳守ニ付布告ス

コノ月、藩庁ニテハ、民部省ヨリ当年ハ全国一般凶荒米

価沸騰ニ付、酒造ハ平時免許高ノ三分一ヲ超過スベカラ

ズ、犯ス者ハ嚴科ニ処スベキヲ達セラレシ旨ヲ布告ス、

其ノ書左ノ如シ、

布告書

一酒造之儀ニ付ては、前々より相触候趣も有之候処、当

年之儀は、諸国一般不作、米価追々沸騰及び下民難渋

たるべく候間、向後及沙汰候迄は、免許高之三分一造

と相心得可申、万一心得違之者有之、過造密造等之所

業いたし候者有之ニおるてハ、遂吟味醸酒并造道具等

取揚、当人ハ勿論、所役人迄屹度嚴重之咎可申付候間、其旨相心得、堅く可相守もの也、

右之趣於府藩臬無洩触示、取締行届候様可致候事、

(十一月三日)

已十二月

民部省

五二三 藩庁華倉細工場ヲ廢シ、其ノ跡ニ生産方

管轄ノ金性分析所ヲ建設スヘキヲ達ス

コノ月、又藩庁ニテハ、華倉細工場ヲ廢シ、其ノ跡ニ生産方管轄ノ金性分析所ヲ建設スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一華倉細工場之儀、引取被仰付候、左候て同所跡江生産方管轄金性分析所被召建候条、会計局總裁江申渡、可承向江も可申渡候、

明治二已十二月

知政所

五二四 藩庁従来ノ庄屋ヲ村長ト改称スヘキヲ達

ス

コノ月、又藩庁ニテハ従来ノ庄屋ヲ村長ト改称スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一村長

右之通、近在庄屋之儀唱被相替候条、民事局總裁江

申渡、向々江も可申渡候、

明治二已十二月

知政所

五二五 藩庁諸郷ノ監察局關係ノ事務ハ小頭ニテ

取扱フヘキヲ達ス

コノ月、又藩庁ニテハ、諸郷ノ監察局關係ノ事務ハ、小頭ニテ取扱フベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一諸郷之儀、監察局關係之御用筋は、小頭より御用致取扱、以来御用筋無滞弁別いたし候様、被仰付候条可申渡旨、軍務局總裁江申渡、監察總裁・地頭并可承向江可申渡候、

明治二已十二月

知政所

五二六 藩庁軍神祭祀・武事始惣調練ノ期日ヲ達

ス

コノ月、又藩庁ニテハ、軍神祭祀ハ正月六日ナリシヲ、

全月三日ニ改メ、祝砲ヲ放タシムベク、又武事始惣調練

ハ同七日ニ執行スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一御軍神御祭祀之儀、例年正月六日被為遂行來候得共、

以來正月三日ニ御祭祀被相替、祝砲打方被仰付、左候

て武事初惣調練之儀は、同七日ニ被仰付候旨被

仰達候条、軍務局総裁并神社奉行へ申渡、可承向々江

可申渡候、

明治二巳十二月

知政所

五二七 藩庁坊泊・久志・秋目・鹿籠ヲ合併シテ南

方郷ト称スヘキヲ達ス

コノ月、又藩庁ニテハ、坊泊・久志・秋目・鹿籠ヲ合併

シテ南方郷ト称スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一南方郷

右は坊泊・久志・秋目・鹿籠小郷ニテ、常備兵編制

も難相整候付、三ヶ所合郷被仰付、本行之通唱被相

替候旨被 仰達候条、地頭へ申渡、可承向江も可申

渡候、

明治二巳十二月

知政所

五二八 藩庁島津家ノ靈位ヲ神社ニ祀ル

コノ月、又藩庁ニテハ、島津家高祖以下旧寺内ニ安置セ

ラレタル靈位ヲ神社ニ祀リ、各々社号ヲ定メタルヲ達ス、

其ノ達書左ノ如シ、

龍尾神社

右旧淨光明寺

御高祖御靈社

竹田神社

右旧日新寺内

梅岳公御靈社

松原神社

右旧南林寺内

大中公御靈社

大平神社

右旧妙谷寺

龍伯公御靈社

徳重神社

右旧妙圓寺内

(長谷神社)
松齡公御靈社

長谷神社

右旧福昌寺跡

(長谷神社)
慈眼公御靈社

右は此節御社被召建、社号右通可奉称旨被

仰達候条、神社奉行へ申渡、可承向へも可申渡候、

明治二巳十二月

知政所

五二九 藩庁拔米取締ヲ嚴重ニスヘキヲ達ス

コノ月、又藩庁ニテハ、当時他藩ハ米価比較的高騰ニ付、往々拔米ノ恐アルニヨリ、取締ヲ嚴重ニスベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一 拔米取締之儀ニ付ては、此以前より分て申渡置候得共、当時他藩別て米高料にて、御当地直成ニ引競候得は、過分之行違相成、拔米之懸念不少候付、此涯諸所地頭并副役は勿論、番所詰検事より嚴重可致取締候、就中出水・川内・加世田方限、又は志布志・串良・高山方限等、別て懸念之場所候間、一涯取締行届候様可心懸

候、左候て拔米見当次第申出候者江は、御定之通其石数都て可被成下候、此旨監察總裁并地頭江申渡、可承向江も可申渡候、

明治二巳十二月

知政所

〔稿本表紙〕

明治三年
正月 忠義公史料稿本(初稿)一

〔稿本にて補正〕

徙り、勅祭之神社を御遙拝御拜之式、兩段再拜、

但御束帶、

一勅祭神社

一霧島神社

國府

一鹿兒島神社

一枚聞神社

一益救神社

一宮浦神社

一加紫久利神社

一韓國字豆峯神社

一大穴持神社

右式内

一智賀尾神社

鶴田

一紫尾神社

高尾野

一紫尾神社

一霧島峯神社

一鹿兒島神社

五二〇 藩庁年頭諸儀式ノ手当及ヒ法式ヲ定ム

一月一日

藩庁ニテハ、年頭諸儀式ノ手当及ヒ法式ヲ定ム、
五二〇ノ一

明治三年年仰渡左之通

年頭御規式之次第

正月朔日

一今晝寅一刻、御書院庭上之御拜席江 御出座、東向

天朝を御遙拝御拜之式、再拜、次ニ 神祇御拜席江御

一 多夫施神社

一 伊邇色神社

一 白羽火雷神社

一 志奈尾神社

一 櫻島神社

右式外官社

右現神社江は、神主代又は地頭等より御代參献幣、

一 今朝辰一刻御対面所より御出、五社並福ヶ迫諏訪神

社江御參詣、御麻袴、

但御順次、若宮、祇園、稻荷、春日、諏訪、

一 鳥居外江社司罷出御先立、

一 御腰物侍直長取之、

一 御手水侍直より差上ル、

一 御拝席江御着座、

一 御盛塩侍直より差上ル、

一 御祝詞齋主仮位ニ相付申上ル、

但御左脇、

一 御拝、

一 御神酒社司神前より持下り、侍直江相渡、侍直より

差上ル、

一 御立、

一 鳥居外江社司罷出、次鶴嶺神社江 御參詣、引統照

國神社江 御參詣、

但御次第右ニ同し、

一 御婦殿後二丸江 御出、

從三位様江御対面御慶賀、

一 花尾神社

郡山

一一之宮神社

右江献幣使島津珍彦殿(忠鑑)一列之内江、勤方家令より相

達、

但麻袴、

二日

一 辰一刻御着服

御麻袴ニて、御座之間江

御出座、御先立家令、

一 蓬萊

一 御茶

但侍直上ル、

島津珍彦殿一列

同部 屋栖方

一 長柄之御銚子

右二之間下御敷居より下四畳目にて御礼、直ニ御縁

一 御加

頼之方、二之間上御敷居より下三畳目中程より順々

但御酌侍直

着座有て、御祝儀被申上之、

右御上段内一畳目末にて、御盃順々頂戴、御土器持

一 長柄之御銚子

下ル、畢て御銚子入等引之、

一 御加

三等官

但御酌侍直

右御中段御敷居内三畳目にて、五人ツ、御目見退

一 御盃 御土器

座、

三方

一 数之御土器

一 御盃被召上御加有之、其御盃御座之間御敷居より上

一 長柄之御銚子

二 畳目中江御三方共相下、順々御盃頂戴、何れも御

一 御加

返盃復座、畢て御銚子入等引之、一同御礼退座、

但御酌侍直

右畢て

御中段より一畳目上にて、御盃順々頂戴、御土器持

一 御対面所御上段江 御出座、

下ル、畢て御銚子入等引之、

一 蓬萊

四等官以下

一 御茶

八等官以上

二等官

右同三之間舞戸より三畳目にて拾人計宛 御目見、

右御中段下御敷居より内上四畳目下にて、老入ツ、

鹿兒島士族

御目見退座、

右同断二畳目にて同断、

一 数之御土器

三日

一 巳刻

御対面所江

御出座、

但御着服前条同断、

琉球館

蔵役

書役

在番親方

与力

外城士族

惣代分隊長

以上一郷耆人ツ、

右御中段御敷居より外一畳目上ニテ御礼、
一 右進上物都て不及備、
右畢て

御入、

右登 城 御対面所三之間下舞戸より二畳目ニテ
御目見、
但隊長無之郷は旧噺・組頭之内より同断、

附 士

附 屬 長

一 御軍神御祭祀

一 右付祝砲打方

附 屬 長

四 日

右同断一畳目ニテ同断、

一 政始 知政所江

一 練芭蕉布 五端

御出座、賜二年九拾以上人並忠臣孝子ニ禄ヲ、
但御着服御半袴、

一 焼酎 一壺

一 神社奉行並諸局惣裁一人宛、外ニ奉行等一人宛出席、

在 番

但惣裁病氣等之節は奉行等兩人罷出、

親 方

右御中段御敷居内一畳目下ニテ御礼、

一 神社奉行より鶴ヶ嶺神社当年御祭日取調言上退出、

一 練芭蕉布 三反

一 民事惣裁より用夫之員數・田方之豊凶言上退出、

但相中より

一 會計惣裁より上下之人員・戸口之數・当地之米価言

上退出、

一軍務惣裁より常備兵・銃砲・軍艦予備迄之員數言上退出、

一監察惣裁より忠臣孝子見聞之次第書附を以申上、

但御退席迄之間席詰、

一糺明惣裁より断刑之有無言上退出、

御入、

一稻荷八幡天神其外御庭之神社江 御參詣、

五日

一御座之間江

御出座、講釈学頭・助勤之五等官以上罷出、

但刻限五ツ半時、

右相濟、

御入、

六日

一文学始、学館江

御出座、開講、

七日

一武事始、軍務局へ

御出座、総調練、

以上

五二〇ノ二
年頭御規式之御手当

正月朔日

一前日於御書院之庭上^ニ設御座於二所^ニ、一所 天朝遙拜之座、一所神祇御遙拜之座、

一天朝御遙拜之座、先敷^ス葉薦^モ其上ニ鋪^シ畳三枚^ヲ、其外

ニ立^テ御屏風三帖^ヲ、開^キ東一方^ヲ、自^レ階下^ニ至^リ御屏風

ノ西頭^ニ、敷^キ筵道^ヲ、御屏風ノ内左右二所ニ置^キ脂燭^ヲ、

一神祇御遙拜之座、先敷^ス葉薦^ヲ、其上ニ鋪^シ畳三枚^ヲ、其

外ニ立^テ御屏風三帖^ヲ、開^キ東一方^ヲ、張^リ四方于注連、御

屏風ノ内東方立^テ八足机一脚^ヲ、机上供^テ神酒・堅塩・

洗米、左右二所置^キ脂燭^ヲ、

一二所之御座各東向為^シ左^ニ於上^ニ、為^シ右^ニ於下^ニ、左 天朝

御遙拜座、右神祇御遙拜座、開^キ西方ノ屏風三尺許^ニ為^シ

御出入之路^ヲ、

右御座設方道具方請持、神酒・洗米等之物ハ、自^レ出

納奉行ニ調進、畢家令点検、

一御座設方畢修^レ被^シ、

右一行神社奉行請持、

一前日自_ニ申_ノ刻_ニ御潔斎、

一当朝御出座前、侍直屏風内脂燭_ニ点火、

一御出座ノ時、家令持_{ッテ}脂燭_ヲ前行、侍直長取_ニ御剣_ニ、侍

直長持_ニ御末広_ニ扈從、被_レ為_レ入_ニ御屏風_ニ時進御末広、

御草履取奉_ニ御草履_ニ、然後皆候_ニ御屏風外_ニ、

一監察候_ニ御中門外_ニ備_ニ非常_ニ、

一五社並鶴嶺神社・花尾神社・郡山一之宮神社江御進納

之幣帛料錢五十疋宛、調方諸財掛出納奉行請持、

一朔日より五日迄、御座之間・御書院・御対面所御出座

之節、參政・監察惣裁・伝事・家令・侍直長等詰、

一二日より三日迄於_ニ御対面所_ニ

御目見、付ては監察差引、

一御書院其外御床飾等道具方請持、

一任職之面々其外朔日より三日迄改服、

但四日より平服、

一四日以來御式相掛候面々は改服、

一朔日より五日迄十五日御門相開、

右外別冊御次第書之通、

以上

五二〇ノ三

正月朔日

一五社並花尾神社・郡山一之宮神社江献幣使御初穂五拾

疋ツ、御進納、調方等出納奉行請持、

一二丸御庭内諸社江献幣家令御初穂拾疋ツ、御進納、調

方等前条同断、

一幣帛料錢五拾疋ツ、

右

福ヶ迫諏訪社

鶴ヶ嶺神社

照國神社江

献幣使家令、御進納調方出納奉行請持、

一任職之面々朔日より三日迄改服、

但四日より平服、

一朔日より三日迄十五日

御門相開、

右外別冊御次第之通、

以上

五二〇ノ四

二丸

御在国御病氣ニ付、年頭御規式御手当

正月朔日

勅祭神社

一霧島神社

國府

一鹿兒島神社

一枚聞神社

一益救神社

一宮浦神社

一加紫久利神社

一韓國宇豆峯神社

一大穴持神社

右式内

一智賀尾神社

鶴田

一紫尾神社

高尾野

一紫尾神社

一霧島峯神社

一多布施神社

一伊邇色神社

一白羽火雷神社

一志奈尾神社

一櫻島神社

右式外官社

右現神社江は神主代又は地頭等より 御代參献幣、

一五社江 從三位様献幣使家令、

一二九諸神社江献幣使同断、

一華尾神社

郡山

一一之宮神社

右献幣使

但從四位様献幣使兼、

二日

島津珍彦殿一列

同部屋栖方

右於二丸家令江相付、御祝儀被申上之、

二等官

右於二丸家令江相付、右同断、

三等官以下

八等官迄

右於御本丸竹之間伝事江相付、右同断、

鹿兒島土族

右於御本丸伝事江相付、右同断、

三日

一福ヶ迫諏訪並鶴嶺神社・照國神社江献幣使家令、

琉球人

右御本丸於席々、参政江相付御祝儀申上之、

諸郷士族

隊長以上

一郷耆人ツ、

附 属 長

右同断御本丸於鷲之間、御帳ニ相付退出、

但隊長無之郷々ハ、旧暖・組頭之内より同断、

以上

五二一 天神・地祇八神及ヒ皇靈ヲ神祇官ニ祭り

大教ヲ宣布スルヲ諭ス

一月三日

勅シテ天神・地祇八神及ヒ皇靈ヲ神祇官ニ祭り、且宣教

使ヲ置キテ大教ヲ宣布スルヲ諭ス、

五二ノ一
略○上

正月三日、勅シテ天神・地祇八神及皇靈ヲ神祇官ニ祭り、且ツ宣教使ヲ置キ、大教ヲ宣布スルヲ諭ス、聖体不予、公三美ヲシテ代ラシム、

略○中

宣布大教詔

朕恭惟、天神 天祖立極垂統、列皇相承、繼之述之、祭政一致、億兆同心、治教明于上、風俗美于下、而中世以降、時有汚隆、道有顯晦矣、今也天運循環、百度維新、宜明治教、以宣揚惟神之道也、因新命宣教使、布教天下、汝群臣衆庶其体斯旨、

鎮祭詔

朕恭惟、大祖創業、崇敬 神明、愛撫蒼生、祭政一致、所由来遠矣、朕以寡弱、夙承 聖緒、日夜忧惕、懼天職之或虧、乃祇鎮祭天神・地祇 八神暨列皇神靈于神祇官、以申孝敬、庶幾使億兆有所矜式、

略○下

五二ノ二

略○上

同○正月三日

神祇官ニ於テ御神祭拜礼ニ罷出候事、

同月四日

御政事始、彈正台出仕賜祝酒、御末広一握拝領仙人竹ニ繪也

立春

大御代の光りとともに朝日さす

はまとの森に春立にけり略下

五三三 藩庁鳥羽・伏見戦亡者三年祭ヲ行フ

一月三日

藩庁ニテハ、軍務局内ニ於テ、鳥羽・伏見戦亡者三年祭ヲ行ヒ、仍テ弔銃ヲ放ツ、

明治三年正月三日、伏見戦役三年祭ヲ執行シ、祭砲式ヲ行フ、

【参照一】

寺師宗道日記

正月三日 雨天

前略、スリ切レ今日伏水口等之戦争初日ニテ、当年既ニ三年会ニ相当、軍務局ニおゐて御軍神之有之候

由、朝より祝砲打方相聞得候、

【参照二】

明治元年正月

慶應四戊辰春伏見・鳥羽戦歿名簿

大砲第一隊

大山源右衛門行安 戦兵

正月三日夜伏見御香宮下ニヲヒテ戦死 年二十二

大砲第二隊

川西與十左衛門幸實 戦兵

正月四日鳥羽街道ニ戦死 年二十一

四本佐平太英風 戦兵

正月五日鳥羽街道ニ戦死 年二十三

大場軍輔景廣 戦兵

正月五日鳥羽街道ニ戦死 年二十九

中島彌次郎廣庭 分隊長

正月五日鳥羽街道ニ戦死 年二十三

伊東強右衛門祐啓 戦兵

正月五日鳥羽街道ニ戦死 年二十五

臼砲隊

家村彦五郎住客 玉葉方

正月五日淀川筋松原ニ戦死 年二十八

小銃第一隊

伊集院金次郎正雄 小頭見習

正月三日伏見ニ戦死 年三十二

山田孫一郎有清 小頭見習

正月三日伏見之戦ニ重創ヲ被リ、十日ヲ以テ歿ス

年二十七

塩田雄蔵國幸 戦兵

正月四日鳥羽之戦ヒニ創ヲ被リ、二月十一日ヲ以テ

歿ス 年十九

八田幸輔知古 戦兵

正月三日伏見之戦ニ重創ヲ被リ、十七日ヲ以テ歿ス

年二十六

小銃第二隊

加治木清之丞兼文 兵糧役

正月三日伏見ニ戦死 年三十五

西藤次郎長孝 小頭

正月三日伏見奉行屋敷ニ戦死 年二十五

平岡彦九郎之綱 戦兵

正月三日伏見御香宮下ニ戦死 年二十五

小銃第三隊

堀彌之助金徳 人馬方

正月三日伏見ニ戦死 年二十七

宅間惣左衛門道治 戦兵

正月四日伏見三雲橋ニ戦死 年二十二

白尾孫兵衛幸正 戦兵

正月四日伏見三雲橋ニ戦死 年二十四

入佐助八兼友 戦兵

正月五日鳥羽ニ戦死 年二十四

福田喜左衛門政清 戦兵

正月五日鳥羽ニ戦死 年二十

宅萬榮之丞道近 戦兵

正月六日八幡ノ戦ニ重創ヲ被リ、十六日ヲ以テ歿ス

年十九

平川丈助常尚 戦兵

正月六日八幡ノ戦ニ重創ヲ被リ、廿四日ヲ以テ歿ス

年二十四

小銃第四隊

山内雄助弘道 戦兵

正月三日伏見之戦ニ重創ヲ被リ、三月四日ヲ以テ歿ス

ス 年二十一

柳田藤左衛門安則 戦兵

正月六日八幡ニ戦死 年二十五

小銃第五隊

岩山佐平太直義 戦兵

正月四日鳥羽ニ戦死 年二十三

椎原小彌太國寧 監軍

正月五日鳥羽街道ニ戦死 年二十九

小銃第六隊

肥後嘉二盛徳 戦兵

正月四日鳥羽街道ニ戦死 年二十

野村清兵衛盛英 戦兵

正月四日鳥羽街道ニ戦死 年二十一

市來勘兵衛政正 隊長

正月五日鳥羽街道富之森ノ苦戦ニ死ス 年三十

前谷宗智惟則 戦兵

正月四日鳥羽街道之戦ニ重創ヲ被リ夜歿ス 年十九

平田喜右衛門正次 戦兵

正月四日鳥羽ノ戦ニ重創ヲ被リ、十七日ヲ以テ歿ス

年二十二

小銃第八隊

鎌田尚圓政厚 戦兵

正月六日八幡ニ戦死 年十九

小銃第九隊

阿多孫二郎實輝 戦兵

正月六日八幡ノ戦ニ創ヲ被リ、二十六日ヲ以テ歿ス

年十七

赤井清心直正 戦兵

正月六日八幡ノ戦ニ死ス 年二十一

小銃第十二隊

伊集院與市兼豊 隊長

正月五日淀堤ノ戦ニ死ス 年三十七

平川助左衛門常行 小頭

正月五日淀堤ノ戦ニ死ス 年二十六

遊撃第一隊

溝口雄四郎俊粹 戦兵

正月四日鳥羽街道ニ戦死 年二十

關十郎左衛門長信 戦兵

正月四日鳥羽街道ニ戦死 年二十一

堀添清左衛門篤行 戦兵

正月四日伏見之戦ニ創ヲ被リ、三月二日ヲ以テ死ス
年二十七

遊撃第二隊

田中直次郎守時 戦兵

正月六日於八幡戦死 年二十五

遊撃第三隊

橋口彦四郎兼隆 戦兵

正月四日鳥羽ニ戦死 年三十五

大河平壮之助隆近 戦兵

正月五日淀川堤ニ戦死 年二十一

豎山卯一郎利意 戦兵

正月淀川堤ニ戦ヒ、重創ヲ被リ、六日ヲ以テ死ス
年十九

毛利強兵衛元景 本府士監軍

正月四日下鳥羽ノ戦ニ創ヲ被リ、二月十四日ヲ以テ
歿ス 年三十四

中原八郎景全 高岡士戦兵

正月三日夜竹田街道ニ戦死 年三十

入田新左衛門親賀 高岡士戦兵

正月三日鳥羽街道ノ戦ニ創ヲ被リ、三月三日ヲ以テ

歿ス 年二十二

外城第二隊

鮫島十郎兵衛宗弼 加世田士戦兵

正月四日鳥羽街道ニ戦死 年三十九

坂本仲右衛門安容 伊作士戦兵

正月五日淀小橋ノ戦ニ創ヲ被リ、三月十二日ヲ以テ
歿ス 年二十六

外城第四隊

平原平八郎定正 出水士戦兵

正月三日伏見ノ戦ニ重創ヲ被リ、二十六日ヲ以テ歿
ス 年三十二

松木嘉右衛門重秀 出水士戦兵

正月三日伏見ノ戦ニ重創ヲ被リ、二月朔日ヲ以テ歿
ス 年二十八

兵具第二隊

篠崎勘七知明 戦兵

正月三日竹田街道ニ戦死 年三十

藤崎甚四郎敬直 戦兵

正月四日鳥羽ニ戦死 年二十五

竹下平左衛門種氏 戦兵

正月四日鳥羽之戦ニ重創ヲ被リ、十一日ヲ以テ歿ス
年二十三

上村戸右衛門清香 戦兵

正月五日鳥羽ノ戦ニ創ヲ被リ、十日ヲ以テ歿ス
年

二十

濱田才之丞義秀 伍長

正月六日橋本ニ戦死 年二十六

江口幸右衛門盛吉 戦兵

正月六日於橋本戦死 年二十三

肥田雄太郎景直 小頭

正月五日淀堤ニ戦死 年二十六

私領第二隊

村尾十次郎将直 島津右門家臣

正月五日淀堤ノ戦ニ創ヲ被リ、十三日夜歿ス 年二十

有川嘉吉郎貞直 喜入多門家臣

正月五日淀堤ニ戦死 年二十二

夫卒

太郎 伊集院野田村農夫、大砲第一隊石神万右衛門従

卒

正月五日淀ニ戦死 年十五

休八 小銃第二隊ノ夫卒

伏見ノ戦ニ從ヒ死ス、月日詳ナラス

月野徳次郎 中村源五從卒、実ハ中村八郎左衛門家臣

ナリ

正月三日伏見之戦ニ死ス 年三十一

三五郎 外城四番隊夫卒、出水下知識村農民

正月戦争後大坂城中ニ火起焼死

五二三 藩庁軍務局常備隊射撃練習ニ付火薬交附

ノ手続ヲ示ス

一月四日

藩庁軍務局ニテハ、常備隊射撃練習ニ付、火薬交附ノ手
続ヲ示ス、

一常備隊兵士一人ニ付三十発ツ、

但一ヶ月ニ三度調練として、一度に発數十発づゝ、

巷発一匁式分入、

右之通、諸郷調練として、当年中一同平等に火薬無代
銀にて御渡相成る可く候、各々其郷々より兵隊人員に
積て、御定め之發数火薬局より可相受取候事、

但兵隊人員之見積書いたし、軍局へさし出候はゞ、
受取方首尾致す可く候事、

但半年分又ハ三四ヶ月づゝにても相まとめ、受取方
申出候も不苦候、

右ハ当年中無親疎平等調練用被成下候得共、来る未之
年よりハ、所ニ於て、各々硝石増産候手入等不行届之
処ハ、一切火薬不被成下候筈、左候て此迄一ヶ月ニ忒
拾ツ、申受仰付られ候得共、此節より差止め候、

一常備小銃隊百三拾壹小隊と三分隊

人数壹万式千六拾七人

内

御城下四大隊

人数千五百三拾六人、一小隊ハ四十八人ツ、

砲座 四座

一座七拾三人ツ、

楽隊 百八人

一大隊に忒拾六人ツ、

打手人数

遊軍

学館兵士

五百七拾九人
百忒拾九人
四百 百人

兵器隊

總裁

大隊長

教頭

教佐

調役

旗隊

指南役

調役初

筆者

医師

台場七ヶ所

大砲

小銃

大砲

諸郷小銃隊九拾一小隊と三分隊

人数四千四百人

砲座 三座

忒百拾九人

台場忒ヶ所

五百五拾三人

一人

七人

九人

五人

拾一人

式拾七人

参拾八人

式拾八人

拾五人

拾式人

五拾九門

壹万千八百四拾一挺

百七拾七挺

櫻島

大砲 式拾四挺

三挺

山川

諸郷調役初 百八拾四人

【参照】

寺師宗道日記

正月四日 雨天

^{略上}軍務局江出候、調役所江參候処、此節諸郷硝石産取扱ニ付、常備隊兵士老入前三拾発、月々三度分、老度拾発賦ニて、老発菓一匁二分入付候割ニて、無代銀御城下同様御渡付相成候賦、右は当年中平等ニ被成下候て、来未年よりは其所々ニおひて、硝石手入等不行届之所は、火薬不被下候筋布告ニ相成候旨承候 下略九

正月五日

^{略上}加世田之者、硝石製造方之儀願書持參候、四ツ時分より打立、谷山作硝局へ差越候、町田甚助・西俣清八一緒ニ参会、種々硝石一条評議候、当所^{山谷}飯屋地頭阿多源七方へ明日出会いたし候掛合遣置也、

正月六日 雨天

四ツ時分より町田氏・西俣氏同道、飯屋へさし越候て地頭阿多氏並ニ副役黒田彦左衛門外、所長官共へ出会、此節諸郷作硝之一件細状申談候、尤先達布告之形行猶細事申置候也、

五二四 外務省在京勅任官人名問合ニ対シ外務省

回答

正月五日

外務省在京勅任官人名問合ニ対シ外務省回答、
五二四ノ一 午正月五日

外務省

弁官

御中

其省当時東京勅任官以上之人名、明後七日中ニ御差出可有之候也、

庚午正月五日

五二四ノ一 午正月五日

弁官

外務省

御中

澤 (宣喜)
外務卿

寺島 (宗則)
外務大輔

町田 (久成)
外務大丞

右之通、在東京勅任官員に御座候、此段御届申上候也、

庚午正月五日

五二五 岩倉具視賜邸ニ於テ祝宴ヲ開ク

一月六日

岩倉具視 大納言 日比谷門外ノ賜邸ニ於テ藤井九成等外數十

人ヲ会シ祝宴ヲ開ク、

正月六日、具視、日比谷門外ノ賜邸ニ於テ、香川敬三・

大橋慎・山中獻・北島秀朝・松尾相永・藤井九成・柴

田昌長等數十人ヲ会シ、賜宴ヲ開キ酒間文ヲ賦

シ、詩ヲ詠シ、慎ニ命シテ之ヲ書セシム、其辞ニ曰ク、

予毎遇天与之休暇、必追思往事、有所以深感者

焉、至其所以深感者、蓋非旧同盟之人則豈得

能審之哉、予曾蒙譴幽居於京北山村、方此時朝

威委靡不振、幕吏跋扈、唱義之士、或墮命於白刃、

或呻唵於囹圄、朝野洵然、予不幸負奸名於天下、以

故忠邪不共容予也、雖然予報國微志、未嘗少屈

撓、焦思苦慮、欲画回天之策、以獻帝闈焉、無

復一人顧予者矣、無奈之何而已、乙丑之歲松尾

(相)藤井(成)二子、偶然造予門、統旧盟、因幸

獲言予志、藤井子乃拉香川(敬)子而至、香川子

一見如旧相識、痛論時事、後經數日、香川子又拉

大橋(慎)子而至、与俱吐露肺腑、談論通宵、自是

陸續而來者、山中(獻)宇田(勳)三宮(義)樹下(茂)田中

(光)北島(朝)藤村(榮)坂木(枝)城多(重)原(保)海

部(六)諸子也、幕吏注視、不得避嫌、諸子往

々叩柴田(長)子廬、以求見予也、柴田子周旋之勞、

豈亦其小哉、丙寅丁卯之交、与井上(秋)中岡(慎)

坂本(龜)三子、計議時務、弥益有所籌画焉、且屢

会晤玉松(龜)先生与久久保(通)西郷(隆)木戸(孝)

廣澤(真)黒田(隆)品川(弥)六子、相共謀議、終得

贊襄復古之鴻圖、而遭遇千載未曾有之盛時、予之僥

倖、亦何其甚也、朝廷論復古贊襄之功、以予列頭

等恩詔優渥、賜賞秩、予不堪感激也、亦不

堪慚愧也、予固不学無識、於復古之大業、何功之

有矣、假諸子之智、從諸子之教、惟以赤誠奉公而

已矣、若夫以予為有功於復古之大業乎、曰松尾・藤井二子功、不亦可乎、將又曰諸子之功、不亦可乎、予幽居於京北山村、年既久矣、心自与世疎、聽香川子之說、始審國內之情態、聽大橋・北島・坂木・中岡・坂本五子之說、始審海外之形勢、蓋獲見香川子、則松尾・藤井二子之惠也、獲見大橋・山中・宇田・田中・北島諸子、則香川子之惠也、獲見中岡・坂本二子、則大橋子之惠也、通好於條公、結交於西鄉・木戸・廣澤・黒田・品川五子、則中岡・坂本二子之惠也、師事玉松先生、則三宮・樹下二子之惠也、然而統旧好於大久保・井上二子、則亦香川・大橋二子之惠也、嗚呼悉皆舉此、曰松尾・藤井二子之惠也、不亦可乎、苟自非得此階梯、何能得有今日乎、是予每遇天与之休暇、所以深感者也、今茲庚午之歲、正月六日、幸遇天与之休暇、會諸子於東京日比谷門外賜邸、開小宴以慰諸子往年助予之勞、賦詩以謝之、夫近者易親、遠者易疎、以窮達變其志、古今之通患、豈可不微慎乎、吾旧同盟諸子、皆純忠之士、固非以窮達變其志者也、予亦固非挾富貴以遇諸子

者也、惟願予与諸子、為尔汝之交、永如旧日、尔今也、大政維新、綱紀未全振張、內有百難橫、陳於前、外有列強窺、竄於後、請諸子勿忘往年之艱苦、宜仍再嘗之矣、抑輔佐聖明、正名分、一寬一嚴以臨五畿八道、則固易制焉、海外諸邦万里隔絕、猶如比隣也、是尤難制焉、雖然我不能制彼、則彼欲制我必然之勢也、今我欲制彼、則嘗艱苦十倍于往年、猶知其不容易矣、伝曰、國家間暇、榮業怠傲、是自求菑、又曰、勿恃彼不來、可恃我有待、今者誠其時也、驕奢安逸、忘百年之大患、則非予所知也、諸子夫勉哉、冀勿棄予、

謝松尾留雲・藤井九成二子

曾繫北山真可哀、幾年無復一人來、
謝君厚意過吾屋、為晤群賢好作媒

謝旧同盟諸子

北山松靄屋冥濛、一片丹心夢裡通
長記乾坤旋轉業、群賢有計我無功

似諸子

王業堂々期大成、鐘簾只合掣長鯨
請看英吉亦孤島、能使雄名寰宇轟

而シテ具視ハ、鍛工固山宗次ニ命シ、短刀ヲ作ラシメ、

各一口ヲ玉松真弘・敬三・慎・相永・九成・昌長・獻・

秀朝・宇田淵・田中光顯・三宮義胤・樹下茂國・坂木

下枝・原保太郎・海部閑六・藤村紫朗・城多董・山本

直成・大橋黙仙・田中采女等、旧同盟ノ士二十余人ニ

贈リ、又祭糝料ヲ其死亡者井上長秋・坂本龍馬・中岡

慎太郎・曲直瀬享徳院・六人部雅楽・川喜多真彦・小

野昇造・松岡大膳・芝坊澄昇等、十余人ノ遺族ニ贈ル

ト云フ、

一兼任京都府権知事、

略○下

五二七 堀基ヲ正六位ニ叙ス

一月八日

堀基清之丞ヲ正六位ニ叙ス、

鹿兒島県士族

堀基

清之丞

五二六 留守次官岩下方平ニ京都府権知事ヲ兼ネ

シム

一月八日

留守次官岩下方平左次右衛門ヲシテ、京都府権知事ヲ兼ネシム、

略○上 留守次官岩下方平ニ京都府権知事ヲ兼シム、

鹿兒島県士族

岩下方平

○中略

同月明治二年七月

一御用掛申付候事、

開拓使

同年八月

一任大主典、

全上

同年九月

一御用有之、南上申付候事、

全上

同年十一月廿日

一任開拓権判官、

同三年庚午正月八日

略○中

同三年明治三年庚午正月八日全廿六日受

一叙正六位、

○以下略ス、

ヲ問ハス、各其生業ヲ授ケシム、
五元ノ一
正月九日

御布告写

五二八 外務大輔寺島宗則横濱表へ応接トシテ出

立ノ届

正月八日

外務大輔寺島宗則應横濱表へ応接トシテ出立ノ届、

午正月八日

弁官

外務卿

御中

明九日第八字、澤外務卿・寺島外務大輔、横濱表へ為

「応接出立有之候間、此段御届申上候、以上、

庚午正月八日

五元ノ一
正月九日

御沙汰書

東京府

五二九 朝廷府藩県ニ令シ逃籍復帰ノ者旧罪ヲ問

ハス各其生業ヲ授ケシム

一月九日

朝廷ニテハ、申ネテ府藩県ニ令シ、逃籍復帰ノ者、旧罪

先年来旧籍ヲ脱シ、諸方流浪罷在候者共ニ付テハ、厚
キ 思食被為在、其旧国ニ於テ、大逆無道ヲ除クノ外、
御一新更始之御政体ヲ体認シ、旧惡ヲ不糺夫々復籍、
生活之道無差支様可取計旨、毎度被 仰出有之候処、
間ニハ 御趣意ニ違ヒ、苛察之処置致候向モ有之哉ニ
相聞へ、左候テハ 御趣意モ難被行候条、府藩県ニ於
テ、尚又篤ト相弁へ、復籍人被引渡候節ハ、前罪ヲ不
糺、早々旧籍へ引取、生計相立候様可取計旨、更ニ被
仰出候事、
五元ノ一
正月九日

脱籍無産之者共、復籍之儀ニ付毎度被 仰出モ有之、

今般尚又別紙之通、各府藩県へ被 仰出候間、其府ニ

於テ、当時復籍方専ラ取計罷在候得共、右復籍人引渡

候節、其向々へ 御趣意之次第、懇切可申聞旨 御沙

汰候事、

五三〇 藩内火薬増殖法ヲ究メ各郷作硝教示ノ為
作硝局吏員ヲ派シ巡回指導セシム

一月十二日

藩内火薬増殖法ヲ究メ、各郷作硝教示ノ為メ、作硝局吏員ヲ派シ、巡回指導セシム、
五三〇ノ一

諸郷硝石増産之立目左之通

一硝石増行之^(Tak)体ハ易管之法ニ基キ、每郷無親粗調理製煉相成リ、製テ為積之本則、

一於郷々増産作業之事ハ、所土族ヲ始メ、百姓・浦町・中宿者ニ至迄、協合戮力ヲ以テ、惣テ御国役タルヘシ、

本文木炭・薪之義ハ、竈戸毎ニ無親粗為国役、銘々

為差出可然候、

一人家床下土又ハ作土採製ニ付テハ、時々厚薄之可否検査ヲ以テ相定ベシ、

一此硝土採製スルニハ、釜鍋等ハ、局御立合丈ケ之借シ渡相成リ、当用致弁達候様、桶類ハ於其処可調事、

一並硝石調製之上ハ、都テ是ヲ売上イタシ、所兵隊人別

ニ割付ヲ以テ、火薬代錢申受ケ被仰付、左候テ硝石代料之義ハ、會計方ヨリ速ニ代錢払渡相成候様、

但直組之事ハ、時処々造作費用之多少ヲ以テ、時々

之相場ニモ相基キ、或ハ品之精粗ニ依テ、是亦時

々増減アルヘシ、

一御買入之義ニ付、迢々出産売上之上ハ、時々無遲滯代

料御払渡之御規定、永続專要之事、

一発起之趣法ハ地頭等へ熟談、其所之便ニ就テ処置アル

ヘシ、尤手初メ之順序ハ、惣テ每郷人家土持入之策ヲ

用ヒ、勿論床下土成熟之処ハ、直ニ製煉ヲ為シ、又序

ニ郷々作土調理之策ハ、往年之為メ不可闕訳、右ニ付

丘廠又ハ寤仕込之場所等ハ、地頭篤ト取調べ置キ、以

後手都合ヲ以テ取建之事、

沿海筋温暖之地ヨリ創業候事、

一每郷麓ヲ始惣人戸ヲ取調、每家土持入之上、其家々之

坪作リヲ以テ、一郷ツ、括リ相立置キ、又作土之事ハ、

土之仕込高ヲ以テ盛熟産出之量ヲ料ルナリ、喩へハ地

方ニ畦反坪ニ付、帳アルカ如シ、往年産出之算途目科

之基本也、

但近在ハ都テ床下土持入之事、

本文每家土持人之義銘々自分調可然事、

一 柳木之事ハ、自今用途年分之賦凡三万束之賦ナリ、

伐方之時季正月 二月

納メ方四月中ニ限ルベシ

右之員數、既ニ來春ヨリ於郷々伐調皮剝キ之上、半枯

ヲ以テ上納相成候様、

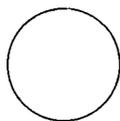
把三尺廻

把之員數、高二本キ、於民事局郷々之割付是出シ、

麻稗之振合ニ準シ、尤未発之事故、為念每郷遠近無

差別殖増方相成候様、

右之通此節郷々硝石増産予定之概目ニ御座候事、



廻り五寸ヨリ壹寸五分位迄

長サ壹尺位ヨリ式尺五寸三尺迄

五三〇ノ二 人戸取調書之案文

一人戸何千何百何拾軒

隱居家並板蔵床有之家々ハ可相加候、

内

麓 何軒

町 何軒

浦 何軒

百姓家何軒

〃中宿込ル

〃方限分ヲ以テ區別ス

右坪數何千何百何拾坪

右我々共廻勤前以テ取調シケ条也、不日廻勤之上、床

下土検査、硝土含釀之場所ハ速ニ採製有之、薄硝之処

ハ是亦速ニ土持入方取計有之度候、就テハ土持入取付

初メ入レ仕舞候月ヨリ、何月何日ヨリ何月何日迄之分、

本文合坪數、腰書へ書載可承候事、

一 丘廠何百何拾軒

窖何拾何程

右土石數何百何拾何石

右ハ硝石増産之根元ニ付、処中以尽力^(力ヲ) 取建之程、就

テハ先度御布告、一家毎二三坪程之草覆廠御仕立築込

ニ相成候様、被仰渡置候得共、未発之事故、一挙ニ取

建立、能相調ハ勿論ニ付、地頭・副役等見込ヲ以テ、

所中衆議ヲ遂ケ、当春何拾何所程創建致決議、右丘廠

間数ニ随ヒ、地面取調置候様、其上我々共廻勤之上、
現地等篤ト見分、

右ニ付、仕込土之石数記シ置、何月何日ヨリ何月何日
迄築仕舞候訳、本合石数相記、時々届承候事、

【参照】

寺師宗道日記

正月十一日 晴

略今日ハツ過時分より、英医ウルユス並藤田圭甫・石
神良策・有馬意運・足立慎吾眞良、外ニ生産奉行副役新
納彌大右衛門参局候、外随従数人あり、硝石一切取し
らべいたし候、余程結構出来之由挨拶也、通弁林仙三
也、軍務局より調役橋口武右衛門・曾山嘉七・野崎善
之丞参局候、

正月十二日 雨後曇

今日町田甚助・西侯清八去ル五日より御立候処、硝石
増産方廻初トシテ四ツ時分より打立、出張相成候、

一川柳

但程廻り五寸位より一寸五分位迄

長さ三尺位より一尺位迄

伐調方 正月 二月

納方 四月限

右ハ木炭用として、先度殖増方等之儀被仰渡置、追々
植付相成候得共、未だ兩三年位にてハ、木炭用に至り
兼ね候ニ付、本行廻尺に相成候迄ハ、其処に於て山野
生之川柳を以て伐調方いたし、皮蒸剥之上、半枯を以
て火薬局に相納め候様、最も年々殖増事等之儀ハ、先
度より被仰渡置候通、聊も心得違有之間敷、勿論此節
兵器奉行見習之内より、硝石一条為教示方廻勤いたし
候ニ付、右も引合、万事取扱可致候、此段申達候、以上、

正月十三日申之刻

軍務局

鹿児島郡

吉田 蒲生

山田 重富

帖佐 加治木

溝邊 横川

栗野 吉松

眞幸 加久藤

飯野 須木

小林 高原

高崎 野尻

綾 穆佐

高岡 高城

山之口 勝岡

上荘内 下荘内

梶山 財部

福山 敷根

國府 清水

襲山 踊

倉岡

小隊長中

半隊長中

分隊長中

旧役人中

尚同一ノ達文ヲ以テ、余ノ各郷村ヘモ達スルニ至レ
リト云フ、

五三一 朝廷旧本丸跡ニ於テ軍神祭ヲ行フ

一月十七日

朝廷ニテハ、旧本丸跡ニ於テ軍神祭ヲ行フ、

五三十一ノ一
〔第三十〕正月十三日(布)(太政官)

来十七日、本丸ニ於テ軍神御祭り、祝砲有之二付、為
心得相達候事、

〔第三十一〕正月十三日(布)(太政官)

来十七日、本丸ニ於テ、軍神御祭ニ付、十六日酉ノ刻
ヨリ入御迄御神事候事、

但重軽服者並僧尼ノ輩參 朝可憚事、

〔第三十二〕正月十三日(太政官)

来十七日、御神祭兵隊祝砲天覧ノ節、兵部省ハ軽便ノ
服可用、其余ハ直垂着用可致事、

但雨天候ハ、御順延ノ事、

〔第三十四〕正月十五日

来十七日御神事ニ付、重軽服ノ者可憚様御布告ニ相成
居候処、右軍神御祭式ニ付、御神事被差止候ニ付、憚
ニ不及候、此段更ニ被仰出候事、

五三十一ノ二

正月十七日 天皇旧本丸趾ニ幸シ、軍神ヲ祭り練兵ヲ
覧ル、公三条三実三徳三從三ス、

此日祭式左ノ如シ、

酉刻神座御裝束奉仕

次神祇官兵部大少丞着座

次神祇伯奏神降詞

神降詞

掛卷母 恐支 天津神国津神大物主神武甕槌神布都

主神此神離尔 降利 座止 恐美 恐母 白須

奏楽

次供神饌

奏楽

次号砲二発、兵部省官員並兵隊列陣

次号砲三発

出御

次右大臣奏祝詞

祝詞

天津神国津神諸又大物主神武甕槌神布都主神乎

此神離尔 招支 齋奉 恐美 白止 左久 白須 今安国

止定奉利 大支 勲乎 立志 事波 専 皇神等乃 恩頼 尔

因留事止 恐美 敬比 思保須 故尔 年始乃 軍人 賀事始

尔礼代止 進留 大幣帛又御弓御太刀御楯銃砲乎置

並 御酒波 甕上高知甕腹滿並津山野乃物波 甘菜

辛菜青海原乃物波 波多乃 広物波多乃 狭物奥津藻

菜 辺津藻 菜 尔 至 尔 雜物乎 置足 波志 神祇官兵部

乃人々乎 初 百千乃 御軍士乎 弥集 集 齋祭 留

事乎 高々 尔 見行 皇我 朝廷乎 始 天下乃 押乃 御

城島乃 埼々 守 留 伴緒大御稜威乎 海外 尔 輝 年 月

尔 弥益 尔 建 久 雄 志 古 風 尔 復 事 乎 皇神等神

議々 給 如此仕奉 留 軍乃 伴乎 弥進 進 米 勤 尔

勤 米 志 給 止 称 辞 竟 奉 乎 良 久 甘 良 尔 甘 良 尔 聞 食 止 宣

留

次御拝

次兵部卿拜礼久我兵部少輔代勤

次兵式

次入御

次撤神饌

奏楽

次神祇伯奏神昇詞

掛卷母 恐支 天津神国津神大物主神武甕槌神布都

主神本乃 御座 尔 帰利 座止 恐美 恐母 白須

奏楽

次各退出

五三二ノ三

正月十七日甲申

本丸ニ於テ軍神御祭、練兵 天覽アリ、

五三二ノ四

明十四日神祇官江行 幸ニ付、本丸跡芝新錢座越中島

等発砲差止候条、仍申達候、以上、

正月十三日

兵部省

鹿兒島藩

右之通申達相成候間、各御承知可被成候、尤留ヨリ返

納可給候、以上、

正月十三日

当番

五三二ノ五

一明十七日

天覽ニ付ては、各隊左之通相心得候、

一各隊江渡付置候帽子ハ勿論、定之戎服共、明后一同可

被相用候、

一当日各隊祝砲打方之式拜見いたし度面々ハ、おのづか

ら心得も可有之候得共、隊列を不紊、小隊順序ニ調練

所へ罷出、一統折敷、猥りケ間敷儀無之様、差廻御用

等之節ハ、調練場外江出可致、右致布告候、已上、

正月十六日

本営

五三三 藩庁当今簡易輕便ノ極、旧格ノ良風ヲ廢

スル如キ浮薄遊惰ノ弊ヲ諭ス

一月十三日

藩内一般簡易輕便ノ極延ヒテハ、旧格ヲモ廢スルノ傾ア
ルニ因リ、浮薄遊惰ノ弊ニ陥ラサルコトヲ諭ス、

口代

從四位權侍長ニ候指宿市助

一今朝 御前江被為召候付、罷出候処、篤と

御趣意之程御申達ニて、奉承知候、御沙汰左之通、

易簡輕便を行ふハ一段之儀なから、過ては自由之姿ニ

立至り候間、其間能々弁別不致候て不相濟儀と存候、

右ニ付、容貌沙汰之儀、二ノ丸様江御談合申、先日申

達置候通ニて、何れも承知之筈、就ては旧格も不改候

て不叶儀を改革、美事は其取用候様可致候、配膳等

之儀も全廢候ては成間敷候間、隙之砌は右之稽古或は

読書等いたし、碁将碁等之翫ひ等は外聞も不宜候間、

相慎候様可致候、且朝夕御膳上下等之次第、些少之儀

なから、先年之通形を合候様、万事可成は以前ニ立戻

り候様と之 思召候段、承知仕候事、

明治3年(1870)

右之通奉承知候間、

御沙汰之趣篤と奉承知候、此内より一体世体一騒よりして、自然軽便を用ひ候処よりケ様之姿ニ立至り、誠以恐入次第二御座候、就ては、

御趣意之程篤と一統江伝達仕、速ニ其印相頭候様可仕候間、乍此上

御氣ニ被為付候儀御座候砌は、時々奉願候段申上置候事、

明治三年

午正月十三日

五三三 大久保利通・黒田清隆毛利廣封ニ薩・長二老公相提携シ叡旨ニ副ハレンコトヲ陳ス

一月十五日

大久保利通藏一・黒田清隆介ト山口ニ来ル、俱ニ毛利廣封

山主ヲ見テ、薩・長二老公ト提携シテ叡旨ニ副ハレンコトヲ陳ス、

五三三ノ一

略

正月十三日、公三ノ使者森寺常德ヲ訪ヒ、藩情紜紛

使命為メニ後ル、コトヲ、公ニ具陳センコトヲ囑ス、

時ニ大久保利通黒田清隆ト山口ニ来ル、十五日、俱ニ廣封ヲ見テ、薩・長二老公相提携シテ 叡旨ニ副ハレンコトヲ陳ス、廣封藩内鎮静ノ後ヲ期シ、東上スルヲ約ス、翌日利通等去テ鹿兒島ニ赴ク略

五三三ノ二

大久保利通日記

略

○正月九日

今日八字乗船、雄飛丸乗船、四字比出帆、兵庫へ着港、今夜淀泊、

十日

十字開帆、

十一日

二字比三田尻へ着港上陸、楢取(素彦)へ立寄当所一泊、

十二日

今朝楢取子入来、十字比ヨリ発途、山口へ四字着、湯田村へ旅宿、今夕木戸子・寺内子入来、諸生中入来、

十三日

木戸子入来、平田・横山○正・悦公子○島津悦之助等入来、
欠封

十四日

志摩氏入来、木戸子入来、当所有温泉入浴、今夕訪木戸子、須木○孫・野村○子等同会、木戸子宅鴻嶺之本ニ新築、眺望最宜、山水ノ風景閑雅頗逸興也、入夜月色暗淡上梅樹、以賦一詩呈主人、

風流本自属君堂 名嶺入窓水繞廊

誰識幽情此裏味 老梅花上月明香

十五日

昼后於客館 知事（長州侯）公御逢、黒田同道參、且種々御示談有之、酒肴且縮緬三反・懸物一軸元信被下候、木戸・柏村子等侍座、

十六日

木戸子・寺内子・佐久間子等入来、諸生一同入来、十二時過發途、四字三田尻着、訪楫取子、一乗船十二字比解纜○下

五三三ノ三

略

正月十八日、公○三条山口藩兵隊内証ノ事ヲ聞キ、家臣森寺常德ヲ遣シ、毛利氏ヲ訪問セシム、

是ヨリ先、山口藩兵制ヲ改革ス、解隊兵服セス、嘯

聚シテ将ニ乱ヲ作サントス、公之ヲ聞キ、森寺常德

ヲ遣シ、九州諸藩ノ動静ヲ視察シ、毛利氏ヲ訪ハシ

ム、常德薩州ニ往キ、肥後ヲ經、筑前ヲ過キ山口ニ

至リ、公ノ手書ヲ毛利氏ニ致ス、十三日木戸孝允常

徳ヲ湯田逆旅ニ来リ訪ヒ、諸方ノ風説及薩藩ノ国情

ヲ問フ、此日毛利廣封常德ヲ客館ニ延見シ、復書ヲ

呈シ、宴ヲ設テ之ヲ饗ス○下

五三三ノ四

略

○上 十三日○正 右大臣三條實美ノ使臣森寺邦之助○常徳薩摩

ニ抵リ、肥後・筑前ヲ過ギテ山口ニ来リ、右府ノ書ヲ

公ニ致ス之ヲ復書今、木戸孝允之ヲ客舎ニ訪ヒ、具サニ

刻下ノ藩情ヲ告ケ、鹿兒島其他諸藩ノ現情ヲ聞ク、十

八日公客館ニ延見シ、饗ヲ設ケテ遠来ノ勞ヲ謝シ、且

ツ右府ヘノ復書ヲ託シ、藩内事情ノ為メ、老公東上ノ

猶予ヲモ請ヘリ、邦之助乃チ帰東ス、是レヨリ先キ十

五日、大久保利通黒田清隆ト共ニ予約ヲ踐ミ山口ニ来

ル、公客館ニ延見シテ饗応シ、且ツ物ヲ贈ル、木戸孝

允亦其席ニ陪ス、
略

木戸日記ニ、公大久保等ト会见ノ状況左ノ如ク見ユ、十五日 晴 登館拜謁、今日大久保・黒田ヲ客館ニ御招御対顔アリ、十二字過客館ニ至ル、弟モ御席ニ出、暫御閑談、酒飯御食アリ、君上薩州へ御出ノ一条、老君上東京御登之一条等、御国内稍一定之上被為期御答被為遊、十六日大久保・黒田ヲ訪ヒ、昨日之御主意ヲ尚重陳シ、今日両氏ノ帰ルヲ送ル云々、

五三ノ五

略上十六日 月○正、三田尻を出帆シテ帰藩の途に就けり、

此日利通が在京の吉井に贈りし書あり、曰く、

尚々黒田御暇五十日ニて候処、本文次第ニ付てハ延

引可致候付、御願置可被下候、来月七日比迄に日数

相延申候、

弥御安祥被成御奉務、奉敬賀候、從兵庫一封一封ヲ以

申上候通、去ル十一日解纜、同十二日当所江着候処、

兼て風説承候諸隊動揺之事、意外ニ大破之次第にて、

木戸初別て心配中にて、何分不容易趣ニ被察候間、全

体一兩日にて神速引取候含ニ候得共、凡相静り候迄ハ

滞在と相決シ、今日迄延引致候義に御座候、隊中二手

に分れ、司令官以上ハ引離レ、兵卒而已千七八百人位

固結、其外隊外江も連及有之、司令官以上ヲ嚴罰ニ被処度、外ニか条も有之、兵力ヲ以相迫候形に御座候、去ル十三日 知事公より御直ニ断然御沙汰之趣も有之、先拜命之姿ニ被察候、今日迄無事にて打過候間、必ス破裂ニハ及申ましく、乍去若一步ヲ誤候得ハ、則瓦解ニ相違無御座、左候ては長一藩之事ニ無御座、実に天下之御一大事と致配慮候、しかし木戸など能折柄帰藩、精々尽力、目的も承候得ハ、差向平定ヲ主とし、しつかり本ヲ固メ、十分基則ヲ立付、其上徐々と手ヲ付ル之事御座候、只今破裂いたし候様之義有之てハ、甚失策にて、種々愚考も申入置候次第に御座候、○右次第にて、漸々昨日 知事公御逢ニ相成、兼て相含候一条も、今日之為体ニてハ真面目之論も難出来、最目前之大事不相定候ては、決て方向も立兼候事当然ニ候間、此節は先引取候考に御座候、旧臘 知事公(十二月忠義公帰藩の途次三田尻ニ過る)三田尻江御立寄之節は、当 知事公同所江御出張中にて、旁御直談も被為在、来月初旬ニ鹿兒島江御出之御約束有之由、然処如此行縣りにて、迎も来月初旬ニ弥御出之処六か鋪、少々ハ御延引可相成致、是非御出之御所存ニ候間、其内内

輪之事も大概為相連、且從二位公御上京彼是之事件目的被為決候て、御談合可有之と之御事ニ御座候、仍て小子帰東も延引可仕相考候、小子行処として意外之事而已相起、苦慮不少、御高察可被下候、乍去此行前件一事而已ニ目的之事情間、微力丈ハ励精可仕候、

正月十六日

大久保利通

吉井君

尚々凡事無異ならんと之見込相付候付、先引取申候、万々一又六か鋪相成候ハ、是非御国より何く迄も御助ケ無之ては不相濟事と存候間、委曲平田ナトへ相含メ、報知致候様申含置候、尤一人は御地江も報知いたし候様同断相含候、決て其処江及申ましく候へ共、万一之為念置候付、左様御含置可被下候、

〔大久保利通氏所蔵本にて校訂〕

五三四 調練ノ天覧アリ、大隊長川村純義・篠原國

幹褒詞ヲ受ケ兵士ニ酒肴料ヲ賜フ

一月十七日

旧本丸内ニ於テ調練ノ天覧アリ、大隊長川村純義与十郎・篠原國幹冬一郎ヲ召レ、親シク褒詞アリ、兵士一同へハ酒

肴料ヲ賜フ、

五三四ノ一

略

明治三庚午年一月十六日、又モ旧本城内ニ於テ觀覽アリ、当日ハ大降雪ニシテ、地ヲ埋堆スルコト尺余ニ逮フ、此ノ時大隊長ニハ川村與十郎今ノ海軍中將兼參議正四位ト篠原國幹鹿兒島暴動中賊魁ノ一人ナリ、練兵終レハ、

天皇陛下ハ兩大隊長ヲ御前近ク召サレ、親シク御褒詞アリ、一同ニハ酒肴料ヲ賞賜セラレ略

五三四ノ二

略

同月○正十七日

軍神ヲ祭ラレ兵隊祝砲ヲ放ツ、雪中出御、錦旗ヲ翻シ実ニ勇マシキ御式ナリ、

今朝雪一尺計モ積ム、衆人御式御延引ト心得居リシ

ニ、

朕ハ少シモ厭ハス、然レトモ兵隊ハ如何トノ詔アリ、実ニ難有事トモナリ、

略

五三五 貴島平八へ糺明総裁ヲ命ス

一月十八日

貴島平八へ札明総裁ヲ命ス、

一札明総裁

貴島平八

右ノ通被 仰付候条、向々へ可申渡候、

正月十八日

知政所

五三六 藩庁本坊泊手形所ヲ南方手形所ト改称ス

一月十八日

藩庁ニテハ、本坊泊手形所ヲ南方手形所ト改称ス、

一南方手形所

右は今般三ヶ郷合郷被仰付候付、本坊泊手形所之儀被

相改、右之通被召建、何篇是迄之仕向通被仰付候条、

地頭江申渡、可承向江も可申渡候、

明治三年正月十八日

知政所

五三七 藩庁藩内米価騰貴ニ付、本月限ニテ焼酎

ノ醸造ヲ禁止ス

一月十八日

藩庁ニテハ、藩内米価騰貴ニ付、本月限ニテ焼酎ノ醸造

ヲ禁止ス、

一御当地並諸郷々焼酎造入之儀、当三月限煎仕廻候様申

渡置候得共、米価日々騰貴、此上高料相成候ては下民

困苦可致候付、当分造入候分は当月限煎仕廻、其外ハ

一切造入候儀不相成候条、会計総裁へ申渡、可承向江

も可申渡候、

明治三年正月十八日

知政所

五三八 藩庁菱刈表七ヶ郷ヲ三ヶ郷ニ合縮シ、旧

大口手並旧本城手両蔵ノ名目ヲ改称ス

一月十八日

藩庁ニテハ、菱刈表七ヶ郷ヲ三ヶ郷ニ合縮シ、旧大口手

並旧本城手両御蔵ノ名目ヲ改称ス、

旧大口手御蔵

一牛山手

旧本城手

一太良手

右は菱刈表七ヶ郷之儀、此節三ヶ郷ニ被相置候付、右
兩御藏之儀、右之通名目被相替候条、地頭江申渡、向
々江も可申渡候、

明治三年正月十八日

知政所

五三九 藩庁琉球在番同檢事及筆者ノ官等・俸給

ヲ定メ從來ノ附役・用達ハ之ヲ廢ス

一月十八日

藩庁ニテハ、琉球在番同檢事及筆者ノ官等・俸給ヲ定メ、
從來ノ附役・用達ハ之ヲ廢ス、

一琉球在番

但四等官ニ準、

一俸祿八拾俵

右之通被相定、乗船当日より御賦銀壹日銀貳拾六匁、

地賄米同貳升八合八匁被成下、外ニ貳ヶ年一詰として

季祿銀五拾七貫目被成下候、

琉球詰

檢事

右御賦銀壹日銀拾壹匁、地賄米同貳升壹合六匁被成下、

外ニ前条同断季祿銀貳拾五貫目被成下候、

一琉球在番筆者

但十一等官ニ準、

一俸祿貳拾俵

右之通被相定、御賦銀壹日銀八匁ツ、地賄米同壹升
四合四匁被成下、外ニ前条同断季祿銀貳拾三貫目被成
下候、

附役

用達

右は是迄琉球詰被仰付來候得共、御吟味之訳有之、
右役名被廢候、

右之通被仰付候旨被 仰達候条、此旨在番へ申渡、可

承向々江も可申渡候、

明治三年正月十八日

知政所

五四〇 西郷隆盛參政ヲ辞シテ藩政ノ顧問トナリ

一世養俸百五十俵ヲ給セラル

一月十八日

西郷隆盛時之 參政ヲ辞シ、藩政ノ顧問トナリ、一世養俸

明治3年(1870)

百五十俵ヲ給セラル、

一養俵百五拾俵

西郷吉之助

右は辞職申出、難黙止願意被聞召通、無余儀被成御免候条、追々御用之節は御前江も被召出、御政事向相談等は承候様被仰付候、依之別段之御優待を以、右之通一世被下置候条向々江申渡、

御裏 其外様江申上、佐土原江為知、中山王御承知候様、裏役頭並佐土原飯屋守・琉球館聞役江可申渡候、

正月十八日

知政所

五四一 参議大久保利通鹿兒島ニ来リテ、聖意ヲ

公及西郷隆盛ニ達ス

一月十九日

参議大久保利通一鹿兒島ニ来リ、聖意ヲ公及ヒ西郷隆盛

吉之助ニ達ス、

大久保利通日記

十七日〇正

風雪、田之浦投錨、

十八日

十字開帆、

十九日

十二字鹿兒島着岸、直ニ御本丸・二ノ丸へ出殿、拜謁不致、

一今夕類中客来雜沓、

二十日

於二ノ丸中将公・知事公拜謁、東京形勢且愚意詳細言

上入候、

一桂氏〔久盛〕へ訪、黒田同道篤ト談合ス、今夕郡山老〔二介也〕・中井入

来、

廿一日

外出不致、客来多々有之、

廿二日

屋后伊地知正治へ訪、種々示談ニ及、今夕本田氏母公入来、

廿三日

橋口氏・黒田氏等入来、屋后菅廟・松原社墓参、訪得能子、今夕山口氏・税所等入来、

廿四日

二丸へ出殿、從二位(久光)公へ拜謁、尚又御上京ノ御趣意相伺、何分即今御容体ニテハ御六ヶ敷トノ趣ニテ、一通申上退キ候、

一桂氏へ訪候処、兎角此回ハ御上京ナクテハ、不被濟マシクトノ論ニテ、明日知政所ノ評議可有之トノ話ニテ、種々及示談候、

一今夕石原直子入来、

廿五日

二丸へ出殿拜謁、云々言上、御上京一条知政府所(御家老座ノ変称)へ御沙汰相伝候様承、則桂氏へ及達命候、
一今日ハ原良へ得能・皆吉・大山・帖佐・中井等相携参リ候、

一今夕桂氏入来ノ由申参、則帰宅、今日知政所評決ノ上、一応 知事公へ言上ノ処、 知事公御沙汰之趣ニ付、桂氏甚当惑ノ次第有之、為相談入来アリシ事件也、畢竟少々ノ行違ヨリ起リシコトニ候へ共、誠ニ大事ノ前小事ニテ、於拙モ苦心不一方候、及鶏鳴帰ラレ候也、

廿六日

今日出殿 知事公へ謁シ、昨夜桂氏へ御沙汰之コトニ付、内々思食相伺候処、別ニ御趣意不被為在候へ共、

云々トノ御事ニ候間、即今ノ形勢ヨリ利害得失、条理ヲ以反覆御議論申上候処、理ニ於テ御了解ノ御容子ニハ候へ共、今日ハ先ツ退キ候、

廿七日

黒田子入来、出殿知事公へ謁シ、昨日ノ形行尚勘考イタシ候処、実ニ前途ノ御大事、且即今ノ事モ万事不相運、誠ニ杞憂ニ堪ス候、乍去桂氏へ我ヨリ了解為致候様モ無之、甚込入候、如何可任ヤトノ大意ヲ以、詳細申上候処、見込御尋被為在候ニ付、今一応右衛門ヲ被召、御一言ノ行違ヲ解釈イタシ候様御沙汰被下、此上益感泣奮励仕候様、御説諭ノ外無之段申上候処、二丸公へ申上、御思食寄不被為在候ハ、其通可致トノコト候ニ付、則二丸へ参殿、形行ヲ以テ申上候処、御同意、又々知事公へ其趣申上、御決意ニ相成候間退キ候、一黒田子へ立寄候、今夕山田・皆吉・藤井・石原等入来、
一今日桂御召ノコトハ、樺山へ御沙汰ニテ御使参候、

廿八日

出殿、今日桂氏ヲ被召、御直ニ御説諭被為在候処、同人モ感銘ニテ、能都合安心イタシ候、

廿九日

今朝野津・中村・高島・貴島・黒田ノ諸子一会、軍局

云々ノコト遂示談候処、軍務局ノ論別テ公論ニテ、罪

ヲ臣下ニ帰シ奉謝ノ外無之トノコト也、午後桂家入来、

今日政府ノ論相決、御上京ノコト御進相成候処、中々

御許容不被為在、別テ六ヶ敷候由承ル、実ニ此事ノ成

否ニ依リ、前途ノ興敗ニ相懸候事故、誠ニ当惑之儀候、

一 今夕得能子・中井子入来、

上略

三日〇二

今朝橋口彦二子入来、昨日 二丸公へ云々ノコト申上、

弥 御上京御猶予御願之筋伺相成候段承候、黒田子へ

訪、同道桂氏へ参云々談、伊地知壯之丞へ訪ヒ帰、

四日

二丸へ出頭、 両公御揃ノ処へ拜謁、御快氣ニ被為向

候ハ、是非御受御上京ノコト尽理言上、御異論無之

候、今日横山正太郎・岸良眞二郎両士、神戸丸乗船ニ

テ、從長州報知之為帰藩、実ニ内輪大混動、大事ノ次

第二候、桂家へ参リ談合ス、出殿、人数為救応被差出

候筋治定、拙等モ木戸へ談合ノ次第モ有之、傍観イタ

シ信義不相立候ニ付、則踏込候処ニ決定イタシ候(久

光公親和記参看)

五日

二丸へ出殿拜謁、昨日御治定ニ付、見込申上候様トノ

コト故、黒田一同形行言上、知政所へ罷出、見込談合

イタシ候、

一 今日伊地知壯子・黒田子入来、

六日

今朝橋口與一郎子入来、長州へ人数差出ノコト、西郷

等一応御使者相勤候上下御治定ノ由承候、

一 今日郡山老・得能入来、石原氏同断、

七日

終日不出、皆吉五郎子入来、今夕中井子入来、黒田子

同断、

八日

同断、豎山郷之丞入来、燈明丸(佐多岬燈台建設)云々

ノコト也、

九日

今日昼后墓参、白濱氏へ相訪、

十日

久保八郎・中井等入来、

十一日

得能子就遊引同行、税所子へ訪、大山郷子(右衛門)モ入来、

十二日

中井子入来、

十三日

藤井氏・石原氏・山本子・備後公子・安藝公子同行来

臨、

十四日

得能子入来、野津子入来、備後殿一条相談承候、

十五日

野津子、備後殿・今和泉両公子入来、云々説得イタシ

候、今日黒田子へ参候、

十六日

昼后本田子へ訪候、

十七日

今日得能子入来、西郷士等(隆盛)帰藩ノ由承、昼后同伴同人

宅へ参候、長州事件モ先干戈モ治リ、諸隊降伏ニ及候

由、此先不容易被察候(函館鎮定凱旋ノ途浦賀ニ碇泊、東

京ニ入ラス直ニ帰国ス、此時朝廷西郷ヲ召シタルモ、聞カサ

ルカ如クニシテ去ル、事実速記録第 号ニ記スルカ如シ)

十八日

昨夜ヨリ中井子入来、今朝黒田氏入来、大山氏入来、

今夕山田・石原子入来、

十九日

今朝肥後藩ヨリ両士入来、二丸へ出殿拜謁、備後公子

一条言上、御勤考可被為在下ノ御事ニ候、御本丸へ出

殿イタス、

二十日

不敢外出、得能子・郡山老・野津七二子・高島子・黒

田子入来、

廿一日

晚景ヨリ得能子・桂氏へ訪ヒ、西郷子入来、

廿二日

二丸へ参殿拜謁、備後殿一条言上候得共、未御勤考付

カセラレスノ御事也、

一中井等同伴、原良別業へ参ル、

廿三日

今朝森子入来、

一今日神祭ニ改メ、御遷座イタシ候(当時藩内一般廢仏神

祭ニ革ムルノ際ナリキ)

一黒田・貴島・野津等暫時入来、今夕藤井子・石原氏等入来、

廿四日

今朝得能子等入来、同道二丸へ出殿、(忠義・久光)両公へ拜謁、(参席名)備後殿一条(仕官云々)ニ云々言上、追テ御返詞可被成トノ御事ニテ、子細相伺候得共、御沙汰無之候、且又世上流布ノ御作(暴政流行火ノ燃ルカ如シ云々)一条相伺候処、段々御激論ニ相成、十分御真意拝承イタシ候、畢竟門閥一条(存廢)等、且知藩事(御辞退)ノコト、迎モ是ニテ治リ相付候御見留無之御制度ノ処ニ、第一御不平(新政御不服)云々実ニ不堪愕然、小子愚存ノ次第ハ、不憚忌諱曲直ヲ明ニシ、名分ヲ正フシ及言上候、乍去不可言ノ御沙汰等有之(何等ノ言乎今知ルニ由ナシ)、不得已引退キ候、嗚呼今日ノコト何ノ因縁ナルヤ、不存寄コト也、熟思イタシ候ニ、イカ程御迫リ申上、忠言ヲ尽シ候テモ、只々云々ノ御迷詞而已ニテ、詮立候義無之、先ツ夫形召置候方却テ可然、最モ此上一体ノ処、迎モ激ニ出候コトハ決テ無之ト見込候間、退キ候ナリ、墓参等イタシ、桂氏へ参リ、同人丈ハ後日ノ為、内々形行及密話候、同人モ同意ナリ、西郷子へ立寄候、

今夕皆吉五郎子・藤井氏父子・石原子・中井子・海江田氏・おまつ殿入来ニテ及酌酩候、

五四二二

新春之御慶申上候、弥以御堅固被成御超歳、奉敬賀候、随テ小子無異、来ル八日出帆之筈御座候、御安慮可被下候、鶴丸ニも快方にて、此節東下いたし候付、何も御聞取可被下候、船便いかゝと相考候処、折柄御国船参居、右より帰り候筈にて、別テ仕合之至御座候、貴兄にも御咄之通、鶴丸参候上ハ、内田江も御相談被成、一応御帰藩被成候方可然、尚別紙ヲ以、内田江ハ申越候、乍去鶴丸之容子未全快ニハ不至由候間、いかゝと被案候、可成下り被成度奉待候、小子ニも何れ来月中ならてハ発足相調申ましく相考候、貴地も又々大火之由、氣之毒之次第御座候、旅宿之事よろしく御心添被下度御願申上候、此節ハ書状も不遣候付、折角火之用心致し、無用之人屹と不入付、盗ミノり等嚴重致候様、御申聞被下度、喜歳不字次などへも、御賢慮ヲ以御示シ置被下度、分テ御願申上候、川南も世間広ク付合之多キ者にて、小子罷在候内さへ始終出入多ク候間、留主中念遣ニ存候付、其段時々御懸声被下度、返ス〜

相願候、鶴丸より承候得ハ、貴兄邸も天寧寺之跡やら御申請相成候由、此度ハ御賢兄様江屹と御談可申上候付、左様御安心可被成候、先ハ右御願申上度、如此御座候、頓首、

正月六日

大久保利通

石原正右衛門様

尚々、別紙副島へノ書状無抛用向にて遣候間、旅宿へ慥ニ相届候様、御遣被下候様奉願候、

五四一／三
略

初め朝廷屢々島津久光・西郷隆盛の二人を召す、二人共に病を以て辞す、毛利敬親父子も亦其藩に在り、（前註）大久保各其藩ニ抵り、以テ藩主ノ入京ヲ促ス大久保利通以為、方今の勢薩長力を戮せ、心を協へ、大に尽す所あり、以て天下の唱と為にあらすんは、則大業將に不振に至らんとすと、因りて藩に帰り、二人を勸説せんと請ふ、是に至て、詔して利通に久光・隆盛を召さしめ、又木戸孝允をして、山口に至り敬親を召さしむ、三年正月利通鹿兒島に抵る、久光病猶未た癒へさるを以て、入朝の期を緩めんことを請ひ、隆盛も亦病を以て辞す、同三日復命す、利通の將に西下せ

んとするや、書を作つて意見を陳へ、題して妄議と云ふ、其略に曰く、幕府の季世勢焰猶熾なり、是時に方つて臂を奮ひ、以て其鋒に嬰るものは、吾藩に非すや、朝廷微弱、四方援少し、是時に方つて、義を唱へ以て其顛を扶くるものは、吾藩に非すや、初あらざるなし、克く終ある鮮し、前日の奮臂変して袖手傍觀となり、前日の唱義化して後を誹る言と為り、空論日を送り、民社の安危を膜外に置く、是豈臣子の分ならんや、夫れ政を為すは人に存す、時政の闕失罪其人に在つて、而して朝廷にあらず、今日の朝廷即前日の朝廷なり、前日之を扶け、今日之を棄つ、愚の未だ解せざる所なり、愚乃ち以為、前功を成すものは吾藩、後功を収むるものも亦吾藩、吾藩一たび手を下さば、四方景從し、時政の闕以て補ふへし、事務の危以て安くすへし、請ふ、先つ一藩士民に諭告するに、大義座視すへからざるを以てし、次に長藩の君臣と相誓約するに、丁卯の時事を以てし、然して後二藩齊しく闕下に趨り、朝貴を輔佐し、肥・豫諸公を誘勸し、至誠惻怛、天下を感動せは、則人材彙進、紀綱張るへし、義者或は謂ふ、薩・長をして大政に関せしむ、恐くは朝廷偏信の譏を

致さんと、是然らず、壬戌以来王事に執筆するものは薩・長なり、大政復古を創むるものは薩・長なり、封土奉還を唱るものは薩・長なり、天下薩・長の動静を伺ひ、薩・長に因て而して進退す、且つ薩・長誠に強力なり、之を朝廷に用ゐるして、而して之を其藩に蓄ふ、す脱立是朝廷自ら弱きなり、議者又謂ふ、薩・長性質相反す、強ひて之を合さんと欲するは、則不可なりと、是又然らず、設令勤王の大義已に同じ、性質も亦同じきなり、前日同一の性質にして而して合するもの、今日忽ち相反するか如し他なし、区々の私見に局して、而して竟に大同の道を失ふのみ、豈愧つへきの甚きに非ずや、二藩は朝廷の柱石、邦家の命脈なり、二藩合はされは則朝廷何を以て立たん、邦家何を以て存せん、去年以來頗る相悪しきの説あり、此憂国者の慨嘆する所、而して不逞の徒窃に喜ぶ所、況んや魯国北地を窺ひ、英・佛内訌を幸とす、今二藩合はさるの故を以て、内は叛乱を招き、外は敵国に資し、垂成の大業を棄つ、至誠国を為むるもの、固より此の如き歟、

五四二 海外旅行ニ関スル条規ヲ更定ス

一月十九日

朝廷ニテハ、海外旅行ニ関スル条規ヲ更定ス、

正月十九日

御布告写

外国航海之儀出願之規則向後左之通

一 帯刀以上之者ハ管轄府藩県へ願出、府藩県ニ於テ篤ト取札之上、外務省へ相伺、弥不都合之廉無之候ハ、御印章御渡、開港場ヨリ乗船御許容可相成候事、一 其余之者ハ、管轄府藩県ニテ相札、不都合之廉モ無之候ハ、其旨書面ニ認メ当人へ相渡、開港場裁判所へ右書面持参願出可申、同所ニ於テ更ニ当人札方是迄之通相心得、弥以不都合之儀モ無之候ハ、同所ヨリ直ニ御印章相渡、追テ外務省へ相届可申事、右之外総テ先般御布告之通ニ有之候間、府藩県共其旨可相心得事、

五四三 藩庁諸郷士族ト城下士族ノ養子縁組ヲ許

サス

一月廿日

監守セシム

藩庁ニテハ、尔後其嫡庶並ニ血統連続明白ナル者ノ外、諸郷士族ト城下士族ノ間ニ於テ、養子縁組ヲ許サス、

一鹿兒島士族無之、（郷士族ノ）同士族之内より養子相当之者無之、

無拠諸郷士族より養子願ニ付テは、嫡庶之外は父子兄弟孫又ハ兄弟之子迄、血統慥成者は御免可被仰付候、

但姉妹之子は本文通ニは不被仰付候、

一附士並附属長江足輕又は附属より之養子成は、右ニ可準候、

一右外格外より養子成ハ、父子兄弟及び孫迄血筋正敷者は御免可被仰付候、

但娘之子共は本文通ニは不被仰付候、

右は諸郷士族より鹿兒島士族江養子成、又は格下之者より養子之儀、嫡庶並血統連続明白成者之分は、御免可被仰付候旨被仰渡置候処、其後追々遠き統合之申立を以、養子願出候者不少、御取扱之妨相成候付、以来

右箇条之外妄リニ願出間敷、此旨向々江可申渡候、

明治三年正月廿日

知政所

五四四 弾正大忠海江田信義ヲ鹿兒島藩ニ附シテ

一月二十日

客冬停刑ノ事ヲ審問シ、弾正大忠海江田信義義次ヲ鹿兒島

藩ニ附シテ之ヲ監守セシム、

五四四ノ一

厥後數日にして留守長官より、海江田並に門脇大忠名

正造因を城内に召す、二人之に応して抵れば、則ち長官

門脇・大久保及び岩下今方平其他數人儼然として列座し、

大政官よりの達書を伝告せり、曰く、

糺問之筋有之候に付、至急東京へ可罷出候事、

略中

今日着京候間、此段御届申上候事、

と記し、各々人を遣はして之ヲ呈出シ、相別れて門脇

は因州邸に赴き、海江田ハ鷲屋に投せり、而して屈書

の太政官に到達するや、即時に官より「謹慎して御沙

汰を待つへし」との旨を命し、尋て十九日明治三年正月彈正台

より出頭を命して曰く、

糺問之筋有之に付、明二十日四ツ時出頭可有之事、

略中

糺問中鹿兒島藩へ御預け被仰付候事、

略○下

五四四ノ二

略○上

同月○正
月八日

右大臣殿館へ御召ニ付、夕方ヨリ参向、岩倉殿・安岡

大忠モ参会、西京彈台一条ノ御尋ナリ、

略○中

同月九日

岩倉殿御召ニ付参向、海江田一条御話以下略

略○中

同月○正
月廿日

門脇・海江田糺弾之事、

渡邊大忠ヨリ一書到来ス、

同月廿一日

神田邸ニ行キ海江田ト会ス、

略○中

同月廿三日

再ヒ海江田・門脇糺問、

略○下

同月廿八日

○中略

海江田ヨリ安岡へ書状来リ、自分神田邸へ赴キ、同人

二面会ス、

略○下

同月○正
月廿七日

○中略

海江田・門脇口書ヲ差出ス、

略○下

五四四ノ三

鹿兒島県士族

海江田信義

〔武次〕
天保三壬辰年一月生

略○上

同月○明治
年七月二十日

一任刑部大丞、

同月廿一日

一任弾正大忠、

同年十二月廿四日

一糺問ノ筋有之候ニ付、至急東京へ可罷出候事、

同三年庚午正月廿日

一糺問中鹿兒島藩へ御預被仰付候事、

略○下

藩仕候、小子も幸御国船有之、明九日解纜仕候、不遠
歸東可仕候間、其上可申承候、旁奉得高慮度早々如此、
頓首、

正月八日

利通

岸良兄閣下

【参照一】

拜啓、弥以御無異御超歳被成御奉務候半、奉敬賀候、

然は此度在京中御匆匆之次第にて、甚遺憾奉存候、段

々御咄申上度義も有之候へ共、不能其儀、乍去粗御談

申上候通、此上彈台之処、是非此節之失策ヲ御補不被

成候てハ相済不申、是迄其益となる処ハ大ニ候得共、

亦其害も少なからず、兎角其場ニ踏懸り候へハ、他ヲ

見ルニ難く候て、しらすく公平ヲ失ひ候様成行もの

ニ可有之、仍て広く天下全面ニ眼ヲ注キ、小事ニ拘泥

せざる処肝要なるべし、小子不肖にして実ニ是迄事を

誤候義不少、今更慚愧仕候事而已御座候、畢竟事ヲ急

キ求る事ヲ成シ、一小廓之区分を脱却する不能、彼を

悪ミ是を愛し、実ニ男夫之所為に無之候間、天地と心

を同じ、古今ニ志を貫クヲ以目的とし候社至当なるへ

しと、乍不及折角励精仕候、海江田江も懇々示談仕置

候付、何卒尚又御熟考被下、御尽忠被成下度、千折万

【参照二】

弥以御安康御超歳被成御奉務候半、奉敬賀候、小子に

も京坂殊之外長滞在ニ相成候得共、幸ニ御国船便宜有

之、今日解纜仕候、然は京師大村罪人之御処置ニ就て

ハ、以之外なる次第にて、折柄踏懸り大に心配仕候、

兎角此上之処無致方、何れ

朝裁次第と存居候、海江田へハ此度は段々説得いたし、

論ヲ詰候、実に兼て生質丈之事と存申候、大村へ私怨

ヲ報候など、種々嫌疑ヲ受候へとも、厚ク承試候得ハ

全其趣意ハ無之、畢竟

朝廷之御為になるましと之過慮より起り候事ニ御座

候、尤此条ハ一人而已ならず、門脇ニおひても同断之

事ニ御座候、誠ニ輕重ヲ失、条理ヲ弁せざる之甚ニ御

座候、海江田発足之日も参候付、此上之処懇々相談置、

必しも事激ニ出さる様致呉度、万端穩当ニ無之ては、必大道を失候事古今同轍ニ候間、是非々々不怨天、不尤人、過失ハあく迄も伏罪之外無之と申入置候、随分同意ニて、当人も相決候様子ニ御座候、門脇よりも只不堪遺憾ハ、頻ニ草莽之説ニ煽動いたされ候様見受られ候半、実ニ以左様之義に無之、全ク台中而已之見込ヲ以、一函ニ

朝廷之御為相成ならざると之旨趣ニて申上候赤心ニ候得ハ、夫丈ハ洞察イタシ呉候様承申候、乍去右等之情実は申立候ても、今日ニ至り候ては、相立候訳ニ無之時宜合ニ御座候、副島參議よりも情実有之候ハ、申越候様申来候へ共、今更弁シ候ても無益ニて、態と委細ハ不申越候、何分ニも大礼ヲ失候事不得止事ニ相考候、海江田も只々一向之性質ニて甚念遣、飽迄忠告ハいたし置候得共、偏頗ニ陥らざる様ニと想像いたし居申候、只形行申上置候間、御含居可被下候、貴兄よりも厚御示諭御頼申上候、

一京師・大坂も格別相変候事も無御座候へとも、何分情実通兼候事多々有之、大坂も兎角内情六か舗由ニ被聞申候、木場も少々小言出候向ニ候へ共、万事穩ニ罷在

候様申入置候、何れ当春中に今一ツ根本相立候上ならてハ、何事もいけ不申候、大坂府ハ人少ニて、別て差支、権大參事御居被下候様分て承候、就て小倉建野郷三か、平戸之安藤庄兵衛か、待詔より御出シ被成候て可然相考、副島迄申越置候へ共、尚又相考候処、是以先当分通にて、追て精撰之上被仰付候ても宜舗候半と奉存候、乍去随分右兩人ハ任にハ堪可申候間、御評議ニ異条無御座候ハ、今日被仰付候ても失策は有之ましく奉存候間、此一条ハ副島迄御咄置可被下候、

正月十日

大久保

兵庫港より

吉井君

尚々、長藏江も久々振面会、此比別て壮健、案外ニ御座候、しかしそろ／＼おふちやく編は善じまり候由、忠告共いたし置申候、

五四五 旧本丸跡ニ於テ兵式天覽日限ヲ定ム

一月廿八日

旧本丸跡ニ於テ、兵式天覽日限ヲ定ム、

〔第六十三〕正月二十八日（兵部省）

明廿九日、本丸ニ於テ兵式 天覽被 仰出候事、

但第十一字着到之事、

同月○正廿八日

略○上

諸藩操練

天覽○以下

五四七 外務卿澤宣嘉・同大輔寺島宗則西班牙国

条約交換ノ事ヲ掌ル

一月廿九日

外務大輔寺島宗則藏陶（外務卿澤宣嘉旧堂上ト共ニ）ヲ西班牙

国条約交換ノ事ヲ掌ラシム、
五四七ノ

御沙汰書写

澤 外務卿

寺島外務大輔

西班牙国和親貿易条約取結之全権御委任被仰付候事、

五四七ノ二

鹿兒島県士族

寺島宗則

五四六 鹿兒島藩知事二月中月番届ヲ提出ス

正月廿八日

鹿兒島藩知事島津忠義二月中月番届ヲ提出ス、

午二月中触頭月番鹿兒島藩知事相勤申候、此段御届申

上候、以上、

鹿兒島藩

正月廿八日

小野半左衛門

留守官

御伝達所

同○明三年庚午正月廿九日

一西班牙国和親貿易条約取結之全権御委任被仰付候事、

略○下

五四八 島津久光・忠義父子叙位・賞秩ヲ奉還セン

コトヲ請フ

是月(一月)

久光・忠義両公更ニ官位ヲ辞センコトヲ請ヒ、且ツ賜フ
処ノ禄並ニ金ヲ以テ、外債及ヒ軍資ノ一助ニ供センコト
ヲ懇請ス、

是月^{○明治三}、公從三位公ト連署上表シテ、叙位・賞秩

ヲ奉還セント請フ、是ヨリ先キ、両公再三辞表ヲ上ル、

聖諭アリ、叡慮深厚、決シテ固辞ス可カラスト、公等

中心ニ安ンセスト雖、敢テ復タ請ハス、追贈ノ恩命齊

彬公ニ下タルニ及テ以為ク、父子力ヲ王事ニ竭スヲ得

ルモノ、先公ノ余慶ニ由ル、天恩優渥、先公ノ功德ヲ

無窮ニ伝フ、若シ父子非次ノ寵秩ヲ拝受セハ、褒賞ヲ

重ヌルノ恐アリト、是ニ至テ更ニ申請ス、其文ニ曰ク、

臣久光・臣忠義言ス、伏テ以レハ、昨年夏 宣旨ヲ

蒙リ、積年勤 王并征賊ノ功劳ニ依リ、臣父子顯位

ノ美官ニ叙任ス、 皇恩隆渥、臣久光・臣忠義実ニ

不任感激誠喜之至ニ、伏テ惟ルニ、醜賊從服、 皇

綱反正ニ至テハ、皆 陛下ノ威徳 列聖ノ神靈ニ由

ル所、臣父子涓埃ノ微功、敢殊恩ヲ叨ニスヘケムヤ、

故ニ所賜ノ位記・賞秩ヲ封還シテ、屢々臣父子ノ衷

情ヲ懇請スト雖モ、 陛下是ヲ許タマハス、強テ請

トキハ、則 詔意ニ戻リ 聖恩ヲ薄スルニ似タリ、

不得已シテ微功ヲ故薩摩守齊彬ニ推シ、基ケテ深心

腸ヲ吐露スルノ所、 聖明齊彬カ勤 王ノ旧功ヲ録

シテ、己巳十一月齊彬ニ贈從一位ヲ賜フ、臣父子実ニ

不次ノ 恩命ヲ拝シテ、不任感佩悚懼之至ニ、伏テ惟

ルニ、爰ニ至テ 陛下臣父子ヲ賞シテ、數ハ止タマハ

サルノ 聖意初テ滿チ、臣父子屢々辞シテ懇請スル

ノ赤心全ク足レリ、謹テ所賜ノ贈位記ヲ以テ齊彬ノ

靈ニ告示シテ、 皇恩ノ鴻大ナルヲ奉拝テ臣父子叙

位・賞秩返献ノ如キ、再三懇辞ニ至ルト雖、猶不許、

深厚ノ 聖慮ヲ以テ所賜、決シテ不可固辞ト、更ニ

綸言ヲ蒙リ、臣父子今ハ乃辞セント欲テ、百万赤誠

ヲ演ルニ詞ナシ、 聖諭ニ随テ、唯命ノマ、之ヲ奉

ス、而反覆熟思スルニ、臣父子中心更ニ不安アリ、

既ニ齊彬位階追贈ノ 恩命ヲ蒙リ、其旧勲ヲ録シ賜

フ、臣父子栄功望外ニ出テ、余慶ヲ無窮ニ伝フ、又

更ニ何ヲカ望ンヤ、今臣父子ニ至テモ、亦顯位ニ昇

進シテ非次ノ寵秩ヲ甘シ受ルニ及テハ、賞賜ヲ重複

スルニ当ル、実ニ不任恐懼ニ、是臣父子辞テ不止ノ

至情、敢テ 詔意ニ触ルニアラス、伏テ願クハ、

聖明臣父子カ惴切ヲ憐ミ、所請ヲ許可シタマヘ、臣
久光・臣忠義不任誠款誠懼之至ニ、謹テ奉表拜辭、
誠恐誠惶頓首謹白、

庚午正月

島津久光

島津忠義

外債及ヒ海陸ノ軍費万一二供シ、国家多事ノ後ヲ善
スルノ一助トセント欲ス、伏テ願クハ、聖明臣父
子カ丹心ヲ照鑑シ賜ヘ、臣久光・臣忠義誠恐誠惶謹
以聞、

庚午正月

島津久光

島津忠義

尋テ連署シテ、米拾壹万七千七百六拾四石、金拾六万
九千七百九拾九兩壹歩參朱ヲ献シ、外債及海陸軍費ノ
用ニ供センコトヲ請フ、其文ニ曰ク、

臣久光・臣忠義言ス、伏テ以ルニ、方今海内干戈初

テ治テ、瘡痍方ニ癒ユ、蒼生各其所ヲ得テ、四民共

ニ其業ニ復ス、百度維新ノ運ニ当リ、大綱宏張ノ時

ニ臨ンテ、聖明上ニ立チ賢哲下ニ在リ、策謨不善

ナカルヘシト雖、内ハ兵馬ノ儲備、外ハ蕃国ノ交際

アリテ冗費ナリ、此時ニアタリテ会計理財ノ事務ヲ

至要トス、臣父子窃ニ憂フ、旧政府ノ積債外邦ニ夥

多ニシテ、今 天朝其宿弊ヲ受ケ、是ヲ償フニ至テ

ハ、実ニ易々ナラス、其害モ亦細小ナラス、伏テ惟

ルニ、眷々ノ情日夜不可已ム、今別紙具載スル所ノ

員數ノ如ク、祿並金謹テ之ヲ闕下ニ奉獻ス、此聊カ

別紙

一御米拾壹万七千七百六拾四石

一御金拾六万九千七百九拾九兩壹歩參朱

以上

島津久光

島津忠義

五四九 藩庁軍艦並ニ商船乗組ノ水夫總長以下ノ

資格俸祿ヲ定ム

是月(二月)

藩庁ニテハ、軍艦並ニ商船乗組ノ水夫總長以下ノ資格俸

祿ヲ定ム、

御軍艦方附士等軍務局支配被仰付、御軍艦又は商

船方等江相勤候水夫総長以下、夫々差別被相定候付、御当地並久見崎居住之軍艦方附士等、御取扱之次第以来左之通、

一 士族より御軍艦乗付相勤候儀は別段之事候得共、商船之水夫頭以下之勤は、名儀不相当之事候付、以来屹と不被仰付候条、当分相勤候人数も都て被廢候、尤人材ニ依は夫々相当之職務可被仰付候、

一 水夫総長之名目は御軍艦乗付ニ限り被相定、其余は都て被廢候、

但是迄三等水夫総長にて、生産方並商船江相勤来候者共は、尚又吟味之上一等水夫頭申付候、

一 御軍艦乗付勤之人数は、何篇是迄之通被仰付置候条、生産方江相勤候楫取以下、並商船江乗付同断之者共は、都て可為無刀候、

一 此節廢職之面々江は、来未十二月限御養料米四石被成下候、

一 二等水夫頭以下之儀、応勤日数昼飯米七合五勺ツ、被成下来候得共、外々江不並付、以来五合ツ、被成下候、
一 一等水夫総長俸禄拾石被成下、左候て士族以下之者江右勤方被仰付候節は、一代士族被仰付候、

一 二等水夫総長之儀、附士以下之者江被仰付候節は、一代軍艦方附士被仰付候、

一 三等水夫総長之儀、右同断軍艦方附士被仰付候、

一 一等機械方俸禄拾石被成下候、左候て士族以下江右勤方被仰付候節は、一代士族被仰付候、

一 二等機械方之儀、附士以下之者江相勤被仰付候節は、

一代軍艦方附士被仰付候、

一 三等機械方之儀、右同断一代附士被仰付候、

右之通被仰付候条、右ヶ条之通致取扱、申出候儀は其通可有之候、此旨軍務總裁並會計總裁江申渡、可承向

江も可申渡候、

明治三年

正月

知政所

五五〇 藩庁医学校並病院ノ改革ヲ行フ

是月(一月)

藩庁ニテハ、医学校並二病院ノ改革ヲ行ヒ、各分科ヲ定メ、学校教授ヲシテ病院掛ヲ兼ネシム、
五五〇、一 医学校官等

官等三等

一学頭

主宰札判校事

同四等

一一等教授

主宰教試生徒病院治療

同五等

一二等教授

主宰同一等教授

同六等

一一等助教

主宰監学寮生徒会頭治療

同七等

一二等助教

主宰同一等助教

同八等

一都講

主宰会頭治療

同九等

一一等授読

主宰授読会頭処方

同十等

一二等授読

主宰授読会頭

同十一等

一三等授読

主宰同一等授読

等外

一授読試補

主宰授読

以上

学科

一学頭

眼科・産科一切治療並薬剤繙帶等

一等

二等

一教授

一教授

外科書

内科書

一等

二等

一助教

一助教

病理書

生理書

- 一 都講
- 解剖書
- 二等
- 一 授読
- 究理書
- 一 授読試補
- 文法書
- 以上
- 病院官等
- 官等七等
- 一大療頭
- 主宰訳書会頭病院治療
- 同八等
- 一中療頭
- 主宰同大療頭
- 同九等
- 一少療頭
- 主宰訳書会頭処方
- 同十等
- 同等
- 一 授読
- 分析書
- 三等
- 一 授読
- 算学

一 史生

一 藥局掛

原生

主宰調藥

同等

一看頭

主宰患者応接病室

同十一等

一種痘兼器械掛

主宰種痘器械

同等

一 製藥掛

主宰製藥

以上

医学校兼病院官等之儀、此節更ニ別紙三通之通御交革被仰付、授読以上相勤候面々一同被免候、左候て月給並俸祿之儀は、皆共当分之通被下置、差当医学校掛ニて分科被 仰付置候、追て其任ニ堪候向江至当之官職被仰付候旨、被 仰達候条、可承向々江可申渡候、

明治三年正月

知政所

藤田圭甫

新宮拙藏

山本淳輔

奥山玄良

永井文齋

右は医学校御用掛並兼病院掛被成御頼度思召候間、此旨可申達候、

明治三年正月

知政所

石神良策

足立慎吾

有馬意運

山下弘平

右は医学校御用掛並兼病院掛被仰付候条可申渡候、

明治三年正月

知政所

【参照一】

史談会速記録第六十輯(前田元温談話) 明治廿八年三月二十五日午前 前田元温君宅ニ於テ開會

〔頭註〕前田元温初名ハ信輔、十六ニシテ医者ニナツタ、時ニ榎隆ト云ヒ、後チ親
○上ニ據ニ参内をするから、私に出て来いと藩邸の方か
ヲ失ヒ、家督シテ香齋ト云ヒ、又後ニ信輔トナツテ、其後チ元温トナツタ
ラ云ふて来た、もう其時は戦ハドク、始つて居つた、
それから直に忠義公も御参内と云ふ事で、御側御用人

の嶋津求母から、早々来いと云ふ事て出た処が、参内の御供をする様にと云ふ事である、條公も御参内になつて居るから、都合も宜からうと云ふ事てあつた、大山格之助・西郷隆盛・木戸杯も行って居つた、井上杯も居つたが其時は戦争が始つて居つた、逢伏見ニ当て兵火が見へて居る、それから私は條公と忠義公と掛持ちて居る、あの晩は寒い晩である、正月の三日ではあるし、なか／＼寒い晩である、條公の方で酒を呑んで寒を防いだ、其晩に御供をして居つた、さうして愈々伏見・竹田街道共に幕兵が負けたと云ふ事になつて、其供をして歸つた、さうすると病院に出勤せよと云ふ事になつた、私に主宰して遣つて呉れと隆盛達が云ふから、主宰をして遣つた、さうすると其中に追々手負が来て、死んで来るやら、傷口を検めるやらする事を遣つて居つた、戦に行くに袴着ながら行って居つた、さうして追々手当をする中に、ドウしても充分に外科術は開けず、銃瘡人の取扱がいかなから、英国医を御雇になると云ふ事で、ウルユスに御頼みになつて、手術を施す事をした、諸藩の医者杯が拝見に来た事がある、外国医は薩摩に来たのが初めてである、今の宮内省

の侍医になつて居る岩佐純杯も来ました、以下下略

【参照二】

泰西の学我国に入りしより、百事一新、旧物皆革まる、中に就て医術の進歩最も著大なり、英国大医ウキリス氏の如き、即ち此進歩に与て多くの功勞を貽せしの人なり、抑も氏か我国に渡航するや、恰かも戊辰の變亂に遭遇す、当時我官軍に備聘せられて、櫛風沐雨の辛酸を嘗め、創者を療し病者を医し、官軍の病營依て以て安し、後役止み天下全く静謐、氏も亦其備を解るゝに当り、我薩藩の有司更に氏を招聘し、医学校并に病院を設立して学生を養成し、疾病者を救済するの道を開けり、蓋し本県に医術の旺盛を来す、之を其素因とす、明治丁丑の乱起るに及び、氏難を避けて本国に還る、今や我県大医輩出、或は公仕して位勲両ながら顯赫、或は自營して司命の重任を全ふする者、皆な氏か薰陶の鴻恩に因らざる無し、顧みれば氏の如き會に維新の當時、兵馬の間に馳驅せしの勞と、慶城後進子弟に恩師と仰望せらるゝ而已に非ず、又是れ我国文明の恩人と云ふも過賞に非ざる可し、頃者高弟等相謀りて其勲功を表彰し、其芳名を不朽に伝へんと欲し、

鶴嶺山下公園の勝地を卜して、頌徳の記念碑を建設す、

惟ふに将来勝景を茲に探る者、皆な此碑石を瞻仰せば、功徳永く後世に存して滅せざる可し、徳孤ならず、必ず隣あり、之氏の如き、夫れ此人耶、夫れ此人耶、

明治二十六年八月鶴城 元吉秀三郎誌

前田清廉謹書

五五一 藩庁島津家累代ノ墓所名ヲ改メテ諸所地名ニテ唱ヘシム

名ニテ唱ヘシム

是月(一月)

島津家累代ノ墓所名ヲ改メテ諸所地名ニテ唱ヘシム、

日本立寺

御墓之事

清水御墓

旧興國寺

御墓之事

高山御墓

旧隆盛院

御墓之事

草牟田ノ御墓

旧福昌寺

御墓之事

長谷場西ノ御墓

旧忠燈院

御墓之事

長谷場東ノ御墓

旧深固院

御墓之事

長谷場北ノ御墓

旧淨光明寺

御墓之事

上之原御墓

旧南林寺

御墓之事

大門口御墓

旧壽國寺

御墓之事

武ノ御墓

旧良英寺

御墓之事

田之浦御墓

旧大乘院内

鍋休丸様御墓之事

清水城下御墓

右は是迄銘々御墓所之儀、寺号を以相唱来候処、都て被廢候付、以来右之通、諸所地名を以相唱候様被 仰達候条、可承向江可申渡候、

明治三年正月

知政所

五五二 橋口與一郎ニ参政ヲ命ス

是月(二月)

橋口與一郎ニ参政ヲ命ス、

一 参政

橋口與一郎

右之通被 仰付候条、向々江申渡、御裏其外様江申上、佐土原江為知、中山王御承知候様、裏役頭並佐土原飯屋守・琉球館聞役江可申渡候、

正月

知政所

明治3年(1870)

五五三 人別取調方ノ管轄ヲ会計局ヨリ民事局へ

移ス

是月(二月)

人別取調方ノ管轄ヲ会計局ヨリ民事局へ移ス、

一人別取調方之儀、会計局より掌居候得共、右は民事局

委任当然之事柄ニ付、以来同局江被隸、鹿兒島は勿論、

諸郷版籍戸口増減等専支配役取しらへ、猶又總裁・奉

行より致指揮、嚴密行届候様可取計旨被 仰達候条、

此旨民事總裁並会計總裁江申渡、向々江も可申渡候、

明治三年

正月

知政所

五五四 藩庁遊軍隊生兵局人数ヲ撤廢ス

是月(二月)

遊軍隊生兵局人数ヲ撤廢ス、

一遊軍隊生兵局人数被廢候旨、被

仰達候条、軍務局總裁江申渡、向々江も可申渡候、

明治三年

正月

知政所

五五五 藩庁神社奉行副役・同見習・神社方筆者ヲ

廢シ神事調役ヲ置ク

是月(一月)

神社奉行副役・同見習・神社方筆者ヲ廢シ、更ニ神事調

役ヲ置ク、

一神社奉行

右別段不被召建、神事惣判之儀ハ執政江被任候、

一神事調役

右五等官書記次ニ被召建候、

一右同助

右七等官書記見習次ニ被召建候、

一神社奉行副役

一右同見習

一神社方筆者

右三行被廢候、

右は神祇祭典之儀は至重之事件ニテ、執政之委任当然
之事候付、右之通職制被相替候旨被 仰達候条、是迄

神社方江相付申出候儀は、以来伝事江相付可申出候、
此旨向々江可申渡候、

明治三年
正月

知政所

但職制書別紙之通被相改候、

明治三年

正月

知政所

(別紙)

執政

朝政ヲ奉体シ、紀綱ニ主持シ、神事ヲ惣判シ、諸官

ヲ統領シ云々、

神事調役

藩内神社・陵墓・祭典等ノ事ヲ議処スルヲ掌ル、

五五六 藩庁糺明局ヲ移転シ糺明所ト改称ス

是月(一月)

糺明局ヲ移転シ糺明所ト改称ス、

一糺明局之儀、本組方跡江転局被仰付、跡場所は以前之

通糺明席ニ被召建、糺明所と名目被相替候、左候て本

出張海軍所跡江典獄並附士詰所被仰付候条、糺明総裁

江申渡、可承向々江も可申渡候、